

今号の特集

催眠

応募すれば絶対貰える！ 催眠ソフトプレゼント!!!

プロ催眠術師・ブラックキャット監修

表紙のピンナップテレホンカード
応募者全員サービス

二次元

ドリームマガジン

2D DREAM MAGAZINE

平成25年10月1日発行第10巻第6号通巻35号

cover illustration by りゅうき夕海

成年向け雑誌

連載&読み切り小説

淫堕の姫騎士ジャンヌ

美姫転生

筑摩十幸×木ノ崎由貴×桜沢大

対魔忍アサギ3

Kyphosus×電脳×Anime LILITH

新居佑×sian

筑摩十幸×助三郎

大熊理喜×牡丹

夜士郎×くろいわしんじ

清水勝治×ロッコ

着井村正×ばふえ

舞麗珠×りゅうき夕海

山本沙姫×あーや

えっちマンガ
&4コママンガ

ばふえ

おただけし

助三郎

天海雪乃

あらくれ

嘉納あいら

カラーピンナップ

木ノ崎由貴

田中盼

りゅうき夕海

立ち読み版

DIGITAL EDITION vol.72 2013 10

催眠
特集

罠に堕ちた ティファナ姫

淫辱の催眠社交レッスン

小説
NOVEL

まいれいじ
舞麗辞

挿絵
ILLUSTRATION

りゅうき夕海

蕩けた瞳に映るのは
己を満足させてくれる殿方ばかり……

心地よい夏風が吹き抜ける昼下がり。大園ルーゼランドの王城のテラスでは、一組の若い男女が向かい合うようにして手を取り合っていた。

「ティアアナ：僕はもうっ——!!」

熱い口調でそう迫るのは小奇麗なシルクのシャツを身に纏った銀髪的美青年。ここルーゼランドの次期国王・カイルIIアーガイルIIルーゼランド王子だ。

「そんな……だっ、だめですよカイルっ……」

そんな王子に手を取られ困惑するように身を固くしているのは、豪華なドレスで着飾った一人の令嬢だった。

髪はウェーブがかかった艶やかな亜麻色で、大きな瞳はサファイアのような澄んだブルー。長い睫に彩られた青い瞳は見るからに優しげで、口元に湛えた柔らかな微笑もその印象をより強く感じさせる。

頬のあたりに健康的な赤みの差した透き通らんばかりの白磁の肌と桜貝のように整った爪を持つ美しい細指は、たとえドレスを身に纏っていないくても彼女が農作業とは縁のない高貴な身の上だと知れた。

令嬢の名はティアアナIIフロレス。大陸でも美姫と名高いフロレス王家の息女だ。

カイル王子とティアアナ姫といえど誰もが羨む美男美女の婚約者として大陸中に知られた存在である。現にこうして週に一度は姫君が王子の元を訪ね、仲睦まじく逢瀬を楽しんでいるのだが――。

「そりゃ確かに僕はまだ結婚こそしていないけど……キスクらい、いいじゃないか」

王子はじれったそうに姫君の瞳を見つめ口付けをせがむも、

「だつてわたくし、綺麗な身体で貴方の元に嫁ぎたいんですもの――」

貞操観念の強いフロレス家の息女は困ったように眉を寄せつつ首を横に振るばかり。

「それは分かるけど……僕はもう我慢できないよ」

王子は彼女の肩を抱き、強引に唇を奪おうとする。「いつ、いけませんカイル……」

口ではなおもそう言いながら、本当は自分でも愛しい婚約者を受け入れたい姫君は彼に押し切られる形でその両目を閉じ、軽く唇を突き出す。

そして王子と王女はどうとう初めての接吻を――。「あくら、楽しそうですわねお兄さまがた？」

ぎゅうっ!

――交わそうとしたところで、場に似つかわしくない明るい声がファーストキスを遮った。同時にカイルの首に細長い少女の腕がしゅるりと絡みつく。

「しっ、シャルロット!」

驚きの声を上げる王子の背中には、彼同様美しい銀髪を持つ少女が負ぶさっていた。カイルの妹であるルーゼランドの第一王女・シャルロット姫だ。

「テラスを貸切にして、お二人で何のお話でしたのオ? わたくしも混ぜて欲しいですわ!」

少女は子猫みたいに大きな釣り目を左右に振りながら兄とその婚約者と一緒に問いかける。

「こっ、子供には関係のないことだよ……」

せつかくのキスのチャンスをついにされた王子が少し腹を立ててそう言うけど、

「もうっ秘密だなんて妬けますわねえ。そんなこと言つてるとお姉さまを横取りしちゃうますわよ!」

銀髪の少女はイタズラっぽい微笑で言いながら、今度はティアアナへと抱き付いて頬ずりをする。

「だいたいお二人とも、今はいいですけど夜の晩餐会ではベタバタし過ぎないでくださいましね? お城が嫉妬の炎で火事になったら大変ですよ!」

シャルロットはマセた物言いで純情カッブルをいだけ冷かすと、満足したようにテラスを後にした。

「やれやれ、行つたか……ごめんよティアアナ。またたくいつまでも子供なんだから困つたものだよ!」

シャルロットの背中を見送りながら苦笑いを浮か

べる王子だが、その口調からはそんな妹を憎からず思っている様子が垣間見える。彼のそんな優しいところが、ティアアナは大好きだった。

「そんなことありませんわ。シャルちゃん、とつてもいい子ですよ!」

だから姫君も婚約者の言葉をやんわりと否定する。それに彼女がそう言い切るのには理由があった。

それは――。

※

盛大な晩餐会が終わり、月と星と静寂が支配する真夜中。銀髪の姫君に手を引かれ、ティアアナは深夜の城内へと繰り出す。こんな時間だというのに二人は晩餐会の時と同じドレス姿だ。

初めての時はランプやロウソクの明かりが作る自分の影さえ少し怖かったものだが、今ではすっかり慣れっこだ。それどころか口うるさい侍女のいる自分のお城では味わえない夜更かしのちよつと大人な気分まで楽しめるまでになっていた。

そう、姫君がこうして夜中にシャルロットに連れ出されるのは今宵が初めてのことでなかった。

「さあ、着きましたわよ!」

長い螺旋回廊を下り辿り着いたのは大きな扉の前。先ほどまで楽しい晩餐会の催されていた大ホールだ。扉を開けば中には煌々とした明かりが灯っており、既に人もたくさん待つていた。晩餐会ほどではないがそれでも結構な数で、その全員が男性だった。

――事の起こりは初めてこちらの城に招かれた時にまで遡る。晩餐会でティアアナは他国の貴族からダンスを申し込まれたのだが……困つたことに彼女、そういつた心得を全く持っていない自分が助けてくれた恩人こそ、このシャルロットだった。

「姫様はお風邪を召しております。よろしければ代わりにわたくしがお相手させていただきますわ!」

そんな彼女のフォローのおかげでティファアナは恥をかかずに済んだ。それ以来、城に招かれるたびこうして夜中にこっそりとホールを借り切つてシャルロットから淑女としての手解きを受けているのだ。

自分より年下の少女にレッスンを受けるなんて少し恥ずかしいが、自分は元々のろまだし少々甘やかされて育てられたという自覚もある。その点シャルロットは所作も気遣いも行き届いており、実際のレッスんだつてカイルには内緒で、という彼女の心配りでこうして夜中に時間を作ってもらつていた。

「いつもありがとう……シャルちゃんみたいないい子を妹にできるだなんて、わたくし幸せ者ね」

「ふふ、未来の家族としてこれくらい当然ですわ」
殊勝なことを言いながら、プラチナブロードの妹姫は傍に置かれた金色の鈴を手にとるとそれを高らかに打ち鳴らす。それがレッスン開始の合図だつた。

この鈴の音は人をリラククスさせる効果があるとかで、事実ティファアナはこれを聞くたび頭の中がジンと疼きなんだかとてもいい心地がした。

そんなこちらの様子をシャルロットは目を細めながら見つめている。どうしてだろう。ティファアナはなぜかそれが……獲物を狙う猫のように見えた。

※

「さて、そろそろいいかしら。お姉さま？」

「はい……何がよろしいの？」

シャルロットの方に振り向いたティファアナは、まるで強い酒でも煽つたように頬を紅潮させ、とろんとした目つきで彼女を見た。

「ふふ、なんでもないですわ——さあさ、いつものように皆さんにすっかり淑女としての社交マナーをレクチャーしてもらいましようね？」

「はい……」

少女の言葉に頷いた姫君は優雅な足取りで進み出て、ちょうどホールの真ん中に吊るされた豪華なシ

ヤンデリアの明かりの下にその身を置く。

「それではお姉さま、まずはいつものご挨拶からやつてみましょうか——今宵でもう十回目ですもの、お一人でちゃんとできますわよね？」

「ご挨拶……ええ、もちろん心得ておりますわ」
シャルロットが促すと垂麻色の髪は得意そうに頷いて、恭しく膝を曲げ上品な手つきでスカートを摘んでみせる。

そこまでなら、先ほどの晩餐会でも見せた仕草だつたが——姫君は突然くるりと踵を返し、挨拶を交わすべく男に背を向けた。更に摘んだスカートをかざると、まるでカンカンの踊り子みたいに大きく捲り上げ自らの尻を晒してみせたではないか。雪色の太腿はおろか、シルクのショーツに包まれた美臀までもが衆人の目に隠しようもなく晒された。

しかし姫君はといえば下着を丸出しにした破廉恥な格好にもかかわらず平然としており、

「ごきげん麗しゅう」

ふんわりとした上品な笑顔を浮かべながら、一礼する代わりに曝け出した尻尻をくいつと突き出して挨拶を交わす。むつちりと脂の乗った尻尻はその桃房の下弦がショーツの裾からぶんにゆりとはみ出して、ヤンデリアの強い明かりに照らされてさながら真珠のように輝いて見えた。

「ふふつ、お上手なお姉さま……でもお胸が隠れたままじゃやない。お兄さまを誑かしたそのはしたない大きなお胸も使つてちゃんとご挨拶なさいな」
姫君の乱心に輪をかけて非常識な指摘をするシャルロットだが、

「そつ、そつでしたわね……駄目ねわたくしつたら——こちらでもしつかりご挨拶しなくては、失礼ですものね？」

指摘を受けたティファアナは自分の至らなさを恥じるように肩を竦めると、尻を捲つた売女のような

姿勢はそのままに自らドレスの胸元をぐいっと下に引き降ろして一思いに二つの乳釣鐘を剥く。

ふるんっ！

零れ落ちた双球はその一方だけでも大の男の手に余るほど豊満で、先端の桃色突起は既に充血してピンと天井を向いて尖つていた。張りのある母乳を前に男たちの間で下卑た笑いと溜息が同時に漏れる。「それでは改めまして——ごきげん麗しゅうございませうね」

肩越しに甘い笑顔を振りまきながら、ティファアナは再度頭を垂れ男に向けて美臀を掲げてみせる。

「くくくつ、さすがフロレス王家の息女。物腰が実にご上品ですなあ！」

はしたない挨拶を受けた男が含み笑いとともにもその白尻尻をパシリと打つ。身体を突き抜ける衝撃に、前屈みのためよりポリウムを増して見える二つの乳釣鐘がプルンツと何とも柔らかそうに打ち合った。

「ひゃんっ♥ あつ、ありがとうございませう……これも皆さんのご指導のおかげですうつ」

無礼な仕打ちにも姫君は嬉しそうに声を上げ、更なるスパキンキングをねだるように自分を取り囲む男たち一人一人に背を向けては同様の尻挨拶を披露する。そしてそのたび、まるで芸をしたベットにご褒美でもやるみたいに男たちは姫君の肉桃を気安く打ち据えてゆく。おかげで集まった男たち全員に挨拶を終える頃には雪色の尻尻はまるでシルクにいちご水を染み込ませたみたいに赤く色づいていった。

「はい、よくできました……つて、あらッ お姉さまつてばもうおパンツを濡らつたらつしやるの？」

最後の男に挨拶を終えてもスカートをからげたままのティファアナに近づいた銀髪姫が姉姫の恥ずかしい変化を目ざとく指摘してきた。なるほどその言葉の通り、姫君のショーツはそのクロッチの部分にじわりとシミが広がっているように見受けられた。

しかし当のティアファナとはいえば、
「えっ……そつ、そんなはずありませんわ！ ご挨拶で感じてしまうだなんて、わたくしそんなふしだらな女ではありませんもの！」
シャルロットの言葉に心外だと言わんばかりに口を尖らせ反論する。そんな彼女の様子に、周りの男たちが堪えきれずにニヤニヤと口元を綻ばせた。

「へへ、ふしだらな女じゃないだつてよ。ご自分じや本気でコレが淑女のおつもりらしいぜ」
「つくづくシャルロット様の催眠術は恐ろしいや」
「でも、俺たちにとってはありがたいお力だがな」
そんな陰口を叩きあう男たちの言葉を遮るように、

「わたくしの見間違いでしたかしら……それなら次は殿方のお■ん■んにご挨拶いたしましょうか？」
シャルロットは次なる課題をティアファナへと命じる。それを聞いた瞬間、姫君の目の色が変わった。

「お■ん■んっ♥ はいっ！ わたくし、お■ん■んへのご挨拶は大得意なんですのよっ？」
侍女が聞いたら卒倒しそうな台詞を口にしたティアファナは待ちきれないといった面持ちで、今にも舌なめずりしそうなほどだ。周囲の男たちもまた我先にと競い合うようにして彼女へと群がり列をなす。

「それでは貴方のお■ん■んからご挨拶、させていただきますね？」
まるで馬車の中から国民に挨拶する時みたい屈託のない笑顔を振りまきつつ、ティアファナは男の足元に傳く。目の前には既にズボンの布地を突き破らんばかりに隆起した牡性器が待っていた。

「まあ、わたくしのためにこんなに大きくしていただいて——光栄ですわ」
うつとりした目でそう言つて、姫君は男の股間に鼻先を埋めるとそのまま深く息を吸い込む。

「んっ……ふああ……すごいニオイっ♥」
それから姫君は男のズボンを、続いて下着まで、

まるで獣みたいに手を使わず前歯だけで器用に降ろしてゆく。これも今まで何度も教え込まれた成果だ。「んむうっ……やっと出ましたわ……あら、皮かむりさんなのですね？」

姫君の漏らした言葉に周囲の男がドツと笑う。なるほど目の前の男は持ち物こそ立派だったがその隆起した先端は芋虫みたいに包皮にくるまれたままだ。「うっ、うるせえっ……どうせお前はチポならなんでもいいんだろが？ ほら、もつと顔寄せろよ。それとも俺のチポは受け付けねえつてか？」

予期せずして恥をかかされた包茎男が凄むと、
「まあ、そんなこと?! 歴史あるフロ雷斯家の名にかけて、わたくしどんなお■ん■んにも礼儀を欠くような振舞いはいたしませんわ？」
姫君は慈愛の色さえ滲ませて微笑み、親愛の情を証だてるように左右の頬で勃起陰茎に優しく触れる。

「へへ、それでいいんだよ……ほら、次はニオイも嗅げよ？ 姫様の大好きなチポのニオイをよォ」
男に命じられたティアファナは亜麻色の髪を揺らせつつ皮からわずかに覗く亀頭に鼻先を近づけるとすんすん、と見たことのないエサを与えられた子犬みたいに鼻を鳴らす。

「ふああ、すごいっ……鼻の奥がツンツン痺れてっ……頭がクラクラしちやいますう……!!」
姫君は鼻先を勃起の先端にぐりぐりと擦り付けて一心に鼻呼吸を繰り返す。その様子はまるでトリュフを探す豚のよう。実際姫君は時折肉根に鼻腔を塞がれふがふがと下品な豚鼻まで鳴らして包茎ペニスの淫臭を嗅ぎ回る。一嗅ぎごとに姫君の頬は弛緩し、桜色の唇はだらしなくほどけて口元から唾液を垂れ流し、その瞳は淫らな鈍光に爛々と輝く。身体中の汗腺が開いたように、絹の肌に汗の玉が転がった。

ティアファナはしばし陶醉しきった媚顔で包茎ペニスの腐臭を夢中になって嗅ぎ回っていたが——。

「んああ……もう、我慢できませんっ♥」
はむっ！ やがて姫君は魚が釣り餌に食いつくみたいに、鼻先の陰茎を根元まで口に含んでしまった。「あら、まだ食べていいと言っていないのに。だめねえお姉さまは」

まるで蝶のできていない犬のような堪え性のなさに、コロコロと笑うシャルロット。
「ひやっへえっ……お■ん■ん、ニオイらけりや我慢れきにやかつひやんれすもろお……♥」
自分でもはしたないとこの自覚はあるのだろう。ティアファナは形良い眉を八の字に寄せて弁解する。しかし一度啜え込んだ男根は決して離そうとはせず、言い訳の言葉を紡ぐ間も美姫はうっとりとした目つきで口腔内の牡根に舌を這わせ続けていた。

「うおおっ、すげえ舌使いだっ……竿と皮の間でニユルニユルって蠢いてやがる……!!」
男は赤らんだ頬を緩ませきつた惚け顔で姫君の口淫奉仕に酔いしれる。

ティアファナはそのぼつてりとした唇をキュッと締め上げるようにして竿を抜きたてる。喉奥まで肉根を飲み込んで鼻先で剛毛を攪り、首を引いては先端だけを啜えるようにして亀頭とへばりついた余り皮の間を舌先でチロチロと舐めながら剥がしてゆく。

「んっ、ちゅぶっ、んっ、んむうっ……」
口淫奉仕に亜麻色の髪が揺れるたび、甘い少女の芳香が周囲に振りまかれて男たちをより興奮させた。「姫様、そのお手々でもお相手してくれよっ!!」

「おっ、俺も——!!」
姫君の痴態に待ちきれなくなった男らが左右から怒張を突きつけ殺到すると、

「ふあいつ、もちろん、お手々でもお……精一杯っ♥お相手させていただけますわ」
ティアファナは甘く蕩けた微笑を湛えつつ、すぐさま左右の手を伸ばしてペニスを抜いてやる。



アサギに科せられるのは
仲間たちとの陵辱デスマッチ！

対魔忍

NEAR FUTURE KUNOICHI ADVENTURE
TAIMANIN ASAGI 3

アサギ

～淫獄都市の雌忍～

最終話 雌忍達の狂宴

小説
NOVEL

キ
ヲ
オ
サ
ス
Kyphosus

挿絵
ILLUSTRATION

りんどう
竜胆

原作
ORIGINAL

Anime LiLiTH

登場人物紹介



井河 アサギ

天才的な剣術と体術。人知を超える光のスピードが武器。対魔忍養成学校・五車学園の校長も務める。



甲河 アスカ

孤高の「抜け」対魔忍。かつてはアサギの下でさくら、紫とともに任務に投入されるも、ある時から失踪する。



沢木 浩介

アサギの婚約者だった沢木恭介の弟。現在は魔科医フルストにより、人体圧縮魔術を施され肉塊に変えられている。

ノマドによって愛する浩介を奪われたアサギは救出に動くも、フルスト、そして誰にも捕えられ、触手調教の中で催眠刻印を施されることになる。同じ時、対抗していたさくら、紫、そしてアスカも彼らの毒牙にかかり、犯されることに

「[I] 暗闇の中で、四つの女体が絡まり合い、ぬめぬめと淫らに蠢いている。女達のうち、三人の肌は白く、一人は黒い。女達は、黒い一人を、白い三人が取り囲むようにして絡み合っている。

「あああああ、許してくださいっアサギ様あつ!! 無理っ、もう無理ですうううっ!!」

黒髪を振り乱す長身の女は対魔忍、八津紫。彼女の股間からは赤黒いペニスが屹立している。「魔科医」フルストによって植え付けられたもの。それが、黒く滑らかな指に責め立てられている。

「こんなに脈打って……気持ちがいいのどうう? 遠慮することはない……さあ……」

黒い指が亀頭山腹を指の腹でぬめぬめと擦ったかと思うと、張り出した縁辺に絡み付く。爪先が裏筋をかりかりと引つ掻く。過敏な器官へ執拗に快楽を流し込まれて、紫は身動きできないようだった。

その対面で、もう一人が同じ姿勢で悶えている。「ど、どうして……アサギさんっ!! 何故、なんで、こんなことをっ!!」

甲河アスカだった。四肢を機械化している彼女は、同様に移植ペニスを黒い手で責め立てられ、悲鳴と

ともに粘液をどくどくと送らせている。

「ふふっ……自分からこんなに腰を突き動かしておいて、何を言う……さあ、もつと悦べ……」

確かに、アスカの腰はしごき手の動きに合わせるようにして繰り返されていた。

「だっ、だっ、だっ、そんなっ、あ、あつあつ……」

彼女は口先でこそ反発しているものの、身体は既に屈しているらしく、その表情は半ば湧けかけていて、黒い快楽の主への嫌悪の色は見られない。

二人を責め立てている黒い肌の下で、三人目の対魔忍、井河さくらが仰向けの姿勢で身悶えている。

「……また出るっ、またっお姉ちゃんの中につびゅーびゅー出ちゃうよおとおおっ!!」

さくらの下腹部にも雄の器官が勃起しているのだが、それは漆黒の両腿の間に呑み込まれている。闇色の雌肉は、移植ペニスを包み込み、優しく、しかし食欲に悦楽を搾り取る。激しく上下に動きながらも、銜え込んで放さない。

「もつと、もつと味わうといい……この喜びが、お前達への最後の手向けなのだから……」

さくらの肉体はその愉悅にすっかり支配されていて、彼女は頬と目元を緩め、唇を歪めて陶醉している。腰をがくがくと突き上げる度に、泡立つ白濁が接合部から溢れては飛び散る。

「お前達は明日、私の生け贄となる。だから今だけでも、その苦悩を紛らわせてやろう……」

両手と雌性器をもって、三人のふたなり対魔忍を責め立てている黒い女が囁く。その肌は黒色人種とは違う、人間にはあり得ない闇の色だった。メラニン色素の色などではない、底知れぬ黒である。

騎乗の反動で揺れて弾む見事な乳房も、引き締まった背腹も、脂と筋肉のバランスの絶妙な臀も、逞しい太腿も、頬も、腕も、人の形をした闇だ。その暗黒の中で、瞳と唇だけが紅蓮に燃えている。

「い、生け贄? どういうことですか、アサギ様!!」

狂おしい愉悅の合間、紫は黒い女に問う。「何言ってるのっ、お姉ちゃんっ!!」

さくらが混乱しながら叫ぶ。

「お前の姉はもういない。浩介を失い、誇りを失って、真の絶望を味わう前に眠った。もう目覚めることはない……」

暗黒の女が激しく腰を使いながら答える。

「ア、アサギさんは決して諦めたりしない、絶望したりしないっ!!」

アスカの言葉に、黒い女は哀しげに微笑んだ。はあるが、お前達の知っているアサギではない。私は「魔」。世界を終わらせる、滅びの化身……」

三人の対魔忍を責め立てているこの女こそ、最強とうたわれた対魔忍、井河アサギの成れの果ての姿なのだ。三人はノマドの罠に陥り、数々の恥辱を受けながらも脱出し、囚われのアサギのもとに辿り着いた。だが、そのアサギはもはや彼女の肉なる「魔」に呑み込まれていた。

粘液をローション代わりにしごき立てる魔人の手の中で、紫とアスカのペニスが膨れ上がる。

「うあつ、たっ助けてっ下さつああつ!! また、またっ来るっつ精液来るうううっ!!」

「許してっ、もうどびゅどびゅ許してえええっ!! おちぽびりびりっおかしくなっちゃああつ!!」

アサギの暗黒肉洞の中で、さくらの移植器官もまた大きく肉傘を広げる。

「出るっ、出ちゃうううっ!! 気持ちいいのっお姉ちゃんっどくどくしちゃうううっ……!!」

魔人に快楽を送り込まれている三人が同時に叫び、がくがくと身を震わせた。

びゅくっ、びゅくくくっ!!

漆黒の下腹部の奥で、さくらの熱い歓喜が弾け飛ぶ。魔子宮に精液を浴びせられて、黒い美女はうつりと微笑んだ。

「おお……この心地……何と儂いのか……
びゅるるるるるつ！
ぶびゅううううつ！

紫とアスカ、二人のペニスから勢いよく白い放物線が迸り、魔人の黒い頬や乳房に降り注いで、肌をまだらに染め上げる。

「そうだ……儂き生を、最後まで味わうといい。こうして解き放たれたからには、私は、この醜い世界を破壊し尽くすだろう。我が胸を焼く哀しみを、癒やすために……そして、お前達は明日、私の最初の生け贄になるのだ……」

魔人アサギは、全身を白く汚す熱い粘液に陶醉しながら、滅びを宣言する。

「そんなことつ、お姉ちゃんがするわけないつ！」
「臍内射精の悦楽に悶えながら、さくらが叫んだ。

「お前の姉は……お前達のアサギはもういない。ただ、この私がいるだけだ。破滅の化身が……」

「だったら！ お姉ちゃんがいなくて言うなら……さくらが止めてみせる！」

「わ、私も……たとえお前を殺すことになっても、アサギ様の意志を貫く！ 負けるものかつ」

二人の決意に、哀しげな表情で魔人は答える。
「破滅を止めることは不可能だ。ヒトの手では、この私にも、始祖吸血鬼ブラックにも届かない。あ

あ……哀しいことだ……」

「……ブラックに届かない？ どういう意味？」
アスカは思わず尋ねる。その機械化された両手足

は、かつて彼女がブラックに惨敗を喫した証でもあった。彼女の忍術も、体術も、武器も、暗黒の支配者には一切通用しなかったのだ。

「ブラックは……次なる階梯の存在だ。その有

様が根本的に違う。目に見える姿は影に過ぎず、本体はこの次元にいない、と言えば近いか……
三人を快楽で責め立てながら魔人が囁く。その口調は、非力な人の身を哀れむかのようだった。

「……と、いうような設定でいかがですか」

そう囁くのは醜く太った魔族、「魔科医」フルスト。彼の前には、のたうつ三人の対魔忍、紫、アスカ、そしてさくらがいる。皆、植え付けられたペニスから精液を次々に進らせ、浅ましく腰をくねらせて、あられもない言葉を叫び続けている。

しかし、アサギの姿だけはそこない。彼女達を責め立てているのは、漆黒の肌をした魔人などではなく、生臭い臭気を放つ醜悪な触手の群れだった。全ては知覚偽装によって送り込まれた幻影なのだ。

「ふふん。豚どもにはお似合いの夢よねえ」
もう一人、彼女達を眺めている者があった。悪意に満ち満ちた、蛇のような笑みを浮かべた臍だ。

「ブラック様に明日の試合の「操作」を禁止された時はどうしようと思っただけ、アサギちゃんが魔物になっただけと思っただけ、皆、遠慮なく殺し合えるわね。ククツ、良かった良かった。アハハッ」

臍は嘲りの笑い声を上げる。
「念のため、適度に真実も混ぜてありますから、説得力も満点。アスカさん達は偽装された現実に疑問を抱くこともできませんよ。フフフ……」

自信満々に語るフルスト。しかし彼らの言葉は、知覚偽装の検閲に阻まれて三人には届かない。

【2】

「……ふうつ……」

薄暗いアリーナの控え室で、立った状態で拘束されたアサギは、深く重い息を吐く。

度重なる陵辱に、彼女は憔悴していた。

注射されたエキスのせいとはいえ、下劣なオーク

達を恋人のように受け入れてしまったことが、いまだに信じられなかった。オーク達に犯されながら、どうしようもない幸福を感じてしまっていたのだ。

「くつ、思い出すだけで、吐き気がするわ……」
それだけではなかった。触手生物による妊娠出産調教。男達の精液だけでなく、生き延びるために自らの尿を啜らされた「雌椅子」刑。調教スーツによる公衆翻弄試合。いずれも、彼女の精神と尊厳をポロポロに腐食する経験だった。そして、次の陵辱試合が間もなく始まるのだ。

（でも……私は諦めない。浩くん……）

アサギは気力を呼び起こし、誓いを新たにす。

（私は浩くんを助けるんだ……たとえ今一度、同じ責めを受けるとしても、決して……諦めない）

誘拐され、人質とされた浩介を救出する。その決意が、今のアサギを支えているのだ。

そこに、彼女の意志を嘲笑う声が響いた。

「あ、雌オークのアサギちゃんだ〜♪」

「くつ……」

臍だった。乗馬鞭を手にしたサディストは近寄ってくる。舌なめずりをしながら顔を覗き込む。

「ククツ、いい目つきになつてきたわよアサギちゃん。すっかりポロポロで♪ さしずめ、浩くん？ だけが心の支えつて感じ？ アハハッ」

ギリツ……

心の傷に塩をなすり込むような言葉の連打に、アサギは歯ぎしりして睨み返す。

その瞳には、凄惨な色の光が宿っている。陵辱のもたらした絶望と虚無の中に、追い詰められた者の怒りが、鬼火のように揺らめいているのだ。

「はあああつ……その目、その目よおおつ！ ああもうつ、堪らないわあつ！」

臍はうつとりと身をくねらせ、そして。
パシィッ！

手にした鞭で、アサギの乳房を撃ち抜いた。

「……あくっ！」

知覚偽装により改造されたアサギの身体は、その痛みを鋭い愉悅に変換してしまう。

「んひっ！ くっ、ふああっっ!!」

立て続けに刻み込まれる快楽を、アサギは歯を食いしばって堪える。

やがて、欲望を一通り発散したか、臙の鞭打ちは終わった。魔女は興奮に息を荒らげたまま囁く。

「はあ、ふうっ……ねえ、アサギちゃん。次の試合なんだけどね……お前、死になさい」

「何!？」

唐突な発言だった。アサギを生け捕りにしたのがノマド総帥エドウィン・ブラック自身である以上、臙にその生死を決める権利などない筈だ。

「ぶっちゃけるとブラック様は、ご自身が神になるための計画を立てられているので、それにはお前というかお前の中の『魔』の覚醒が必要なのよ」

臙は悪い噂話をするOLか何かのように、にやにやと笑みを浮かべ、声を潜めて続ける。

「だけど、私としては、ブラック様にその計画を断念して頂きたいのよね。だから、死んでよ」

アサギは軽い口調で返す。

「ふうん。じゃ、私をブラックと戦わせなさい。止めてあげるわよ? その計画とやら」

途端に臙の形相が変わった。目は三角に吊り上がり、口の端がぎりりと引き撃つて牙を剥く。

「舐めた口を叩くなっ! このっ、身の程知らずの雌豚があっ!!」

ドカアッ!

「ぐふっ……」

臙の膝がアサギの水月にめり込んでいる。咄嗟に腹筋を固めなければ、内臓を痛めていただろう。

「いい? その豚チ■ボ惚けした脳みそによく刻んどくよ! 次の試合はデスマッチ。相手は同じ対魔忍ども。お前の妹、さくらもいるわ」

「さ、さくらっ?! 貴様っ、それは……っ!!」

アサギは目を見開いた。妹、さくらが生きているらしいとの情報は彼女をわずかに安心させたが、一方で肉親同士で殺し合わせるという外道の宣告が胸をぎりぎり締めつけた。人間の尊厳を奪われる予感に、血がさあつと冷え、頬が引き撃る。

その表情に、臙は少し溜飲を下げたようだった。

「アハハハッ、そうその顔、お前のその顔が見たかったのよ! じゃあ、いいわねアサギちゃん」

嘲り笑う声を残して、臙は闇の中に消えていく。

「試合中は『操作』しないけど、妹を助けたかったら、ちゃんと自分で死ぬのよ? お前の屍体は、豚らしくトンカツにしてあげるから。そうだ、浩くん? と一緒にデザイナーにするのもいいかもね!」

（くっ……ま、負けるものかっ。お前達の思い通りになどさせないわ……臙、ブラック!）

十

ほどなくして、アサギは暗闇のステージに引き出され、一振りの忍者刀を渡された。小細工は見当たらなかったが、鞘のない、剥き身の刃は、アサギの未来を暗示するかのようだった。

そこに、気取った声のアナウンスが響く。

『さて、デモンズ・アリーナにご来場の諸君。我らがノマドの戦勝記念シリーズもいよいよこれが最終戦となる。今回の出場闘奴は……』

ステージの闇を三条のスポットライトが切り裂いた。アサギの前方、十メートルほどの場所だ。

そこに照らし出されたのは、アサギと同様の忍服を纏った三人の女性だった。

（さくら、紫……それに、アスカ! 何故……!?!）
五車町で捕虜にされたさくらと紫だけでなく、ア

スカもいることにアサギは驚いた。

「ははっ、雌犬が勢揃いだな!」

「今日はどんな醜態で楽しませてくれるんだ?」
観客席の裏社会の住人達から野次が飛ぶ。しかし三人はそんなことも耳に入らぬとばかりに、身構えるでもなく、じつと立っている。

（外部への反応がない……あの様子だと、三人とも洗脳とか、催眠刻印を施されているのかも知れない。だとすると厄介だわ……でも……）

アサギのもとから出奔し、先日の放送でその姿を見るまでは、アスカは長い間消息不明だった。最悪臙のように、アスカがノマドに寝返っている可能性も考えられたのだが、どうやらそんな様子はないことに、アサギはわずかに安堵していた。

「……敗北の生き恥を晒し続ける、闘奴アサギ!」

「ひひっ、雌豚ア!」「死ぬ! 無様に死ぬっ!」
アサギをスポットライトと罵声が包む。

「まだ諦めぬーのかあ?」「無駄だつてのによ!」

そんな声もアサギに突き刺さる。彼女が屈辱を味わう様を、ずっと見せ物にされてきたのだ。だが、（今、私がするべきことは、絶望ではないわ……）

アサギは心の中で決意を新たにす。さくら達を手にかける訳にはいかない。身内だからという以上に、自分に彼女達を殺させることこそが、ブラックの計画の要だと推測できるからだ。

……自分で死ぬのよ? アサギちゃん。

臙はそう言ったが、自分が死んだからといって、さくらや浩介の生命の保証などある筈もない。ならば、アサギがとるべき道は一つしかない。

殺し合いの罠からさくら達を解き放ち、浩介を救出するのだ。それがどれほど困難であろうとも。

アサギは静かに祈った。

（……この心臓が止まるまで、私は絶対、諦めない。だから、私に勇気を頂戴……浩くん）

しかし、答えはなかった。

代わりに、三人が視線を彼女へと向けた。それは、悲壮ともいえる強い意志が籠っていた。

〔単に操作されてるんじゃないわね。何かの理由で私を倒さねばならない、とか洗脳されてるの？〕

〔さて、本試合だが……最終戦に相応しいルールを採用する。即ち……デスマッチだ！ どちらかが確実に死亡するまで、ステージからは出られない！〕

（その覚悟はしていたわ。でも私は諦めない、最後まで。さくら達と、浩くんを、必ず助ける！）

〔さらに特別ルールがある。闘奴が死なずにダウンした場合は、拘束して陵辱する……死ぬまでだ！〕

スポットライトが、リングに置かれた拘束具を照らし出した。それは幅も厚さも十センチ近くある大きな金属の輪だ。内径からすると首輪なのだろうが、建設資材といったほうがしっくりくるゴツさだった。

重厚な首輪は、太く頑丈そうな鎖で、ステージの床に固定されている。

〔生け贄を捕らえたら、拘束具の継ぎ目は溶接する！ 拘束具も鎖も特殊合金でできているから、首を切断しない限り、抜け出すことは不可能だ！〕

〔来たア！〕「ビヤッハア！ 死に様が見れるぜ！」

死ぬまで陵辱とは、また前回のような処刑重機で責めるのであろうか。それともオークやオーガのような絶倫超人種でも参加させるのか。

〔……手加減して気絶させる訳にはいかないか〕

アサギは作戦の選択肢が一つ減ったことを認識して呟く。それに、臍の妨害もあるだろう。催眠烙印での妨害操作はないとは言っていたが、あのサディストの言葉を安易に信用するのは命取りだ。

再度、目前の三人に視線を戻す。三人とも、よく見れば疲労の色が濃い。それでも、彼女達はゆっく

りと独特の呼吸をしている。戦いに備えて気を体内で増幅しているのだ。

〔何にせよ、手合わせせしないと始まらないのね……〕

いいわ。こんな場所で悪いけど、さくら、紫、それにアスカ。貴女達の力、見せてもらおうわよ〕

アサギの五体にも気力が満ちてくる。そして、カアアンツッ！

〔風神っ！〕

ゴングの音と同時にアスカの姿が消えた。ぶおううつ……

次の瞬間、背後から首筋に襲いかかってきた義肢ブレードを、アサギは沈み込んで躲す。

〔場数を踏んだのね、アスカ。前よりもずっと、鋭くなってるわ〕

ドン！

その頭上から、紫の巨大斧が迷いなく振り下ろされて来た。

〔紫も、いい動きよ。力が一点に集中してる〕

砕かれたステージの破片が飛び散る中、アサギは紫の足下を転がるようにして抜ける。その背後に回り込んだ瞬間、後ろに向けて刃を放った。

ギインツッ！

〔よく息が合ってるわ、さくら〕

アサギの斬撃は、紫の影から出現したさくらのクナイで受け止められている。忍術を使ったのだ。

〔はああああっ！〕

両腕のブレードを展開したアスカが、竜巻のように襲いかかってくる。アサギはそれを回避せず、受け止めもせず、風の目である内懐を、アスカの身体に密着するかのようになりとすり抜けた。一瞬だけ忍術を使用したのだ。これなら気の消費はゼロに近い。熟練の対魔忍ならではの技巧だった。

〔三人とも凄いわ……さて、どうしたものかしら〕

〔また読まれてるっ！〕

〔流石アサギ様。こっちの手の内はお見通しか〕

〔だけど……負ける訳にはいかない！〕

バギン！

アスカはアサギの刀を間一髪で防ぐ。機械の腕にもかかわらず、痺れそうなほどの衝撃だった。彼女の目に映るアサギの姿は、倒さねばならぬ闇そのものだ。だが、それが自分達をアサギと殺し合わせるための欺瞞であることを、アスカは知っていた。

〔強い！ アサギさん、こんなに強かったんだ！〕

仕組まれた戦いとはいえ、手を抜く訳にはいかなかった。手抜きを臍に看破されたら、自分が知覚偽装をすり抜けていると気づかれてしまう。

（今分かったことは一つだけ。臍を誘い出して、倒さなくては、このまやかしは解けない）

だから、全力で戦っても、アサギがそれを上回ってくるのは不幸中の幸いだった。

〔個人・臍・ステージ上三存在せず。検索続行〕

アスカの脳裏に、義肢AIからの報告が浮かぶ。義肢との間には複数の生体回線があるのだが、低速の文字端末回線以外は知覚偽装の影響を受けるため、戦場のリアルタイム情報は望むべくもない。

そのアスカの意識に、嫌らしい声が響く。

（身内同士だと埒が明かないわねえ。そうだアスカちゃん、あれ使いなさいよ。貴女にあげたあの力なら、今のアサギちゃんだって止められるかもよ？）

（……！ ア、アレはっつ！）

アスカは一瞬だけ躊躇した。彼女を取り込んでいく知覚偽装の幻の中では、今の声は臍ではなく、魔人化したアサギを元に戻す方法を知る女性科学者、ということになっている。

（ごめん……ごめんささいっアサギさん！ 今、臍の指示に背いて、疑われる訳にはいかないの）

そして、アスカはアサギに向けて手を伸ばすと、下腹部に移植された異質な、それでいて奇妙な馴染みのある器官に意識を集中した。

次の瞬間、彼女の腕から緋色の茨が飛び出した。
「あっ！ そ、それはっ!!」

それを見て、アサギの顔が驚愕に染まる。足の止まった最強の対魔忍に、緋色の幻影が巻き付いた。

ドッ、ドッ！ ドクツッ！ ドドオッ！

「かひあつ……こ、これっ、あおつ……!!」

流し込まれた強烈な欲情に、アサギは立ったままがくがくと身をよじった。

腹の奥が、胸の裏が、頭の芯が、女である部分全てが燃え上がる感覚は、決して忘れるものではなかった。それは、家族にして恋人である、浩介の忍術だったからだ。

「あつあああつ、こ、これ、『炎の棘』っ!? な、何でアスカが?! んっ、んひうううっ……!」

アスカの忍術は、実戦向きの風を操る術だ。全く系統の異なる『炎の棘』を新たに獲得するというのは、あり得る筈のない出来事だった。

「どういう、ことなのっ? 浩くん、浩くんっ……! 強烈な欲情に、アサギは立っているのがやっとの状態だ。だが、アスカは立て続けに赤い茨を放つ。

シュルツ、バシユツ……!」

一発でも身動きが取れなくなるほどの欲情が、次々と巻き付いては体内に潜り込んでくる。

「あひっ! あつ、あひああああつ!」

手と言わず足と言わず全身の皮膚の内側を、骨の髄を、はらわたの中を、無数の快樂の茨がちくちくと焼け付く棘を突き刺してのたうち回る。

（んああああつ浩くん!! まさか、浩くんがっ）

愛しい責め苦に、あり得ないことと分かっているも肉体が歡喜してしまっている。心臓が破裂しそうなほど高鳴り、虹色の爆発が頭の中を一杯に覆う。戦慄く両脚が、身体を支えられなくなる。

どさっ!

ついにアサギはステージに崩れ落ちた。上から覆い被せるようにアナウンスが響く。

「闘奴アサギ、ダウン! 拘束ペナルティだ!」

知覚偽装で幻を見せられ続けている紫、さくら、や遅れてアスカが、重厚な拘束具を手にすると倒れたアサギに飛びかかる。そして。

ガチャン!

アサギの首を銜えて、合金製の拘束具が閉じた。三人はそのままアサギの手足を押さえ込む。

バチバチバチッ!

すぐさま、拘束具に付属していた小型のロボット溶接機が動き始め、強い火花を散らして接合部を溶かし始めた。焦げ臭い煙が立ちこめる。

「うああつ……ふ、不覚っ……!」

——さあ、『私』を解き放て。どのような縛めだろうと、『私』を封じることなどできぬぞ……

魂の奥底で『魔』が誘惑するように囁く。
（く……駄目よ。何があろうと覚醒する訳にはいかないわ。この場で、私の中から『魔』を引っ張り出すことが、ブラックの狙いなんだから……）

火花はすぐに止んだ。溶接が完了したのだ。
ジャラジャラジャラッ……

拘束具の鎖がステージの中に引き込まれていく。

「あぐっ……くはっ、はあつ……!」

鎖が短くなつたせいで、アサギは仰向けの姿勢で、完全に床に張り付けられた。さながら、惨めな人間標本といった有様だった。

「おおっ、やった!」これは決まったな!

「惨めな豚の死に様が早く見たいぜ」
確定的な陵辱死という、無慈悲にして絶望的な状況に、スタンドの残酷な観衆達は総立ちだ。

（ま、まだだ……まだ私は生きている。終わっては、いないっ……）

自分に言い聞かせるアサギに、臙の音が響いた。

「クク、アハ、アハハハッ! 無様ねえよ!」
刻印を通してではなく、実際の耳に伝わる声だ。

「……き、貴様っ……!」

アサギは、声の方向をただ目で睨む。

そこには二つの姿があった。一人は、派手なドレスを纏い、とても楽しそうに笑っている臙。

そしてもう一人は、気品と矜持を併せ持ったような男だった。全身に神々しいまでの邪悪な気配を纏い、冷たく赤い瞳でアサギを見下ろしている。

——あああつ、ブラックウウウッ!

宿敵の姿に、魂の奥底で『魔』が咆哮する。ノマド総帥、エドウィン・ブラックがそこにいるのだ。

「あらあら。こゝんなピンチなのに……!」
満面の笑みの臙は、近寄ってしゃがみ込むと、流石は淫乱雌豚のアサギちゃんね!」

魔棘のせいで指の先ほどにも勃起したアサギの乳首を、布ごと千切り取らんばかりに力一杯摘んだ。

ぎぢゅいじゅいじゅいじゅいっ!!

「臙っがあああああああああつ!!」
アサギは、電流で打たれたかのように拘束肢体を戦慄かせ、悲鳴を上げた。

苦痛でしかない筈の刺激は、知覚偽装のせいで焼け付く快樂となつて、乳房から全身へと火の粉のように飛び散っていく。

「ほらほら! アサギちゃんてば、こんなにされて気持ちよくなっちゃうのお?」

臙はアサギの乳首を力一杯捻りながら、重い乳房ごと引っ張り上げて、ゆさゆさと揺さぶる。

「それはっ、あくっ偽装っあつぎあああつ!!」
にたにたと蛇のように笑いながら、臙はもう片方の手をアサギの下腹部へと伸ばした。

「こつちも凄いじゃない。まるで子供のチンポ!」

毒々しく赤い爪が、忍服の臍下を隆々と持ち上げ

ている海綿体を強く引つ掻いた。

がりゅっ!

アサギの頭の中で火花が飛び散った。

「そっはひつぎいいいいいつつ!!」

性感神経の塊に鋭い刺激を加えられて、アサギは飛び跳ねんばかりに身悶えた。だが、溶接された首輪と、手足を押さえ込む仲間達はびくともしない。

「アハッ、アハハハッ! このクリチポ、前回よりも育っちゃったんじゃない?」

ざりゅっ、がりゅっ、ざりゅっ!

忍服の下で子供並みのサイズにまで膨張したクリトリスを、爪を研ぐように引つ掻く。その度に凶悪な高圧電流がアサギの身体を貫いた。

「やめつらあつあああああつつ!!」

狂おしいほどの快楽にアサギはのたうち回るが、臙の処刑爪から逃れることはできない。

「はははっ、この状況でよくおつ勃つよな」

「まだまだデカくなるのかなア?」

観客達の醜悪な野次が降り注ぐ中で、アサギは頬を歪め、舌を突き出して七転八倒する。

臙は満面にサディスティックな笑みを浮かべて拘束美女を爪でいたぶり続けていたのだが。

「アハハハッ……あら?」

ピツ、バリリッ!

弾けるような解放感とともに、鋭い邪悦が勃起乳首と淫核を突き刺した。忍服が破れたのだ。それが引き金になったのかのように。

「あつ、いついひひあああつ!」

アサギは拘束された肢体をがくがくと震わせて、大きく仰け反った。小鼻が開ききり、戦慄く唇の端から泡立つ唾液が零れる。瞳孔が収縮してあらゆる方向を向く。服の破れ目から飛び出した、薔薇色の乳首とクリトリスがびくびくと脈動する。

この期に及んで、アサギの淫乱な肉体は、裏切り

者の爪に屈し果てていた。

十

「ああ、ああつ……ああ……は……」

「くく……アサギちゃんつたら、こんなことでいつちやつたのね。『炎の棘』も面白い忍術だわね♪」

臙は、まだ責め足りないという顔をしながらも、一旦、生け贄から手を離して立ち上がった。

「ふはっ、はっ、はあつ……お、臙つ……」

解放されたアサギは、荒い息のまま問う。

「な、何故つ……何故アスカが、『炎の棘』を、使えるの!? あれは……こ、浩くんの忍術の筈よ!」

「ああ、その話? ぶつ、くくくつ……あれはねえ、まあ、リサイクルみたいなものよ」

「リ、リサイクル……!」

アサギの胸で、冷たく不吉な予感が膨れ上がる。

「この間、研究員がミスしちゃってね?」

上機嫌な臙の目は糸のように細く、口は端が耳に届きそうなほどつり上がっている。

「お前の大事な浩くん? を殺しちゃつたのよ」

♪

「……つ!」

心臓に冷たい刃を突き立てられたかのようにだった。全身が凍り付き、世界が色を失っていく。

「う、嘘……」

「本当よお。だからあ、使える部分だけでもアスカちゃんに移植して助けてあげたつて訳。アハッ、感謝しなさいよね、アハハハハハッ!」

腹を抱えて一人で爆笑する臙の言葉は、途中からアサギの耳には入らなかつた。

アスカが浩介の術を使えた理由。それは浩介の肉体の一部を移植されているからなのだ。それこそが、浩介の死の証明なのだ。

「こ、浩くんつ! そんな……つ……だ、だつてつ……くつ、ううつ……」

今、彼女は救うべき相手を失った。戦う理由を失った。全ての受難が無意味となった。

「わ、私、また……また助けられなかつたの……? それじゃ私は、わたし……もう……」

思うように動かない喉から、とぎれとぎれの嗚咽が漏れる。一緒に暮らした少年の思い出が、表情が、次々と脳裏を過つては虚しく消えていく。

「アハ、アハハハッ! そう、お前はまた恋人を死なせたのよ。本当に生きてる価値のない雌豚♪」

どんな拷問よりも苦しく切ない苦痛が、アサギの心を引き裂いていく。

「浩くん……ごめんなさい、こうく……ん……」

アサギの凛々しかった顔から一切の緊張が消え失せ、目元も口元も、死者のように弛緩する。光が消えた瞳には、闇だけが広がっている。

ガッ

その額を、臙のブーツの足が踏みつけた。

「アッハハハハハアアッ! イイ、イイわつその顔つ、最高よつつ!! その顔のまま死んでね♪」

憎むべき仇敵に、アサギはぼんやりと虚ろな瞳を向けた。色を失った唇が開き、ひゅうと喉が鳴る。

「……哀し……苦し……」

この世のものとも思えぬ、血も凍る声だった。

「何つ!」

臙はぎよつとした様子で飛び退く。

「いよいよ、来たか」

その隣でブラックがわずかに笑つた。

「……絶望が深ければ深いほど、『魔』の力は増大する。さあ、美しき者よ、あと少しだ。あと少しで、我らの宿願を成就するに足る力が満ちる」

ガギンッ! ギギギギッ!

特殊合金製の首輪が異音を立てて軋み始める。

ダムッ! パバンッ! ダンダン!!

「うわっ!」

「きゃっ!」

「うわっ!」

「きゃっ!」

「うわっ!」

「きゃっ!」

「うわっ!」

「きゃっ!」

「うわっ!」

「きゃっ!」

アサギの手足が人間離れした動きで振り回され、押さえ込んでいたアスカ達が跳ね飛ばされた。

「……哀しい……おお、苦しい。いつその胸が張り裂けてしまえば……どれだけ楽だろう……」

ギチッ……ギチッ……

力づくで、床の穴から鎖がじわじわと引きずり出されてくる。アサギの頭が仰け反って臍を向く。

「ひっ……！」

臍はアサギの眼に射すくめられていた。その目は、眼球全体が不気味な輝きに満たされている。アサギの中の「魔」が覚醒しかけているのだ。

「……どうすればいい？ どうしたら、この苦しみから逃れられる？ どれだけ殺せば、この哀しみが和らぐ？ 誰か……誰か私に……生け贄を……」

ギリッ、ギリギリッ……

怪物を繋ぎ止めている拘束具は、原子力空母の投錨鎖を転用したものだ。それが悲鳴を上げている。

「ブラック様っ！ き、危険です、催眠刻印でアサギを『操作』するご許可を……!!」

臍が顔を引き攀らせながら言う。だが、

「手出しは無用だ。それより……美しき者よ」
ブラックは実に嬉しげな表情で前に出た。

「美しき者よ。私の言葉が届いているか？ 教えよう……お前の苦しみを癒やす方法を……」

その姿を認めて、魔人と化したアサギは顕著に反応した。

「ブラック……!! ブラックウウツツ!!」
縛めを破り、宿敵を討たんとしたうつ。

ギシシッ……ミリミリミリッ!

拘束具は目に見えて変形し始めた。金属の悲鳴と怪物の慟哭の中でブラックは囁く。

「聞け、美しき者よ。お前が救われるには、この醜い世界を焼き尽くし、美しき世界を再創造しなくてはならぬ。お前の哀しみのない世界を……」

十

「警告…井河あさぎ二重大ナ変化。人体ノ物理限界ヲ超エルえねるギ一を検知。要・嚴重警戒」
知覚偽装により歪められた現実の中、義肢AIが跳ね飛ばされたアスカに情報を送ってくる。

偽りの中では、アスカ達は恐るべき魔人アサギを捕縛することに成功し、元に戻す方法を調べている場面である。しかし、アサギが魔物に変わってしまったのは、現実世界でも間違いないようだった。

（一体、何が起きているのっ?! それに……浩介っ! くっ……馬鹿、馬鹿浩介ええええっ!!）

アスカは声を立てずに嗚咽する。

弟である浩介の死は、AIの録音を通じてアスカの知るところとなっていた。アサギは愛する家族を失い、絶望のあまり、魂の奥底に潜む闇に全てを委ねようとしているのだろうか。

（……アサギさん、負けないでっ!）

アスカは心の中で必死に叫んだ。感情に溺れて、言葉を口に出しては、復讐は成らないのだ。

（まだチャンスはあるっ! だから諦めないでっ! 私に一族の仇を……浩介の仇を討たせてっ!!）

アサギはぼんやりと外界を眺めている。目映ゆいライトが降り注ぐアリーナには、幾つかの人影があるのだが、いずれも彼女の心に止まらない。

「アアア……アアアアアアッ!!」
喉も裂けよとはかりに吠えているのは「魔」だ。

「魔」が勝手に身体を使おうとするのを、わざわざ拒む気力など彼女にはなかった。

（ああ消えていく……私、このまま消えていくの? いいわ……それで。もう何も残っていないのだから……浩くんも……戦う術も……）

人間としてのアサギは消滅しつつあった。愛する者も、身体の内自由も、尊厳も、そして怒りすらも消えてしまったのだ。燃え尽きる蠟燭のごとく、意志の力を失って消えていく。その時だった。

「アサギさんっ!」
心のどこかで誰かの声を聞いた。少女のようでも、少年のようでもある。よく知っている人間の筈だが、思い出せない。

「……まだだよ! まだ終わっていない! アサギさんは、まだ一人になった訳じゃない!」
その声に言われて、アサギは視界によく見知った姿があることを改めて認識した。

（さくら、紫……アスカ……ああ、そうだ……）
どくん……!
心臓が強く打つのが聞こえた気がした。自分と戦わされた三人が、まだここにいるのだ。さらに、占領されたという五車町の人々や、囚われの学園の学生達の姿も思い浮かんだ。どれほど苦しくても、どれほど絶望的でも、まだ全てを失ってしまった訳ではないのだ。

（そうだ……まだ、まだ終わってなどいない! 私

は誓った筈だ……心臓が止まるまで戦う、と!）
自分はまだ戦える。戦わなくてはならない。このまま己を「魔」に委ねたなら、彼女の愛する全てが滅ぼされてしまう。アサギの胸の中に、決意の炎が再び宿っていた。

（それだけは許せない! 浩くんがいなくても、私にはまだ、守るものがあるんだ!）
彼女の側では、アスカ達が躍っている。せめてこの三人だけでも脱出させたかった。

（……浩くん、私を見守っていて……）

【3】
ブラックが厳かに囁き続けている。

「……それには、この私が必要だ。この私が創造神となり、破壊の女神たるお前を妃に迎えるのだ」
その時、アサギの動きが止まった。そして。

43

「……お断りよ、ブラック。プロポーズするなら、もう少し空気を読んで頂戴……」

「……!」

横たわるアサギの形相は、人間のそれに戻っていた。やつれてはいるものの、頬に緊張が宿り、瞳には意志の光が瞬く。『魔』は再び、彼女の奥底に封じ込められたのだ。

「貴方の……思い通りにはならないわ。陵辱するっていうなら、客が飽きる前に始めたら?」

無様に拘束されたまま挑発してくるアサギを、暗黒の支配者は冷たく見下ろす。

「……まだ絶望が足りないようだな。では、さくら、紫、アスカ。自分達かアサギか、どちらかの心臓が止まるまで犯し続けよ。臍、操作していいぞ」

そう言うと、振り返らずに立ち去った。

「はいっブラック様! さ、皆、続きよ!」

この悪女のどこからこれほどキラキラした声が出るのか、と呆れるほどの声色で臍は言う。するとアスカ達三人が立ち上がり、自らの忍服を引き裂いた。ピリッ、バリッ、ビィィィッ!

汗に濡れた六つの乳房が、弾みながら露出する。そして。

びくっ、びくびくっ……ぬううううっ……

「なっ……!!? こ、これは……っ?!」

飛び出してきたのは、てらてらと頭を光らせて勃起したペニスだった。隆々たる雄器官達は、亀頭からはむせるような性臭を立ち上らせ、黒く節くれ立った幹はどくどくと脈打っている。ただ、アスカのモノだけは色がやや薄く、サイズも標準に近い。これが、浩介の死体から移植された部分なのだ。

「おお、どうも女のくせにデケえなあ!」

「もう少し俺らに配慮して欲しかったなあ……」

「チ●ポ狂いの雌豚にはまだ物足りないかな?」

ざわめく観客達に向け、臍は呼びかける。

「さ、デスマッチ再開よ。会場のみんなも、どの豚の心臓が最初に止まるか賭けてみてね!」

「お姉ちゃん、正気に戻って、お願い……」

どのような幻覚を見せられているのか、さくらはうわごとを吹きながら、床の上に仰向けに拘束された姉の顔面に跨がった。

「正気って、さくらっ、んむっんぐぐっ……」

アサギの朱色の唇を、妹の白い下腹部にそそり立つたどす黒い剛直が塞ぐ。

ぬぐぐぐぐっ……

押し込まれてくるその太さのせいで、アサギの顎は外れそうだった。巨大な侵入者は、その先端が喉の奥を通過してようやく止まる。

妙に馴染みのある臭気がアサギの鼻腔を満たし、脳を媚薬のように蕩かしてくる。さくらに移植されているのはオークのペニスなのだ。

（う、うくっ……この臭い、くらくらするっ! しっかりしないと、意識が飛んでしまいそうっ）

れるれるっ、ぢゅううううっ……

無意識のうちにアサギの舌が蠢き、口中の裏筋を舐め上げている。繰り返された陵辱で身体に染み付いてしまった反射が、そうさせていた。

「あああああつ、あつたかい……お姉ちゃん、コレが、おチ●ポが欲しいんだよね……」

その愛撫に感じ入るように、さくらは腰を揺すって、姉の口を犯し始める。

ぐぼぼっ……がぼっ、ごぶぶっ……

押し広げられたアサギの朱唇を、浅黒い剛直が唾液とともに出入りする。喉奥を突かれるごとに、そこから脳裏へ、じんじんするような痴悦が広がる。

（な、流されるな私! アスカ達を助けるんだっ）

ぐ、ぐぐっ……

「ん……はあっ……アサギさんっ……」

誰かがアサギの太腿を掴み、下半身を高く引つ張り上げている。肉茎越しに視線をやると、アスカが屈曲位状態の腿の裏側に跨がって、剛直を押し入れようとしているのが見えた。

（んくっ、むはあっ……あ、アスカっ……!!）

ぬるるっ……

「突の棘」ですっかり発情済みのアサギの雌粘膜に、熱く力強い感触が押し当てられる。それは忘れようもない感覚だった。彼女の愛する浩介の、最後に遺された部分なのだ。

（あ、あお……来る、これっ! アスカ……浩くん、来るんだ!! ああ、浩くん、浩くんっ!!）

アサギは身体が歓喜に戦慄くのを抑えられなかった。これほど屈辱的な交わりなのに、理不尽な喜びが肉の奥からわき出して止まらないのだ。

跨がるアスカは少しだけ躊躇うと。

「アサギさんっ……行きます!」

にゅぶぬぬぬぬっ!!

発情肉腔を押し広げて、紛うことなき、懐かしく愛おしい熱塊が入り込んでくる。

「んむっ、んぶあつ、ああつ、あああつ……!」

ぬかるみきつた蜜爇が掻き分けられる度に、頭の中に噴き出す喜びが、魂を真っ白に染め上げる。胸の中がやり場のない感情で満たされていく。

（あつ、来る、来ちゃうっ! 気持ちいいのっ来ちゃうっ……浩くんっ、もういいのにいつ!）

理性では分かっている、アサギの肉体は強く反応していた。腰を揺すり上げて、怒張を自ら呑み込む。発情腔は、愛しい雄を離すまいと食らいつく。

にゅっ、ぢゅっ、ぢゅぶうううっ……!!

我が子を出迎える母のように子宮口が下がり、到達した亀頭の先端に接吻する。そこから全身の隅々まで、狂おしく切ない悦びが走り回る。

（ああ、ああっ……ああああ……浩くんっ!! だ、

だめっ、気持ちよくなっちゃああつ!! 私、わたし
つまだ戦わなきゃいけない!!

愛する少年の形見で、自らを深々と貫かれる喜び
に、アサギの肉体はどうしようもなく震える。しば
しの間、彼女は現実を見失い、打ち破らねばならな
い偽装を忘れてしまうほどだった。

と、アスカの身体が、やや前方へと移動した。譬
の後ろにもう一人が入り込む隙間を作ったのだ。そ
こに、別の逞しい肉体がのしかかる。

「はっ、はあつ、アサギ様ああつ!!」

偽りの幸せに割り込んだのは紫だった。アサギの
尾てい骨の事前の窪みに、紫はふたなりペニスを押
し当てる。アスカと一緒にアサギの上に跨がる体勢
は、奇妙な二人乗りのようだ。

(む、紫まで……くっ、あううううっ!!)

ぬぐうっ!!

アサギの窄まった裏門を、強力な陵辱者が圧迫し
始めた。ぴりりと甘く危険な愉悅が背筋を流れる。

「アサギ様っ、どうかっ、正気を取り戻してくださ
いっ!! くうっ……負けないでくださいっ!! うあ
っ……これはそのための治療ですっ!!」

(あつ、あくうううっ!! 正気? 貴女達、私が狂
ってるって……そう洗脳されているの!!)

至福から引き戻されたアサギは、必死で打開策を
見いだそうと、辛うじて思考を掻き立てる。

(くっ……洗脳を解くにはどうしたら……どこか
支配が緩む隙があれば、そこを……あ、ああつ!!)

彼女の調教済みアナルがあつさり口を開いた。
つつぬぶうぶぶつつ!!

紫の巨根がすんなり腸奥に呑み込まれていく。

(お尻がっ、ああつ一杯っんひっ……いいっ!
あああつ、考えられないっ……っ!!)

内臓を穿つような強烈な歓喜が押し込まれてきて、

アサギのおぼつかない思考は、更なる愉悅の奔流に
押し流されてしまう。

「はおつ、おとおつ、おとおおおつ、アナルっ、
あああつアサギ様のアナルがあああつ!!」

紫は感極まった声で叫びながら、仰け反り、がく
がくと腰を小刻みに震わせる。汗でぐっしり濡れ
た背に、逞しい筋肉が浮かび上がる。

(あ、熱い……熱いのが、お腹っ広がるっ!! ぎ
ちぎち入ってくるうううっ!!)

アサギの括約筋を押し広げ、腸壁をこそぎながら
押し込まれてくる。内臓の中を、力強く抗い難い愉
悦が、ずきずきと脈打ちながら逆流してくる。

(おとおっおしりっおんこおおおつ!! もうっ
一杯っ満タンんぶあああつ!! ま、まずいっ、こ
んなのもう、もうっ頭っ保たないっ!!)

アサギの想いも知らずに、三人の仲間達は、獣の
ような食欲さでふたなりペニスを撃ち続ける。

ぐっぶ! ぬつぶぶつ!! むぶぶぶぶつ!!
「んっ、はっ、ああつ、お姉ちゃん……気持ちいい
よっ、ペロが動いてっ、くすぐつてきてえっ……」

さくらの移植ペニスが、艶やかな唇を無遠慮に出
入りし続けている。

喉奥まで押し込まれた亀頭から、濃厚な臭気が染
み込んできて、アサギを酩酊させる。息苦しささがそ
のまま頭がくらくらするような快楽に変換される。

ぬぶん! ぬぶぶつ!! ぬぶんっ!!
「うあああつ、アサギさんっ! 凄いですっ、吸い
付いてきてっ絡み付いてきてっあああああつ!!」

アスカも、うわごとのように叫びながら、力の限
り、幾度も移植勃起で突き下ろしてくる。愛しいペ
ニスで雌器官の秘奥を叩かれるごとに、全てを抛ち
たくなるような幸福感が、アサギの子宮を揺さぶり、
胸を喉を貫いて脳天まで響く。

ごっ!! ごぐっ!! ぬぐっ!! ぬぼぼっ!!

「アサギ様あああつ!! おしりっ柔らかっ、おお、
おあああああおおおおつ!!」

紫は吠え立てながら、暴走した杭打ち機のような
腰使いで秘肛を繰り返して蹂躞する。

広がりがきつた肉の輪が、ごっごつした太幹で擦ら
れて、いたたまれない愉悅が生まれる。腸を奥まで
引き伸ばされて、狂おしいほどの被虐の喜びがアサ
ギを串刺しにする。

「んぶっ、んばああつ、これっ壊れっ、壊れひや、
皆っちっポっ凄っおあおおおつ!! んむぶっ無理
もうっ、無理っ何もっ考えれえああつ……」

墮ちてしまえばかりに打ち込まれてくる無数の
愉悅が、アサギの脳を占領して、思考を許さない。
もはや意識を保つことすら困難だった。

妹に跨がられたアサギの顔は、既に虐悦に蕩けか
けている。ぐるぐるど動いて定まらない眼球の瞳は
散大し、酸欠と快楽に潤みきつている。強引にねじ
入れられた筈の移植ペニスを、頬を窄ませ、唇を尖
らせて、分泌粘液を吸い立て続ける。

(うぐっ、うえええっ……これっ頭のでっぺんまで
っ、来ちゃううっ!! 駄目っ、美味しいのっ……
脳みそまで溶けちゃあああつ……!!)

仲間三人にのしかかられるアサギの、くの字に折
り曲げた身体が、撓んでは跳ねる。豊かに熟しきつ
た乳房が、歪んで弾む。淫唇から媚粘液が溢れて、
自身の腹に胸に飛び散る。

その様子を、間近で見物している籠が嘲笑う。

「アハハハハッ!! いい顔よアサギちゃん♪
幸せでしょ? 浩くうん? の遺チっポで犯されて
♪ あ、そうだ幸せって言えば、ねえアスカちゃん」

邪悪なサディストは、アスカに視線を投げた。

「突の棘で、豚ちゃんを世界一幸せにしてあげて」
アスカは命令されるがまま、腕を上げる。そこに、
緋色をした幻影の茨が生まれた。

あ、そうだ幸せって言えば、ねえアスカちゃん

「やつつ！ やめつこれ以上んんんつつ……!!」
アスカの意図を察し、アサギはくぐもつた悲鳴を上げた。だが。

……バシユルツツ!

愛しい苦悶は容赦なくアサギに襲いかかった。絡み付いた『炎の棘』は、掻きむしりたくなるような切なさとなつて皮膚の内側に潜り込んでくる。

ドツドツドツドツドツドツ……

心臓が割れんばかりに高鳴る。脳底で雌の本能が強烈に掻き立てられ、腹の奥の器官が雄の精を欲して狂おしく身悶えする。

(あつ、あああつ駄目つ！ アスカこれつ駄目えええつ！ 白つ、真つ白になつちやあああつ!!)

「ほら、もつともつとアスカちゃん。アサギちゃんたら、気持ちいいのがまだ足りないつて」

シユルツツ！ バシユウツツ!

臍に命じられるまま、アスカは茨を次々に放つ。指を突き立てて抉り出してしまいたくなるほどの、狂おしい痛痒がアサギの肉の奥でのたうち回る。

「んあぎつ、んひふひいっ！ んむああああつ!!」

びくびくつ！ びくつ、びくくつつ!

炎の棘を受ける度に、忍服の裂け目から飛び出した勃起クリトリスが、震えつつ膨張していく。

「いい、イイっ！ お姉ちゃんの治療なのにつ、これつち■■ポツ気持ちいいのおおおつ!!」

ぐぶつ、がぼつ！ ぐぶつ、ぐぼつ!

アサギの顔の上で、さくらの腰はリズムカルに上下し続けている。さくらは蕩けた表情で、苦悶する姉の喉を犯す愉悅に酔い痴れていた。

「はつ、あはつ、アサギさんつ……お■■んこつ吸い込むみたいでつ、凄いでつ、凄いでつお■■んこつ」

ぬばんつ！ ぐぼつ！ ぬばんつ ぐぼつ!

アスカは貪るようなハイビッチで、発情子宮目がけ腰を打ち下ろしている。彼女の顔も、雌を組み敷

いて犯す、雄の愉悅に染まりきっていた。

「アサギ様つつ！ はつ、あつ、はつ……嬉しいですつこんなつアナルつアサギ様ああああつ!!」

背後の紫は力強く深いストロークで、性愛器官に成り果てたアサギの直腸を抉り続ける。彼女も口を大きく開いて喘ぎ、目元をだらしなく緩めていて、陵辱快楽に耽溺していることは明らかだった。

「三人ともうノリノリね。あ、そうだアスカちゃん。その、もう男だか女だか分からないくらいに育つちやつた豚クリ、シコシコしてあげて」

臍の指差す先では、アサギのクリトリスがもはや成人男性並みのサイズにまで膨れ上がっていた。粘液を振り飛ばしながら跳ね回るそれ目掛けて、アスカは右手を伸ばす。

「んぶつ、ぶあつ、それあつ、それつらめつ！ やめてアスカつ、アスつんぶつむあああつ!!」

アサギは更なる魔悦に戦慄するものの、逃れようのある筈もない。ずきずきと熱く疼いている巨大クリトリスが、精密な機械の指に囚われ、そして。

ぎゅぢゅうううううつ!

過敏な性感神経の塊をキツク圧搾された。脳が焼き切れそうなほどの快楽の稲妻が降り注ぐ。

「つんびやあああああつつ！」

機械の指はそのまま雌勃起をしごき立て始めた。

ごしゅつつ！ ぎゅしゅつつ!

粘液まみれの怒張る指が滑る度に、アサギの体軸を極太の処刑電流が何本も何十本も走り抜けて、筋肉を痙攣させ、脳を真っ白に焼き焦がす。

「ぎつあああつ！ あひつ、あつああつつ！」

拷問快楽にアサギは痙攣し、白目を剥いて、泡を吹いて断末魔の叫びを上げる。全身の血液が沸騰しそうなほど体温が上昇し、どつと汗が噴き出す。

びゅくつつ！ びゅるつびゅるるつつ!

ペニスとの隙間から、泡立つ粘液がまるで射精の

ように噴き出し始めた。刺激に連動した雌器官が、ぐねぐねと身悶えするように収縮するせいで。

アサギの下腹部、いや全身は、もはや誰のものとも知れぬ体液でぬらぬらと濡れ光っている。汗の芳

しい匂いと、雌の発情臭が濃密に立ちこめる。

ざりゅつ、ざりゅつ、ざりゅつ!

ぶずんつ、ぐぼつ、ぬぼつ、ぐぶつ!

(もう、もう私つ……無理つ、壊れるつつ!!)

淫核への苛烈なしごきと、ペニスの三重抽送が、火砕流のごとき破壊的な快楽となつて押し寄せる。まるで脳が蒸発していくようだった。アサギの意識は、純白で何も無い平原になりつつあった。

(だ、駄目だつ！ 私は……うくつ、負ける訳にはいかないつ……助けるんだつ！ で、でもつ……あああつ、爆ぜる、爆ぜちやあああつ!!)

「アハツ、アハハハツ、皆、そろそろイくかな? 臍の声とともに、三人の腰使いが加速した。

ぐぼつ、ぢゅぶつぢゅぼつ! ぐぼつ!

(あつあああああつ! さくらつ駄目つ、もう駄目つ気持ちいいのつ……口が、喉がっ!)

さくらは遠慮のない抽送で、アサギの喉奥に狂おしい被虐の悦びを流し込んでくる。被虐快楽に馴れきった彼女の肉体は制御を受け付けず、暴走的に高ぶっていくばかりだ。同時に。

ざちつちつちつ! みちちちつちつ!

内臓から喉元まで揺るがすような熱い衝撃とともに、腹心の部下の剛直が淫肛を穿つ。

(つ、強いのおおつ紫つ! 私つこつお尻つ……イイつ、イイのつどうしようもないのおつ!!)

力任せの打ち込みが、アサギを恥悦の奈落に叩き落とそうと揺さぶり続ける。欲望の獣が頭の中で暴れ回り、彼女の決意を片端から打ち壊していく。

そして。



可憐な変身ヒロインが
催眠によって変態少女に!?



選択肢でいろんなエンディングが楽しめる分岐小説!

美少女
戦士
ルナ
ファイト

小説 **よしろ** **士郎** 挿絵 **くるいわしんじ**
NOVEL ILLUSTRATION

ご注意

この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1~5の番号がふられているので、シーンの小説本文末尾にある指示に従って、指定された番号のシーンをお読みください。

シーン1

動くたびに胸がたぶたぶと揺れる。豊かで、柔らかそうな乳房である。若く張りも抜群のそれは桃色の衣装を押し上げて、何かの凶器のように目前の敵へと突きつけられている。

「やあああああああッ！」
細くしなやかな右足が宙を舞う。弧を描く一閃が向かうのは——異様な怪物であった。

成人男性五人分の筋肉を束ねて形成したような太い四肢。乗用車を縦にしたかのような身体つきは、三メートル近くある巨軀である。何よりも、その頭部に乗っかる獣面が恐ろしい。

牙を剥き、目を吊り上げたてがみを逆立てた、獅子の頭部がそこにはあった。彼の前に立つだけで、本能から死を察知するであろう——怪物である。

その左側頭部にルナの右足が直撃する。「ウゲエッ！」と悲鳴を上げて、獅子怪人の巨軀がよろめき、なんと、膝をついたのだ。

「ぐ……うう、うぐう……」

苦痛に呻く怪人へ、人々の罵声が浴びせられる。美少女戦士の闘争を一目見ようとつめかけた野次馬である。「いつも街を壊しやがってっ！」
「ルナには勝てないんだよ、いい加減にしろっ」

「いいぞっ！ ルナーっ」

この街で幾度も繰り返されている、怪人と美少女戦士の戦いは、ある種の

エンターテイメントと化していた。小さな身体が、怪人へ歩み寄る。「もう、終わる？ これに懲りたら街の人たちに迷惑をかけるのはやめなさい！」

それは凜、と響く鈴の鳴るような声。桃色の髪を靡かせ怪人の前に立つのは、まだあどけない少女であった。

丸みを帯びた頬、大きめの瞳、小鼻のかたちも■げで、幼童と勘違いされてもおかしくはない顔つきである。

身長も、低い。百五十センチあるかないかくらいだ。身体つきも華奢で、手足は細く、獅子怪人が握りしめればぼきりと折れてしまいそう。

いったいあの身体はどこに怪人を蹴り飛ばしたパワーがあるのかと、首を捻らざるを得ない可憐な体軀である。

(……あの胸か。あの、大きすぎる胸が力の源なのだろうか)

体軀が■げなだけに、いっそうに目立つルナの巨乳つぶりだ。「何をしている、グアルガーよ、行け！ ルナを倒せっ！」

ビルの屋上にて両者の対戦を眺めながら、ポルドーは激を飛ばす。白衣を着込んだ、カマキリに似た面貌の彼は、神経質な研究者のようだ。

事実。
獅子怪人グアルガーは、彼の造り出した人造怪人である。数多に創造した怪人たちの中でも、戦闘能力に優れた自信作だ。

コンクリートの壁などたやすく粉砕

できるパワーを備え、またその運動能力も獣なみである。あいつならばルナに互すると、信じていた。

「グアアアアアアア！」
グアルガーが吠える。両脚がミシミシと肥大して、蹴りつけられたアスファルトはたやすく陥没する。刹那、その巨体はルナの眼前にあつて——。

秘技！ 獅子粉塵ラリアット！
「きやあああッ！」

大木のような前腕が少女を薙ぎ払う。蠅が打ち払われるごとく、軽々と吹き飛ばされるルナの身体はビルの壁に叩きつけられた。衝突にコンクリートは陥没し、衝突した壁面のガラス全てがひび割れ弾け飛ぶ。

「ああっ、ルナーッ！」
常人ならば即死の一撃だ。観客から絶望の悲鳴が上がる。けれど。

「くっ……つう、効いたあッ……」
身を起こす彼女に致命の傷は見あたらない。地面に着地すると、軽く首を振り怪人を見据える美少女戦士は、まだまだやる気充分だ。

「グルッ……」
グアルガーとて自信の一撃だったの

だろう、それを痛痒としか感じぬ美少女戦士を前にしてじわりと後ずさる。「……サテライトフォーム。まったく、やっかいだ」

ポルドーが、呻く。
それはルナの身を守り、強い力を生み出しているスーツの名称である。

おおむねピンク色で、胸元にはリボンが飾られていて、動くたびにミニスカートがひらひら揺れる、ふざけているとしか思えないコスチュームだ。

胴体にびったりと張りついて、引き締まった腰やヒップやらを周囲に見せつけている。あの馬鹿みたいに大きな乳房すら、その稜線をなぞられて、見事な乳山を形成しているのだ。

およそ戦うことに不向きとしか思えない、あれこそがサテライトフォーム。いたいけな少女を組織の怪人と競わせて勝利させるほどの力を付与する、対怪人用戦闘スーツである。

「おのれ、美少女戦士ルナめが……」
歯を軋ませて、ポルドーは呻く。
彼女に、組織の怪人の何人が再起不能にされたか。

ポルドーが手ずから改造した、人造怪人たち。自分の産んだ子供に等しい怪人らを、叩きつぶされ蹴り倒されて踏みじられる。この世を支配しようというズールの侵攻を阻む、につつき美少女戦士め。

「この恨み……！！ 晴らさずにおられるものかッ……！！」

秘密結社ズールは世界征服を企む悪の組織である。規模、人員、ともに不明。ただ結社の首領ポルドーは、天才的な科学者であり、手ずから怪人を造り出しては人々を襲わせ、世界に恐怖と混乱を撒き散らそうとしている。悪魔の頭脳である。

秘密結社ズールは世界征服を企む悪の組織である。規模、人員、ともに不明。ただ結社の首領ポルドーは、天才的な科学者であり、手ずから怪人を造り出しては人々を襲わせ、世界に恐怖と混乱を撒き散らそうとしている。悪魔の頭脳である。

秘密結社ズールは世界征服を企む悪の組織である。規模、人員、ともに不明。ただ結社の首領ポルドーは、天才的な科学者であり、手ずから怪人を造り出しては人々を襲わせ、世界に恐怖と混乱を撒き散らそうとしている。悪魔の頭脳である。

秘密結社ズールは世界征服を企む悪の組織である。規模、人員、ともに不明。ただ結社の首領ポルドーは、天才的な科学者であり、手ずから怪人を造り出しては人々を襲わせ、世界に恐怖と混乱を撒き散らそうとしている。悪魔の頭脳である。

秘密結社ズールは世界征服を企む悪の組織である。規模、人員、ともに不明。ただ結社の首領ポルドーは、天才的な科学者であり、手ずから怪人を造り出しては人々を襲わせ、世界に恐怖と混乱を撒き散らそうとしている。悪魔の頭脳である。

秘密結社ズールは世界征服を企む悪の組織である。規模、人員、ともに不明。ただ結社の首領ポルドーは、天才的な科学者であり、手ずから怪人を造り出しては人々を襲わせ、世界に恐怖と混乱を撒き散らそうとしている。悪魔の頭脳である。

秘密結社ズールは世界征服を企む悪の組織である。規模、人員、ともに不明。ただ結社の首領ポルドーは、天才的な科学者であり、手ずから怪人を造り出しては人々を襲わせ、世界に恐怖と混乱を撒き散らそうとしている。悪魔の頭脳である。

秘密結社ズールは世界征服を企む悪の組織である。規模、人員、ともに不明。ただ結社の首領ポルドーは、天才的な科学者であり、手ずから怪人を造り出しては人々を襲わせ、世界に恐怖と混乱を撒き散らそうとしている。悪魔の頭脳である。

けれど、希望はあった。

政府が秘密裏に造り出した、サテライトフォームと呼ばれる戦闘スーツ。それは過去より連綿と受け継がれし錬金術と科学の融合体。人の精神に呼応して力を増す秘密兵器である。

そのスーツに適合する、数少ない人間。それが、ルナだ。

彼女は、スーツを与えられるまでは喧嘩すらもしたことの無い、ただの一般人だった。

戦うなんて、怖くて、街を襲うズールを恐れるばかりで、でも――。

獅子がごとき怪人が迫る。力、速度、ともに相手の方が上だ。

「でも……負けたくないっ！」

魂が燃えるのだ。

人々の笑顔を守れと。

街の平和を守れと。

だから、戦う。

美少女戦士ルナとなつて。

たとえこの身が傷つこうとも――！

ごお、と唸り上げて振り回される、獅子の両腕。その先端には鋼すらたやすく引き裂くであろう獣の爪が輝いている。右を避け、左を避けて、ふところへ飛び込む。

「スマッシュ！」

かけ声とともにルナの右手が輝いた。さながら焔をまとったがごとく、赤く、拳を握り、突き出す。

渾身の力を籠めた一撃は、獅子怪人

の腹腔へ叩き込まれた。

「グゴオオオオッ！」

それにどれほどの威力が秘められていたのか、げえと吐瀉物を撒き散らす怪人の胴体がぐの字に折れ曲がり、よろよろとよるめいていく。

追撃をかけようと踏み込んだ、ルナの足が、その時停止した。

目前をごおっ！ と巨腕が薙ぎゆく。

(演技――?)

一撃は効いていたはずだが、反撃に使う力も残っていないフリをしていたのか、無防備に突っ込んでいたらまた吹き飛ばされていただけだろう。

エネルギーの消費が激しい。スーツの耐久力もあとわずかだ。

「思ったより――頭が回るのねっ！」

けれど、その一撃は避けることができた。同じ手は二度と喰わない――！

と、再び踏み込みかけて、ルナはふと違和感に気がついた。

(な……なんだか、胸がすーすーするよな……?)

冷えた風の感触を胸元に感じるのだ。

具体的に言えば、おっぱいのあたりから。

周囲の観客から、おお、とか、見ろよ、とか、歓声が湧いている。

ルナはふと胸元を見下ろして――。

「きゃ、きゃあああッ！」

ぷるると、まん丸い乳房の素肌丸見えの己の胸部に気がついた。

真っ白だった肉玉は仄かな桃色に色づいている。ぴったりのコスチューム

と乳肌の狭間に広がる汗が、その魅惑の少女乳をしつとりと湿らせている。

怪人の爪が器用にも、スーツの表面だけを引き裂いたのだから。

とうか絶対にはげとど。

胸元を隠しびよんと飛び退く。

「ひっ……ひどい、怪人さん……みんなの前でこんな、恥ずかしいっ……！」

ぷるぷると身体を震わせるルナは顔を赤らめ涙目であった。

「グルアアア!!」(、誤解だ！)

ぶんぶんぶん、と首を振る獅子怪人だが周囲の視線は冷えきつてゆく。

「まあ、悪の組織だからなあ……！」

「いやでも、女の子を相手に……！」

「恥ずかしいのかねえ……！」

ひそひそ。ひそひそ。

直接、口を向けられるよりも心に刺さる攻撃がグアルガーを襲う。

「グ……!! グアアアアアア！」

知ったことかと、彼は吠えた。

意識を恐怖で塗りつぶすような獅子吼に、周囲の人々は硬直する。失神する者まで現れた。

「……許さない、許さないんだからっ……」

だが、声に籠もる怒気ならば、こちらも負けてはいない。

逆巻く桃色の髪。左腕で胸を隠したまま、差し出す右手。

そこに――中空から一本の、バトン

が現れた。白とピンクの混じりあう柄の先端に、真っ赤なハート型のルビー

が取りつけられた、それはルナのマジ

カルバトンである。

「ヒート・エグゼティカ！」

ルナのかけ声とともに、ルビーが赤く輝く。

赤く、赤く、まるで血のように。

「グルアアアアアアッ！」

吠え、地を蹴る獅子怪人の拳動には、明確な焦りがあった。

早く奴を、奴を屠らなければ、と。だが遅い。彼の体躯は進むルナのオーラに遮られそれ以上には近づけず、そうしてルナの秘奥技は発動する。

おお、あれこそは美少女戦士ルナ、必殺の――。

「ファイナル、アター――ック！」

ルビーから、否、ルナの全身から真っ赤な閃光が迸る。

烈風が逆巻き、衝撃が駆け抜ける。そして――。

「グアアガアアア――」

グアルガーの身体は閃光に吹き飛ばされ、天高く舞い上がりお空の星と消えゆくのだった。

「おお、勝った、勝ったぞっ！」

「ありがとうルナっ！」

「ルナ、ばんざいっ！」

街を守られた民衆からの、惜しみない賞賛がルナに降り注ぐ。

スーツの再生が終わらないルナは、左手で胸元を隠したまま、俯き加減で

少しだけ恥ずかしそうに笑う。

戦闘に気炎を吐いていた美少女戦士

も、終わってみれば年相応の少女だ。化粧つけの少ない顔が恥じらう様は、瑞々しくも愛らしい。

この街にズールが現れ破壊活動を行い、それをルナが阻むというルーチンももう何度目になるだろうか。はじめは、ズールを恐れ戦いでいたばかりの住人も、可憐な少女の活躍によって恐怖を拭い去られていった。

(……だから、私は強くなれる)

サテライトフォームの力の源は、「感情」である。ズールを恐れず、ルナを応援してくれる人々の心。呼応するルナ自身の勇氣。それらが、スーツにさらなる力を与えるのだ。

ルナは両手を下ろし、人々に向けて深々と頭を下げる。

「みんな……ありがとうっ！ みんなのおかげで勝てたよっ」

「いや、いつもいつも、守ってもらっているのはこちらだから……っつてうわっ、ルナちゃんっ」

慌てた声。頭を上げてきよんとする、ルナの乳房がプリンのようにぶるると揺れた。きやあと悲鳴を上げて胸元を隠すルナ。その様子に、人々からドットと笑いが湧き上がる。

「あ、あはは……」

と。苦笑を浮かべるルナの、サテライトフォームにより研ぎ澄まされた聴覚は、笑みに紛れて幾度も重なるシャッター音を捉えていた。

(……また、あの人だ)

群衆の下方にでっぴりとした人影が

這い蹲っている。地面に寝そべり、ルナを見上げるようにしてカメラを向ける男がいた。

下着を撮られたかもしれないと、ルナは内股にスカートを押さえる。

ニキビだらけの面貌に、鼻の頭にはびつしりと玉の汗を浮かべている。手に持つカメラは大砲みたいに大きくて、シャッターを切るその姿は必死である。

「ルナたん……ルナたん……ルナたん……ふふ、可愛いよお……」

ぶつぶつと呟き続ける彼が、ふとルナの視線に気付くと、嬉しげにニンマリと笑う。

「あ……あはは」
「あ……あはは」

この街のどこで戦おうとも、必ず彼は駆けつけた。あのでっぴかいカメラを携えて、ルナの写真を撮り続けている。特に、ローアングルからの角度がお気に入りらしい。

(……うう)

わずかな嫌悪を感じないでもない相手だが、邪険にはできない。彼だつて、私に力を与えてくれる大事な人なのだから。

それに。

彼は、私の素顔を――。

「おいコラッ！ てめえ、どこ撮つてやがるっ」

と、寝転がる彼へ向けてそんな罵声が放たれた。ピクリと身体を震わせる男の、その背中が踏みつけられる。

義憤に駆られた、民衆の一人だ。男はカメラを守ろうと腹の中に抱え込んで、亀みだりに這い蹲る。その背中へ踏み下ろされる足、足。

「この野郎ッ」と、一人が蹴りつけようとした。

「やめてくださいっ！」

慌てて、民衆の内に割つて入る。

「でもよお、ルナちゃん」

「こいつ、ルナちゃんの下着を……」

「いいの、私は気にしないから」

ニコリと笑うルナに、まあ、君がそう言うのなら――と、民衆は矛を収めてゆく。

「大丈夫ですか？」

男に向き直り、右手を差し出す。

「フ……フヒッ」

彼は顔を真っ赤にして、ルナの手を握った。

――ぬちゃりと、汗の感触。

筋肉が腕を引っ込めようと反応して、それを必死に抑えつける。

「あ、あは、ありがと、ルナたん。あは、あはは……」

立ち上がる、彼。ねとりとした視線が、ルナの全身を這い回る。

「や、やっぱりルナたんは僕のことが好きなんだ……」

ぞつ、と背筋に寒気が駆け抜けた。

彼の内ではいつたい、どんな妄想が練り広げられているのだろうか。

「そ、それでは……」

引きつった笑みを浮かべて、ルナは男から手を放す。

「じゃあ、みんな！ また会いましょうねっ、ばいばいっ！」

ぶんぶんと、大きく手を振るルナ。そんな彼女に浴びせられる、惜しみない賞賛――。

「クハハ！ クハハハハハハハハ！」

敗北したはずのポルドーは嗤う。

いい気になっているがいい。

貴様の、築き上げた誇りと栄誉を地に落としてやる。ただねじ伏せただけではつまらないのだ。

「喰らうがいい……ルナよ」

と、ポルドーは彼女へ手を向ける。

彼は己自身に改造を施していた。

強力な、催眠能力を開発したのだ。

脳へと直接作用して、意識、認識を狂わせることができる能力。サテライトフォームの能力を解析し解明し、ようやくその防御能力を打破できる力を得ることができた。

さあて、どうしてくれようか。

- ◆いま、この場所で彼女を睨めてやろ
う…… ↓ シーン2へ
- ◆魔法少女ルナの正体を暴き、追い込んでやる…… ↓ シーン3へ

シーン2

何か聞いてきた。きいんと——
細く強靱な、糸のような音。

「な……なに、これ……？」

その糸が耳孔へ侵入して、脳に絡みついてくる。脳神経の一本一本が、糸に置換されてゆくようだ。

頭の中に音が響く。

怪人との戦いで消費したエネルギーを、補充しなければならぬ——と。

その方法は、方法は——なんだっけ。

ああ、そうだ。

ルナは一人の男に歩み寄る。

彼は——周囲の人たちは、立ち去ろうとしてまた踵を返したルナにきよんとしていた。

男の足下に、しゃがみ込む。

「ど、どうしたの、ルナちゃん？ ……」

「う、うわあああっ!!」

ルナの右手は彼のズボンを押むやぐいと押し下げたのだ。

頓狂な悲鳴を上げて男は離れようとするが、サテライトフォームによる筋力増強の恩恵を受けているルナから逃げることはできない。

下着を、膝のところまで脱がす。

するとぼろんとまろび出る、肌の色をしたソーセイジのような肉塊——。

「きああっ！ 何してるのこの子ッ」

「ど、どういふつもりなんだいっ！」

周囲から降り注ぐ疑惑の声。いったい何をそんなに騒いでいるのだろうか。

「え……？ どういうっ、て？」

戸惑うようにルナは小首を傾げて。
「あなたの精液で、エネルギーの補充をするだけだよ？」

ぱくんと、男のペニスを躊躇なくくわえ込んだのだ。

「うっ、うおおおおっ!!」

美少女戦士の口腔に分身を包まれた男が声を上げる。肉根は口の中でたちまちに大きくなって、幼げな唇をまん丸と広げてゆく。

「ん〜」

鼻息を漏らすルナは嬉しげである。

びくん、びくんと震える肉茎。舌を伸ばしてそれにずちゆると這わせる。

「ふおおっ!!」と呻く男の腰が揺れ、頬肉をずろりと撫でた。

（あ……口の中が、あつたかい……）

見た目はグロテスクな器官だが、ここから私に元気をくれる源が出るのだと思うと、愛おしくすらある。

「だっ、だだ、駄目だよルナちゃんっ……君が、こんな……」

男はまだ何かを言っている。

これはビクビクと震えて、とつても嬉しそうなのだ。

（これ……チ●ポ、だっけ……雑誌で見ると生々しいよ……）

本物を見るのは初めてだ。男の、性器。熱くって、固くて、遅しくて。

——アレ？

（え……エネルギー補給の方法は、男の精液を飲むこと……だよね……？）

そう、こんなことは何度も行っているはずで。だからベニスだっ、何

も見ているはずなのだ。

精液の中に含まれているエナジーが、サテライトフォームのエネルギーになるのだと——誰かに教えられた。

それは、みんなも知っていることのはずなのだ。

（どうして……みんな。そんな不思議そうに私を見てるんだろう……）

湧き上がる違和感を抑えながら、肉鞘をぬちゆると舐める。ぶにぶにとした血管の感触を楽しみながら上から下までぬろおおと舌を通させると

「うっうっ」と男は呻いて腰を震わせる。

「んふっ……ちゅ、ちゅばっ……」

可憐なる花びらのような舌肉が、肉根を這いずり回る。唾液が口腔に溢れ出して、ちゅばちゅばとイヤらしい水音を放ってゆく。

「んじゅるっ……じゅるぐちゅっ！

んふ……せーえき、出して……エネルギーを補充させてえ……にちゅる！」

可愛らしいコスチュームの内側で未成熟な肢体を蠢かせ、桃色の髪をぶらぶら揺らして男の腰に吸いつく。

己の胸元すら隠さずにまん丸とした張りよい肉房が、口腔愛撫にあわせてほよほよ揺れているのを隠しもしない民衆はただ立ち尽くすばかり。

——あの、美少女戦士ルナが、いったい何をしているのか。あまりに常識外れの淫らな行為を、どうして平然と行えるのか。——理解できない。

「すげえ……ルナちゃん、どこでこんな覚えたんだよ。チ●ポに、舌がぐ

るぐる絡んでっ……！ ぐっ、き、きもちいいっ……ッ！」

男の呻きには確かな悦びがあった。守るべき人間を喜ばせている。それが嬉しくてルナはいっそうに、肉根への奉仕に熱を入れる。お尻をフリフリと揺らしながら、頭蓋を左右へくねらせて龟头を粘膜に擦りつける。

そうしながら傘の裏を舌先でなぞると、鈴口からトプトプと、男の悦び汁が溢れてくるのだ。

（ん……なまぐさあい……）

じゅるっ、じゅちゅっぶちゅっ！

空気が混じりあい泡を立てる唾液が粘ついた音響を放ち続ける。赤ちゃんの肌のようにスベスベの頬肉がぼこぼこと膨らんで、その内で踊る肉ウナギの元気の上さを知らしめる。

ゆらゆら揺れるロングヘア。

たぶたぶ弾む肉果実。

桃色コスチュームに垣間見える肌は汗ばんで、朱色を混ぜてゆく。

「んう……じゅるちゅ！ ぐちゅるっ……ちゅぶちゅっ。あはあ……」

姿勢はしどけなく、さながら猫がミルクを舐めるように可愛らしい姿である。それなのに、嬉しそうに上目づかいで男を見ながら、口中ではくちやくちやくちゅくちゅ性器を吸るルナ。

初心っぽい美少女戦士のそんな姿に、男の興奮はイヤでも刺激されてゆく。

「ふおおっ！ き、きもちよすぎっ……美少女戦士の舌技、すっすぎいっ……！」

……チ●ポ、溶けるっ……！」

男が呻きながらズンズンと腰を突き上げてくる。上顎で滑りながら喉チンコにコツコツぶつかって、込み上げるえずきを必死に抑えつける。

「えっ……えおっ、んひ、ちゅう……」
反射的に背骨をくねらせるその様子は、はたから見ればチンポに縋りついて愉しんでいるようにしか見えない。

「信じられない……あの子、アソコをしゃぶるのがそんなに楽しいの？」
「ん……チュパ。……どうして？　みんな、そんな目で私を見るの？」
ペニスから口を離し、ルナは小首を傾げる。突き刺さる、周囲の目。

信じられないものを見るような。「何を。ルナちゃん、君がいま何をしているのかわかっているのかい？」
「え……。うん。わかっているよ？　戦うために、エネルギーがいるの。だから、みんなのチンポからザーメンを飲まないといけないの。いつもしていることだよお？」

「いつ……いつもっ!?」
「いつも……こんなことをしているのかっ……」

ざわめきが、広がっていく。いまさら何を驚くことがあるのだろうか。
「うん。だからちようだい。もつと私にみんなのザーメンちようだいっ」

両手を握り、ルナは、ベトベトに汚れた唇で皆を見上げておねだりする。

育ちすぎの乳房を隠そうともしない少女のそんな有様は、怪人との戦闘で露出したバストに恥じらっていた様子

とあまりに違いすぎた。
「……こんな女だったなんて」
「信じられない……」
「え……みんな、な……？」
「……もしかして」
ズキン、と頭痛を感じた。
（私が何か、間違っている——？）
と、その時。また、あの音が聞こえた。脳髓に糸を絡みつかせるような音。
「……あ、ああ、そうか。うん、そうだったなあ。ルナちゃんに、精液を飲ませてあげなきゃ……」
「頑張つて、戦ってもらつて」
「俺たちの精液で世界の平和を守っているんだもんな、ルナちゃん……」
引いていた男たちの足が止まる。その目が欲望にぎらついていく。股間が、むくむくと膨張してゆく。それをルナは、みんな、エネルギー補充にやる気充分と見た。
ああ、なあんだ。
やっぱりこれでいいんだ。
男たちはペニスを取り出してルナに突きつける。どれもこれも遅しくて、精力に満ちたものばかり。
これなら、充分なエネルギー供給ができそうだと、少女は微笑んだ。
「ほら、続きをしてくれよ……」
口奉仕が途中だった男が、ルナの肩を押さえつける。膝をついて、ルナは大切な男根をお迎えした。

（もつと……もつと……いっばい……みんなの快感が、私に力をくれるんだ）
右手で、一本を。左手で、一本を。

それぞれの手に男根を握る。上質のシルクに包まれたような手のひらの感触に、それぞれがわなないた。
こしゅりっ、ごしゅ、ごしゅ！
「うおおっ……ルナちゃんのおててっ」
「すべすべしてやがるぜっ……」
潤滑液がなくとも少女の肌は滑らかに男根を愛撫する。ふにふにですべすべな少女の肌は、まるで極上のオナホールだ。またそのオナホは自動的に前後して男根をしゃぶってくれるのだからたまったものではない。

「び、美少女戦士の手コキ、気持ちよすぎっ……！」
しつとりとした白魚の手に愛撫され、ぶるぶると腰を震わせる男たちは、早速の射精感を必死で押さえ込む有様であった。

「へへ……こつちもサイコーだ。ルナちゃんのオクチ、どろどろだぜ……」
「んふっ……じゅるぐちゅっ……ちゅ、ちゅるるっ、ぐちゅるっ……」
蕩けるような美少女戦士の口壺。龟头や傘や肉鞘にべつとり張りつく軟体動物が、快楽神経を巧みに愛撫して彼もまた苦しげに呻く。

「待ちきれねえっ！　俺は髪だあっ」
「お、俺も俺もっ！」
何人かはルナのピンク髪を掴んで、汚根へ乱暴に巻きつけて、ごしゅごしゅとしごき始めたのである。

「んじゅぶっ……ああん、わたひの髪もチンポのおもちやにいっ……」
美容には気を遣っていた髪だ。それを肉汁を絞り出すための道具に使われることに悦びを感じてしまう。
（嬉しいいな……みんな、こんなに私にエネルギーをくれる。あは、ルナ、とっても嬉しいよお）
正義の味方、その使命を果たしている幸福感がルナを包み込んでいく。
「へへ、ルナちゃんの身体、全部でチンポエネルギーを搾ってるぜ」
龟头をレロレロ舐められながら、男が愉しげに嘔う。
「んっ……ちゅばっ、んんっ、う、うれひいっばい、エネルギー補給う……してりゅうっ！　んっく、ぐちゅるっ……ぐちゅるるばっ……！」
「んっくっ……！　よし！　みんなでもつと協力してやろうやっ！」
男の言葉に、背後で歓声が湧いた。何か、ごそごそと用意を始めている。ペットボトル……とかいう台詞も聞こえた気がしたが、よくわからない。
小便を垂らす器官を、ちっちゃなおクチでちゅべちゅべ舐め上げて、しつとりと滑らかな両手で包み込みしごき上げる。四方に引つ張られた髪の毛はペニスを雑巾で拭つているような扱われ方で、けれど、そんな汚辱すらえもいわれぬ恍惚を感じてしまう。
「んちゅるるっ……じゅぶっ！　みんな、わたしがきもひよくしてあげるからっ……！　んちゅ！　いっばい……えね

るぎー、ひようだいっ!

少女を囲む男たちの、うつうつとい
う呻きが断続的なものへ変わってゆく。
「いくぞ、ルナちゃんっ……オクチの
中に、いっぱい出すぞっ……!」

口中で男根が、痙攣を始める。それ
に做うように、両手や髪的男根も。

「お、俺もイキそうだっ……」
「おててに出すからねっ……」

「んふっ……いいよほお、だひて、み
んなのえねるぎー、じゆるばっ、だひ
てっ……んぐちゅ、ぐちゅ!」

肉鞘をしごくように頭蓋が前後して、
両手も激しく男根をニギニギ揉み上げ
る。淫らに膨らむ乳房がたぶたと上
下に跳ね躍り、それほどに熱の籠もつ
た美少女戦士のご奉仕に、男たちはも
はや耐えられなかった。

「う、出るっ、出るうあああっ!」

呻き、口中で肉根が炸裂する。

どびゆるるるッ! びゆるるるるッ、
びゅ、びゆるるるッ!

「ンンンンッ! ングウウ、ングッ、
フウウウウウ……ッ」

熱された粘塊が、喉奥にびちゃびち
やと叩きつけられる。瞳を見開くルナ
の頭蓋が、白濁の衝撃に打ち震える。
(しゅごいでてるうっ、んぐぶっ、し
ろいの、いっぱいオクチにい……!)

「はぶううっ! うぶるううっ!」
ペニスを含んだまま、喘ぐルナの両
手からもドクドクと肉汁が飛び出した。
それに做うように、桃髪に包まれた肉
根も破裂する。

(てに、かみにもおっ……ああ、あた
まがざーめんだらけだよおっ)

どぶどぶ、どぶどぶどびゅ。びゅう
びゅうびゆるる。たまらなくオスの匂
い立つ肉汁が、手のひらに、髪に、顔
面にまで撒き散らされる――。

「あああん、ん、じゆるううう」
唾液まみれの肉棒がずるり、と抜か
れていつて、唇は未練ありげにそれに
へばりつく。肉鞘表面の精を一つ残ら
ず剥ぎ取って、最後。抜けようとする
鈴口に、唇で吸いつくと――。

「ちゅ、ちゅううううううう」
頬をべこんとへこませて、尿道に残
る生臭汁を勢いよく吸い上げてゆく。
(おいひい……おいひいよ……ああ、
えねるぎー、おいひい……)

口腔の沼地に浮かぶ白いオタマジャ
クシ。それを味わうようにモゴモゴと
頬袋を蠢かせると――。
「ん……こく、こくんっ……」

喉を鳴らして嚥下してしまった。

「な、なんだかエネルギーじゃなくて
精液が好きみたいだな……」

「見ろよ、あの美味しそうな顔」
ざわめく民衆の目前で、美少女戦士
はザーメンを吸って瞳を蕩かせる。

「ああん、くしゃいの、くしゃいのい
っぱいなの……こんなにいっぱい、く
さくておいしいのだしてもらっちゃつ
たあ……ん、ちゆる、べろりっ……」

両手にまぶされた熱くトロトロの肉
ミルクを肉舌でべろべろ舐め取る。髪
の毛にへばりついた肉汁をこそぎ取つ

て、ちゅばちゅば舐めしやぶる。

「ああ……すごい、あじこゆい……」

唇の周りをザーメンまみれにして微
笑む少女は、観衆が生唾を飲むほどに
淫靡であった。

「精液は美味しかったかい?」
「うん……おいしかった」

エネルギー補給のためののに、たま
らなく甘露に感じられた。もつと欲し
い、もつと飲みたいと、そう思った。
「そんなルナちゃんにプレゼントだ」
と、男たちがルナに何かを差し出す。
それは、一・五リットルのペットボ
トル。黄白色の液体が首元までたつぷ
りと詰まった、精液容器であった。

手渡されたそれは生暖かく、男たち
の体温が生々しく残っている。
「ふああ……こんなに、いいの?」
「うん、さあ、飲んでごらんよ」

民衆の、期待に満ちた視線を向けら
れて、ルナは恥ずかしげに微笑むとペ
ットボトルに口を近づける。

「う、うわああ……すごい、く、くさ
いよああ……こんなのお……」

脳まで溶かすような臭気に、下腹が
キュンと疼いた。

ペットボトルを傾ける。
トロオ……と流れ落ちる粘性の高い
生汁が、口中に溢れてくる。
(ああっ……生臭くて、ツブツブして
るう……くちのなか、いっぱい……)

「ンッ……ゴク、ゴクゴクゴク……」
口腔に溜まりゆくエネルギー源を、
喉を鳴らして飲んでゆく。ドロドロし

て、ニチャニチャと絡む男の青汁は、
ネットリと食道にへばりつく。

「ゴック……ゴクンっ! 濃くてえ……
……ドロドロでえ……おんぼみるく、
喉かりやみゆよお……ん、ゴクンっ」

眉根を垂らし、精液にまみれた豊乳
を揺らして、生臭汁を嚥下してゆく美
少女戦士。

「あっ、げぼお……胃の、いのか
に、ちんぼみるく、たぶんたぶん
て……たままってくう……」
そうしてその肩が、腰が、ふるるつ
と震えた。脳漿を侵すたまらない生臭
さが、新たなアクメを導いたのだ。

「ん、ごほっ……は、はひい、いつち
やった……わたひ、みんなのちんぼみ
るくので、いつちやいまひたあ……
ああ、あははっ……」

酔ったように笑い、少女は再び精液
ドリンクを飲み始める。

どれだけ飲めるのかとおもしろがる
男たちが、また新たなペットボトルに
新鮮なザー汁を注ぎ込んでいく。

ここで、記憶を残したまま民衆の催
眠を解けば、もはや彼女はただの精飲
人形としか見られない。戦士として戦
おうとも、人々から勇氣の力を集める
ことは叶わないだろう――と。
どこかで、誰かが嗤った。

「くっ……ゴクゴク……! おい
ひい、おいひいよお。みんなのザーメ
ンペットボトルう……」

BAD END



シーン3

とある学園の中等部。

その一クラスにルナの姿はあった。

隣には、カマキリのような、白衣を着た男がいる。

(ここ……は)

私はここに、何をしに来たのだろうか
と考える。けれど思考はもやまとつ
たように不明瞭だ。

(先生が……いる)

山岸先生は、現れた二人に戸惑って
いる様子だ。生徒たちは、街で人気者
のルナを前にして色めき立っている。

「クク。どこでもルナは人気だな。……
ええ、イベントを起こしたかいがあ
りますよ」

と、ボルドーが山岸先生へ言う。

イベント。そうだ、イベントだ。

ボルドーは、ルナの支持者の一人で。
人々にもっと応援してもらおうと、交
流会を提案してくれたのだ。

(それで、私は賛成して。どうしてそ
の場所が、ここになつたんだっけ?)

ここは——私のクラスだ。

ルナの通う学園の、ルナの通うクラ
スが、交流会の会場だった。

ボルドーに促され教壇の前に立つ。

「み……みんな、こんにちわ。ル、ル
ナだよ、よろしく、ねっ……」

声の後半は掠れ気味だった。

どうにも気恥ずかしいのである。

だって、みんなが見ている。
渚ちゃんや穂野香ちゃん、菜葉ちゃ

んや笛糸ちゃんが。

それに……加納君まで。

(クラスのみんなに見られながらだ
なんて……なんだか、恥ずかしいよお)

でも、頑張らないと思う。

みんなの応援が、サテライトフォー
ムの力になるのだから。

「な、何か質問はあるかな? なんで
も、答えるよっ」

「はいっ、はいはいっ!」

と、渚ちゃんが元氣よく手を上げる。

「怪人と戦うのって怖くないの?」

「えと、怖いけど、頑張ってるよっ」

「技っていくつくらいあるの?」

「百八つまで」

「多ッ!」

「じゃあ、好きな人はいますかっ!」

——その質問に、ドキリとした。

そつと、クラスの後方へ目を向ける。

(加納君……こつち見てる)

頬に朱が昇っていく。頭の中が熱く

なる。サッカー部エース、加納伸吾。

ちよつぱりハンサムな彼こそが、ルナ

が密かに慕う男の子だった。

「あー、いる感じだっ!」

「い、いないよっ! いないっ」

「でも顔真っ赤だし!」

からかうように渚ちゃんが言う。

「ほかの質問をお願いしますっ!」

「あ、じゃあ……」

おずおずと、菜葉ちゃん。

「えつと……趣味はなんですか?」

「趣味? ……んつと」

趣味つて、何があるだろう。

ああそうだ。みんなもやっていて、
私も大好きなアレがあった。休み時間
にしたり、見せつこしたりするアレだ。

ルナはその顔に笑みを浮かべ。

「オナニーだよっ」

——とつても楽しいその趣味を、み

んなに紹介してあげた。

「は?」

時が止まる。空気が凍りつく。

いま、この子はなんと言つたのだ?

「ご……ごめんさい、ルナさん。よく

聞こえなかつた。趣味は、なんて?」

「うん。オナニーだよっ! すつごく

気持ちよくて、大好きなんだっ」

満面の笑みをその顔に浮かべたまま、

美少女戦士はハキハキと答える。教室

の中にざわめきが広がってゆく。

「……? どうしたの、みんな?」

何かおかしなことを言つただろうか

と、ルナは首を傾げる。

「……クク。フブハツ、……みんなま

だ、オナニーというものがよくわから

ないんじゃないのか? ほら、君に比

べたらお子さまなんだろう」

「あ、うんっ! わかつたよっ」

そうか、オナニーを知らない子もい

るのか。しょうがないな、だつたら私

が教えてあげよう——と。

当たり前に行つてゐることを皆知

らないという矛盾に気付かないまま

ルナは、みんなに見えやすいようにと

教卓へ腰を下ろした。

両脚を、かばりと開く。
フリルに彩られたピンク色のミニス

カートが捲れ上がって、黒々とした二
ーソックスの奥、鮮烈な肌色の絶対領
域が破られる。

奥に見えるのは純白の、アイドルの

ような少女が穿くにはちよつぱり地味

な混綿のパンティであった。

少女の細指が、その股ぐらを示す。

「おなにーつてね、ここを、指でスリ

スリ擦つたりするんだよ!」

あくまで無邪気なルナの告白。だが

勉強を教える教壇に腰を下ろして大股

開きなその姿勢はあまりに大胆だ。

「君は! 何をしているんだっ!」

それまで呆気に取られていた山岸先

生が、制止しようと動く。だが、ボル

ドーの手のひらがそちらを向くと。

「あ……いや、いい……続けなさい」

「はあい」

瞳から光をなくした先生に促され、

ルナは嬉しそうに右足を引きつけてん

しょんしょとパンティを脱ぐ。左足の

足首に絡ませて、再び脚を開く。

あらわとなるのは、陰毛もわずかに

しか生えていない清純なヴァギナだ。

皺の寄せあつた縦スジにしか見えな

い、なるほど、混綿の■■■ばんつにお

似合いの、■子がごとき恥肉のワレメ

であった。

「う、うわあ……」

「女の子のアソコ、初めて見た」

「■■■みたいなおソコだ……」

「どうしちゃつたの、ルナ」

口々に呻く生徒たちは、けれど美少
女戦士の股間から目を離せずにいた。



クンアア
アアアミ

このまま
やられて

たまるか
アアアア

淫魔!

覆滅!!

退魔師
篠宮せつなの

学園に潜む魔を
滅するために!

名において
命じます!

学園退魔師 篠宮せつな

～終わりなき白昼淫夢～

漫画 ぱふえ
COMIC



クソ！
何て奴だ
今は
退くぜ

俺ア直接
戦うタイプじゃ
ねーんでナ

これで本命に
辿りつけると
良いのですが

はい♡
ごきげんよう
次はお仲間を
連れてきてよ
良いですよ



先任の退魔師
橘 愛莉先生
たちばな あいり

彼女の様子が
おかしいらしい。

調査のため
この学校に
赴任してきた
ものの



会えず
じまい



先生はいる
はずなのに

大した淫魔に
出会わない

すれ違い
ばかりで



おっ見ろよ
篠宮せつなだ

学園に漂う
妙な空気…

マジ?
ラッキー

やっぱ
可愛いよ…

な!?



皆どこか
フワフワと
浮ついて

ガッ

ガッ…

ガッ

淫気の薄い
唇間は出ない
でしょうし



なにかが
おかしい

…

放課後の
調査のため
いくつか封印を
施しておきま
しょうか



!!



ごく自然に!

ズッ
ズッ

何事もなかった
かのように!!



えええええ
!?

何?何ですか?
スカートが!?
いつの間に!?



ホツクが
壊れて脱げた
?

き気づき
ますよね
普通



……
……
落ち着くのよ
せつな
うん!



カカカカ

気を取り直して…







えいっ！
おちんちんで
美味しーもの
なのですか？

はぶ
…
ん

はしたない
ですけど…

舌が止まり
ません…



私…おちんち
んを…

はあ…は

んふ…ん
はう

でも
美味しー

病みつきに
なりそう♡

吸い出され
そう…だっ

うわわ
そんなに
キツク…

いい！
いいよ！！
そのまま
吸って！

びび

マンガ連動特別企画!

学園に潜入した篠宮せつなを襲う
催眠陵辱の罠!

学園退魔師

篠宮せつな

～終わりになき白昼淫夢～

あおいむらまさ
小説 蒼井村正

挿絵 ぱふえ

「校内をこれだけ探して手がかりなしということは、よほど穩形に長けた淫魔のようですね。橘先生との連絡もつかないままでし、困りましたね……はああ〜」

夜の学校内を探索しながら、少女は小さなため息をつく。彼女の名は、篠宮せつな、少女退魔師だ。

この学園に教師として赴任していた先任の退魔師、橘愛莉が定時連絡を絶つたため、転校生として潜入調査を行っている。

転入からこれ一週間、学校の敷地内各所を回って淫魔の気を探り、生徒たちから学校の怪談じみた噂話を収集してきたのだが、これといった成果も出せず、おっとりした性格の彼女もそろそろ焦りを感じ始めていた。

学園内の空気に違和感を感じている。教職員や生徒たちの様子も、どこか浮ついたような感じで、具体的にどうとは指摘できないまでも不自然だ。

何かがおかしい……そう思っているのだが、その、「何か」がいまだに掴めずにいた。

「あれっ、屋上の『星見の部屋』から明かりが漏れてますね。天体観測施設ですから、夜に誰か居るのは不自然ではないけれど……なるほど、これは盲点だったわね」

校舎の最上階に位置するドーム状の施設から、明かりが漏れているのに気付いたせつなは、軽く眉をひそめながら何やら一人で頷いている。

星空の街として天文マニアの間では有名な土地に建てられているこの学園は、かなり本格的な天体望遠鏡を備えた天文ドームを持っているのだ。

（昼間にちよつと偵察したときは、特に何も感じなかったけれど……ダメ元で行ってみましょうか）

あれこれ思い悩むよりも行動するのとを優先する少女は、気配を殺して非常階段を駆け上り、明かり取りの天窗から室内を見下ろした。

（うわ！ うわうわうわあ！ これはイケナイ光景ですよ）

天体観測室で練り広げられているのは、とてつもなく淫靡な乱交遊戯であった。

視界内に居るのは、全裸の少年が三人と、セクシーな下着姿の女性が一人。

（まさか、あれは橘先生！ 連絡が取れないと思ったら、深夜の天体観測室で教え子との恥戯ですか!?!）

クールな美貌と、モデル顔負けのプロポーションの女教師、橘愛莉は、退魔師としての力量も確かなはずなのだ

が、今、その表情は淫らに濁り、目の前にそりおつぺニスの群れにむしゃぶりついて、愛おしげに愛撫している。

「んはあ……二人とも、立派よ。あんなに出したのに、まだこんなに硬いなんで……あむ、ちゅばちゅばちゅば、びちやっ……」

正面に並んだ二人のペニスに指を絡めて扱き上げ、大胆な舌使いで亀頭を交互に吸いしゃぶりつつ、まろやかな

尻を弾ませて、騎乗位で飲み込んだもう一人のペニスに奉仕している。

（凄くエッチな光景だけれど、淫魔の気配は感じないですね。もしかしたら淫魔を誘い出すための罠、なのかしら？ もうちよつとだけ、様子を見てみましょう……）

迂闊に乱入してやぶ蛇になるのも嫌なので、せつなはしばし様子見を決め込む。

「んふ、あむ、若くて硬いチ●ポ……すごく美味しいわ……」

愛莉の濃厚にして繊細なフェラチオ奉仕は続いている。

口元に引き寄せた二つの亀頭で、ピノクの舌先が小刻みに閃き、敏感な先端のワレメを絶え間なく刺激して若い勃起を射精に追い込んでゆく。

「先生、ポク、もう……。でっ、出るよッ！」

「おつ、オレも……あああうっ！」
 女教師のフェラ責めに屈した少年たちは、ほぼ同時に絶頂を迎える。

「あああ、出してえッ」

歓喜の表情を浮かべた女教師は、大きく口を開いてザーメンシャワーを受け止め、射精中のペニスをなおも扱き立てて、迸る白濁液を自らの顔面や豊乳に塗り込める。

「こっちもイクぜ！」

ヴァギナに挿入していた少年も、下からの激しい突き上げで、愛莉の裸身を揺さぶる。
 「ひあ！ はあああんっ！ イクッ、

イクッ、イクわあああ！」

精液まみれになった女教師の裸身が、弓なりに仰け反って痙攣する。

「派手にイッたな、先生、退けよ！」

ヴァギナを犯していた少年が、余韻に浸っている愛莉の身体を荒っぽく押し退け、挿入していたペニスをズルリと引き抜く。

うつ伏せになってビクッ、ビクンッ、と身を震わせる女教師の膣奥から、中出しザーメンがドロリと溢れ出て、床に滴り落ちた。

「くうんッ……ゴクッ……」

美人女教師と教え子の濃厚なセックスを覗き見ていたせつなは、小さな呻きを漏らし、生唾を呑み込んでしまう。（淫魔を誘い出すための行為かもしれないですけど、先生……破廉恥すぎる気がします）

眼前で展開された生々しく淫らな宴に、少女退魔師の身体も疼いてしまう。「おやおや、まだやってやがったのか？ そろそろ、その女に溜め込まれた淫気を吸わせてもらおうぞ」

耳障りな声を上げながら天体観測室に新たに入ったきた何者かが、愛莉と少年たちのところに歩み寄ってくる。

せつなの視界に捉えられたその姿は、人並み外れた巨体に、巨大な角を生やした異形。

（あれは、淫魔ッ！ 男子たちと愛莉先生は淫魔の術中に堕ちてあんなことを!? これ以上はさせないッ!）
 事態を把握したせつなは、天窗を破

り、室内に飛び込む。

「なっ！ お前は!?」

いきなり降ってきた少女に、淫魔は驚きの声を上げる。

「ビックリさせちゃいましたか？ あなた方淫魔の天敵、退魔師ですよ！」

穏やかな口調ではあるが、強い意志を感じさせる声で自己紹介したせつなの左手には、革表紙の本が携えられている。

「やられてたまるかよ！ お前たち、この女を捕まえろ！」

淫魔の命令で、三人の少年がせつなの前に立ちはだかる。

「邪魔はさせません！ 篠宮せつなの名において命ずる、呪縛解除ッ！」

打って変わって凜とした口調でせつなが告げると、革表紙の魔道書から羊皮紙のページが一枚千切れて飛びだし、封じられていた魔力を部屋の中央で解放した。

煌ッ！

「グウウウツッ！」

「うわあッ！」

魔道書の一片から放たれた「閃光」の呪文が、室内を白く染め上げ、少年たちと淫魔は顔を両手で覆って棒立ちになる。

（これで、男子たちにかげられた術は解けるはず……。あとは、淫魔の本体を滅すれば、先生も正気に戻る……。戻してみせるッ！）

殺傷力の高い「爆裂」の呪符を細く、たおやかな指の間に挟んだせつなは、

閃光の余韻でまだ目が見えない様子の淫魔に向かって颯爽と歩を進めてゆく。（この臭い……間違いない。学園の空気に、ほんのわずかに混じっていたのは、精液の臭いだったのね!?）

室内に突入して以来、鼻孔に粘り着いている青臭い性臭が、学園の敷地内どこに行ってもほのかに漂っていた臭いの正体だと確信したせつなの胸中を、かすかな不安の感情が駆け抜ける。

「何かを企んでいたとしても、終わります、淫魔……許しませんッ！」

両手で顔を覆って棒立ちになっている少年の傍らを通り過ぎようとしたその瞬間。

「オラアアッ！」

術を解かれて放心状態に陥っているはずの少年が、気合い一閃、鋭い膝蹴りをせつなの腹に叩き込んできた。

何か格闘技を習っているのか、腰の入った重い膝蹴りが、少女のみぞおちに突き刺さり、メリハリの利いた肢体を斜め上にはね上げる。

「ぐふううッ！」

奇襲を受けた退魔少女は、肺の中の空気を残らず叩きだされてうずくまってしまう。

「今だッ！ 抑え込め！」

少年たちがのしかかってきて、せつなの身体を床に組み敷いた。

「く……ああ……そんな……暗示は解いたはずなのに……」

車に轢かれたカエルのような情けない恰好で押さえ込まれた退魔少女は、

呆然とつぶやく。

「ハア？ 何言ってるんだよお前。オレ等は別に暗示とかかけられてねえし」

先ほど膝蹴りを放った少年が、苦悶するせつなの背に馬乗りになって嘲笑する。

「えっ!? では、自分の意思で、淫魔に手を貸しているというの!?!」

驚きに目を見開き、顔を振って少年の目を見つめるせつな。

「ああ、そうだよ！ 女犯して楽しく生きられるから、協力してるだけさ。このまま普通に学校出て就職しても、人生何も面白くねえし、こういう生き方も有りだろ？」

冷めた口調で言い放つ少年の目には、操られた者にはない理性の光が宿っている。

「有りじゃありませんッ！ それは、悪魔に魂を売ることですよ！」

「悪魔じゃねえ、淫魔だよ！ オレとこいつらは、人間たちの言う、ギブアンドテイクの関係ってヤツさ」

二人の会話に淫魔が割り込んできた。「何日前から、転校生の女生徒が学校中を嗅ぎ回っているというから、罠に掛けて捕まえるつもりだったが、策を巡らす前に、貴様の方から飛び込んできてくれたな！ こいつは収獲だぜ」

悔しげに顔を歪めるせつなを見下ろし、あざけりの声を上げる淫魔。

「なあ、この女も犯していいんだよな？」

せつなの背に馬乗りになった少年は、

床に押し付けられてひしゃげた少女の乳房にイタズラしながら、淫魔に問いつける。

「もちろんいいぜ。だが、その娘も退魔師だからな。妙な物を隠していないか、まずは着ている物をひん剥いて、隅々までボディチェックだ」

「了解ッ！ まあ、結局やることは同じってことだな！」

他の二人に目配せした少年は、せつなの制服に手をかけ、強引に引き裂いてゆく。

「やああッ！ やめなさいっ！ あつ、やつ、嫌ああああッ！」

抵抗するせつなのシャツが引き裂かれ、ブラが引きちぎられて、たわわなバストが揺れ弾みながらあらわになる。

「なかなかいいオッパイしてるじゃねえか。先生といい勝負かな？」

「この子知ってる。篠宮せつなだろ？ ナイスバディの美少女転校生が来たって、学校の話題になってたぜ」

抵抗するせつなの下半身をまさぐり、下着を剥き下ろしながら、男子生徒の一人が彼女の素性を言い当てる。

「へえ、そうなんだ？ オレ、ここ数日、ずっと橋先生と姦りまくってたから、全然知らねえ。でも、これから思いつきやお知り合いになってやるぜ、せつなちゃん」

せつなの腹に膝蹴りを打ち込んだ少年が、淫魔よりも邪悪な笑みを浮かべて、少女の顔を覗き込んでくる。

「く……腐りきってますね……」

怒りよりも憐憫のこもった目で少年を睨み付けながら、囚われの退魔少女は吐き捨てた。

「そーだよお、オレ、鬼畜外道だからさあ。それじゃあ、ポディチエックだな……何か隠せそうな穴というところ……やっぱここだろ？」

いきなり、膣口に指が挿れ込まれた。「つあああつ！ んくううううッ！」

膣を食いしばって恥辱に耐えるせつなの膣内を、不躰な指が荒々しく探る。「随分狭いなあ。もうちよつと奥の方まで挿れてみようか？」

「くあああ……やつ、止めなさいっ！後悔しますよ！ あうううッ！」

恥辱に震える少女の中で、人差し指と中指が粘膜壁を掻きむしる。

「こつちの穴は、ボクが探ってあげるよ……うひひつ、柔らかいねえ」

ぼつちやり体型の男子生徒が、アナルの蕾に無造作に指を挿入してくる。

「ひゃあう！ そつ、そこはあ！ ひううんっ！ あはあうううッ！」

最も恥ずかしい穴に指をねじ込まれたせつなの身体が、ギクギクッ！ と緊張する。

「ここから先は、指よりも長い棒でチエックしてやるよ。おい、先生、この女の上に乗って押さえ込め！」

リーダー格の少年に命じられた愛莉は、無言のまま這い寄つてくると、せつなの上へのしかかっていた。

「橘先生っ！ 正気に戻ってください、退魔士の使命を思い出して……ッ！」

「大人しくしなさい。あなたもきつと、この快楽の虜になるわ」

仰向けに寝かされたせつなの上に、淫蕩な笑みを浮かべた橘愛莉が覆い被さり、身体を密着させて動きを封じる。

少女退魔士と美人教師、甲乙付けがたいサイズの美乳が互いの柔らかさを競うように押し付け合つてひしゃげた。

「くはあう……んんっ！ 先生ッ！」

生乾きの精液がこびり付いた乳房が、せつなの美豊乳にねちゃねちゃという淫音を立てて吸い付き、全身から漂う青臭い臭気が、少女の顔を歪ませる。

「そのまま押さえ込んでやるよ！ 二人まとめてイかせてやるぜ！」

リーダー格の少年が、重ね餅のように密着した二人の股間に、自慢の巨根をズルリと突き挿れた。

「ひゃうう！」

「あはああんっ！」

熱く硬い牡槍に秘裂を割り開かれ、クリトリスを逆撫でされた少女と女教師が甘い声をハモらせる。

「じゃあ、オレたちは乳マコをいただくとするか」

二人の両脇にしゃがみ込んだ少年の勃起が、密着してひしゃげた乳房の間にねじ込まれ、注挿を開始した。

「おおっ！ これ、すげえよ！ パイズリより気持ちいいッ！」

「ずちゅ、ぬちゅ、ぐちゅ、ぐぶつ、ずぶつ……」

せつなと愛莉の乳房を擦りながら、若い血潮に猛つた肉柱がストロークする。

「やつ！ こんな……いつ、嫌あ……」

「あんっ！」

「ずちゅ、くちゅ、くちゅ、くちゅ、じゅぶるッ……ぐぼつ、じゅぶじゅぶじゅぶ、ぶじゅるるッ……」

重なり合った秘裂と乳房を犯すペニスの立てる淫音は、生々しい粘着音を強めて天体観測室内に響く。

せつなと愛莉のヴァギナから溢れ出した愛液が巨根によつて混ぜ合わされ、痛いほどに勃起したクリトリスに塗り込まれる。

乳房の狭間でピストンされるペニスから搾り出された先走りの体液と、愛莉の乳房にこびり付いた生乾きの精液がローション代わりとなつて、乳辱のストロークはどんどん激しさを増す。

「んは、あつ、アッあんっ、くううううッ！ んむ……んぐううう！」

クリトリスと乳首を生硬い亀頭に擦り廻られ、恥じらい悶えるせつなの唇が、女教師に塞がれ、口腔内に舌がヌルリと侵入してくる。

（先生の舌……変な味がする……まさか、精液!!）

口腔内に流し込まれる唾液に溶け込んだ青臭く淫靡な体液の味が、せつなの顔を歪ませる。

「んふ、くちゅくちゅくちゅ……ちゅばつ、フフツ、私の舌、精液の味がするでしょう？ あなたもすぐに、精液の美味しさがわかるわ」

女同士の濃厚なキスを中断して顔を上げた愛莉は、せつなの瞳を至近距離で見つめながら艶然と微笑む。

「キーワードは……精液、よ……」

精液混じりの唾液に濡れ光る女教師の朱唇から紡ぎ出された言葉を聞いた瞬間、せつなの脳裏で何かスパークした。

（そつ、そうだわ、精液、精液よ！ どうして今まで忘れていたのかしら？ そう、そうだわ！ これも退魔師の任務……淫魔の下僕になった男子たちを射精させて、正気に戻さなきゃ!）

胸の内に唐突にわき起こった使命感に、どこか不自然な物を感じるせつなであったが、乳房と秘裂を硬い肉棒に擦り廻られる快感が、それ以上の思考を許してくれない。

「そろそろイクよっ！ オッパイの中に、一杯出すからね！」

重ね餅状態の乳房を左右から犯していた勃起が、ピクピクと切羽詰まった脈動を起こした。

（ああ、射精、するのね？ 淫魔の呪縛を解くには、一杯射精させなきゃいけない。だから、射精して……私と愛莉先生のオッパイに、精液、塗り込んで!）

快感に掻き乱された少女の理性に、精液に対する渴望がジワリ、とすり込まれる。

「びゅくんっ！ びゅくびゅくびゅくんっ！ どびゅるるるっ、ずびゅるるるっ、どぶんっ、どぶどぶどぶびゅわあああッ！」

擦り飛ばされて張りを増した乳肉の間に精液が弾け、勃起乳首が煮えてしまいうような熱い濁流に包み込まれた。「あああんっ！ オッパイが……灼けちゃうッ！」

甘い声を上げた愛莉の裸身が、アクメの痙攣を起こす。

「せつ、先生、イッてるの？ あんっ！ 震えが伝わってきて、私まで……ッ！」

絶頂寸前まで追い込まれながらも、間一髪で踏みとどまったせつなの鼻先に、ザーメンまみれのペニスが突きつけられる。

「チ●ポがドロドロだ、ほら、お掃除フェエラよろしくッ！」

「んぐ！ んむふうううッ！」

素股快感に喘ぐ女たちの口に、パイズリ射精を終えた勃起が突き込まれる。

（凄い味と臭い、でも、これも退魔師の使命！）

愛莉は喜々として積極的に、せつなは汚辱感を覚えながらも、粘液まみれの男根に舌を絡め、附着した精液を舐め取った。

「やっぱ、フェエラのテクは先生の方が上だな。おい、交代しようぜ！」

「ああ、いいぜ。ほら、今度はこっちを啜えるんだ！」

「はう……ゴホッ！ んっんっんっ、ずちゅるるっ」

少女の唾液にまみれた亀頭を女教師が頬ばり、女教師の口を犯していたペニスを退魔少女が喉奥まで呑み込んで吸う。

「篠宮せつな、一目見たときから、こうやって犯してやろうと思ってたんだ。キミのフェエラテクは、ポクが教育してあげるよ！」

顔を仰け反らせたせつなの口に、精液臭い勃起が激しく突き入れられる。

剛毛をまばらに生やした陰囊が、少女の鼻先にビタビタとぶつかり、食道にまで入り込んできた亀頭が嘔吐感混じりの倒錯快感をもたらす。

「オモチャが増えたら、エツチのバリエーションが一気に充実したな。そろそろこっちにもチンポが欲しいだろ？」

フェエラ奉仕に興じる二人の女性を見ながら、素股責めを続けていたリーダー格の少年は、すっかり濡れ開いてしまったせつなの膣口に亀頭をあてがいが、有無を言わず貰いた。

「はうううんっ！ んぐううううんッ！」

喉奥まで勃起を呑み込んだままのせつなの身体が、巨根挿入の衝撃に仰け反る。

「いい締まりしてるじゃねえか。お前のオ●ンコも、先生同様、オレのチ●ポで調教してやるよ！」

許容量を超える刺激にこわばる少女の膣内で、容赦ないストロークが開始される。

「彼のペニス、凄いでしょ？ 最初は苦しいけれど、すぐに最高の快楽を得られるようになるわ。精液を欲しなさい……精液は全てを叶えてくれるのだから……」

ひと突きごとに跳ね上がるようにするせつなの身体を密着状態で押さえ込みながら、女教師は妖艶な囁きを少女退魔師の耳に吹き込む。

「先生の時は大変だったよなあ。ハードなピストンに耐えきれずに小便噴き出しながらイキまくって……じきにアンいい声で喘ぎ始めたけど、ヒヤハハハハッ！」

狂気じみた笑い声を上げながら、少年はフィニッシュに向かってピストンを早める。

「くはああ！ あぐううっ！ ふっ、深いッ！ あっあっあっ、そっ、そんなに奥ッ！ 奥まで突いたら……壊れるッ！ 壊れ……ちやうっ！」

頭の天辺まで突き上げられるような子宮連打の衝撃に仰け反ったせつなは、フェエラチオ奉仕する余裕もなく乱れ狂ってしまふ。

「イクぜ……お前の子宮、チ●ポ汁で一杯にしてやるよ！」

淫魔と結託した少年のペニスが、膣奥で激しい脈動を開始する。

どくどくどくどくびゅうううっ！ びゅうろろろろろろっ、ずびゅるるるるっ、びゅぐるるるるるるっ、どぶるるるるっ！ びゅくびゅくぶじゅるるるるるるッ！

「んああああんッ！ アッ、はああああんッ！」

甲高く裏返った声を室内に響かせ、せつなは女悦の極みに飛翔する。

「イッてるのね、せつな。それでいい

の。精液がオ●ンコの奥に弾ける感触、病み付きになるでしょう？」

絶頂する退魔少女を抱き締めた女教師は、苦悶と喜悅の板挟みに歪む少女の顔を舐め回す。

「なかなかいい具合だったぜ。じつくりと調教すれば、最高のエロマ●コになりそうだな」

射精を終えた巨根が、失神寸前のせつなのヴァギナからズリりと引き抜かれる。

「次はオレの番……噂の美少女転校生……思いっきり犯してやるよッ！」

新たなペニスが膣口に挟り込まれ、絶頂の余韻にわななく身体を激しく突き上げた。

数時間が過ぎた。

「んあ……ハアハアハア……あ……ああ……」

床の上に仰向けになり、弱々しく喘ぐせつなの身体は、男子生徒たちが放った精液でドロドロに汚されている。欲望を存分に吐き出し終えた少年たちは既に去り、天体観測室に残されたのは、二人の女性と淫魔だけだ。

（いっぱい射精させたから……男子たちの呪縛は解けたはず……精液のパワーも、溜まっているわ……）

男子たちを射精させることが退魔師の使命！ と認識してしまっているせつなは、気怠い余韻に浸りながら思う。

「おい、先生。その女のオ●ンコ、中出しザーメンでドロドロになっちゃまっ

潔癖で凜々しい美少女剣士だが

ま...まいった

く...

オオ

オオ

さすが志乃様!

やはり先生のお孫さんだけある

たのほろスゴイ!!!

催眠の乱取り稽古

漫画 あらくれ COMIC

大丈夫ですか 足田様

くそっ女子のくせに調子に乗りおって....

いえ私などまだまだです

同じ師範代でも実力はすでに志乃様が上ですね

ワイ

ワイ



志乃様
ではまた明日

皆さんお気をつけて
お帰りください

志乃殿
少々よろしいか？

足田様……
まだいらしたのですか？

——ふう……
この方は苦手だな

なんででしょうか？

——私が小さい頃に
お祖父様に弟子入りされてから
一度だって好ましく思ったことがない

先ほどの立合いで
気になったことがございまして



はい
気になったことですか？

とりあえず
道場の中へ

4
リン……





はあ…

やはり体の軸が
少し歪んでいるようですね

そ
そうなのですか？

はあ
どうしてこんなことか……
とにかく早く帰ってもらわなければ

ちゅっ

ちゅん…

ギュッ

ギュッ…



つい最近までガキだと思っていたが
いい体に育ってやがる

では横になっていただけますか
実は私整体術の心得があるんですよ

疋田様
不埒なことを考えて
おられるのですら
容赦いたしませんよ

はは……
もちろんですとも

ふう……
でも気持ちいい……

ズイッ

はあ…



ふんっ 未熟者めが
外法の術に
無防備すぎるわ

武術と同じく
下半身には重要なツボがありますから
よく揉んでおきましょう



按摩も
案外気持ちいいでしょう
志乃殿



はい…そうですね
気持ちいいです…



お嬢様お食事の準備が
できておりますが…



は…はいっ！
道場にあります！

……お伏さんの声



お嬢様！
どちらに
おいでですかー？

明日から覚悟してらよ
じゅんじゅん調教して手懐けてやる



まあいい鈴を鳴らせば
いつだって好きになれるんだ

はい…



少々長居してしまったようだ
それでは今日はこのへんで…

ちっ 邪魔が入った…



うん
今日も...

今日は
邪魔が入らないところへ
連れ出して
その体を買戻すつもりでやる

澄ました顔じゃがって.....
だが昨晚の記憶はきちんと
封じられてるよったな



ずい



キーン
キーン...

誰か
追っせうとけ

おい
猫入こまたど

ふん
稽古が終わるのが
待ちきれないくらいだ



スッ

フゥ

俺を蔑んだ目で見ていられるのも
今日で終わりだ

?

ニヤー!



はい？
なんですか…

足田様
足田様



昨晚の続きを
いたしましょう

ストン…

ズルズル…

ズルズル…



……のは！
猫の鈴で術が
復活したのか……!?

ここれはいつたい……

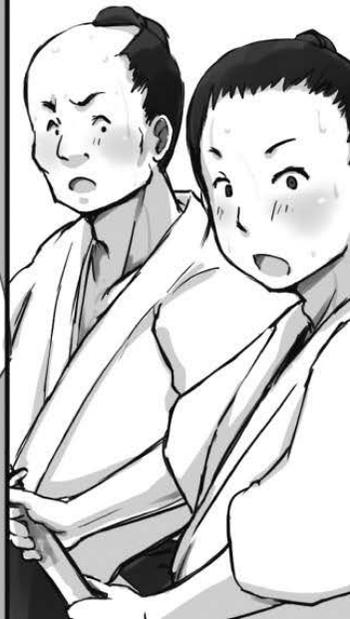
はあ



ふう
ふう

はあ

ザワザワ…
?!





しかし
志乃様……？

はは……

手が止まっていますよ
素振りを続けてください

何をしているのです皆様

おたけいさんと回廊を

志乃殿は
一体何をされているのですかな？

はあ

はい
昨晚教えていただいた
ツボをこうして……

ハッ……!?

ダッ!

はあ

え……?
そうして股を開き竹刀で
秘部を弄っているだけだと？

ち違うのです
足田様……私は……
こんなこと……

師範代の立場で
稽古中に快楽を貪るとは……
ましてや志乃殿は女子

っ……!?
私……
今何を……?!

はあ……

クッ……

カラッ……

おいやなぎ
お前チポを出してやれ

えっ
ええっ!?

志乃様お見苦しいものを
すいません……!

なななっ何を出しているのですか……
はっ早く仕舞いなさいっ!

あ

志乃殿がはしたない姿を見せるから
こうなってしまうているのですよ
これでは稽古どころではない

志乃殿に恥をかかせる気が
はやくしろ!

はひっ!

え……?
え……?

ポロリン……

せりっ

七……と……

上に立つ身としてご自身よりまず
こいつらの精を解放してやっては
いかがか?

あ……

チリン……

はあ……

あ……ん……

にちよ……

……承知いたしました

アッアッ……

じゅる……

美貌のエルフの知性が
白濁の海に浸かる！

エルフ賢者

セリス

催眠陵辱に墮つ

しみずかつし
小説 NOVEL 清水勝治

挿絵 ILLUSTRATION ロッコ

「この戦いが終わったら、一緒に暮らそう」

魔王城に突入する前夜、勇者アックアに呼び出され、二人きりになった賢者エルフのセリスはその言葉に白い頬を朱に染めた。

返事の代わりにセリスはアックアに抱きつき、唇を重ねた。粘膜同士が触れ合う心地良い感触も束の間、すぐに離れると、二人は互いに照れて、視線をそれぞれ別の方向へと逸らす。

未だに処女と童貞の二人は、何処までも初だった。

正直な所、セリスはまだレベル的に魔王への挑戦は早すぎる、と進言しようとしていた。

ただ、猪突猛進な勇者は一刻も早く世界を救いたいと言う。

(ホント、いつまで経っても子供みたいに純粋なのよね。エルフにも人間にも今時、こんなに真つ直ぐな人、他にいないわ)

皆が挑戦することすら諦めている魔王討伐に、真剣に取り組むアックアの姿にセリスは惹かれていた。

そして、その勇者の甘い言葉が、エルフの高い知性と冷静な判断を狂わせた。

幾らセリスが理性的なエルフだとしても、まだまだ精神的には乙女の部類恋愛感情までは制御出来ない。

それは女で生まれた宿命のようなものだった。

そして、当初のセリスの心配通り、現実には甘くなかった。

「どうした。勇者一行というのは、その程度か……久々に余が全力で戦えると思えば楽しみにしていたのにな……非常に残念だ」

魔王城の最深奥の大広間。石畳の床が一段高くなった所に、赤い絨毯が敷かれている。

そこに立つのは、この世の諸悪の根源である魔王。黒いローブを纏い、戦闘中とは思えないほど余裕な表情を浮かべ、勇者一行の弱さを蔑んでいる。

魔族特有の青白い地肌と筋肉隆々の巨漢。額に二本のツノを生やし、口元には鋭い歯を光らせ、赤い瞳で見下している。

対する勇者パーティーは追い詰められていた。戦闘開始と同時に、商人は灼熱のプレスで一瞬にして黒こげになり、次の瞬間には、戦士も冷凍プレスで生きたまま氷漬けにされてしまった。

残るは、傷だらけの勇者アックアと魔力の尽きかけたエルフ賢者のセリスのみ。客観的に見て戦況は圧倒的に不利なところか、限りなく勇者達の敗北は近い。

「残念だが、余はそろそろ飽きた。もう終わりにしよう。それとも、一度、出直してくるか?」

「黙れ魔王っ!」

勇者アックアが勢良く叫ぶ。「こうしている間に、世界には困っている人がたくさんいるんだっ!」

勇者アックアが舐めきっている魔王に反論する。

「行くぞ、セリスっ! たああっ!」

雄叫びを上げながら、剣を振りかざして魔王に突進していく。

「もうっ! たまには援護する身にもなつてよね」

絶望的な状況だというのに、エルフにして賢者のセリスの声に焦りは無い。

「風よ。我らを守り賜え……ウインドシールドっ!」

戦場には似合わない、淀みない音色を出す管楽器のような美声で呪文を唱える。金糸のようなストリートヘアーが放射線状に広がり、足下から強烈な風が巻き起こる。マントが捲れ上がり、膝まであるロングブーツとミニスカートの隙間にある肉感的な太腿が晒された。余分な肉は付いていなくとも、年頃の女特有の柔らかさがある両腿は、エルフ種族としてのキメ細かさだけでなく、セリス個体としての汚れない雪のような白さを誇っていた。眩くも美しい。瑞々しくも艶があり、しっとりとして吸い付くような肌触りが少し見ただけで伝わってくる。

魅力的な部位は柔肌だけではない。四肢や腰まわりは柳のように細いにもかかわらず、女である箇所は見事に成長していた。細腰から続く尻尾は肉つきが良くツンとスカートを盛り上げており、それだけで男を誘惑していると勘違いされたこともある。

胸当てで抑えこまれていようと、隠しようのない豊満に膨らんだ乳房も問題だった。成人すれば肉体的成長が止まるエルフ種族の中で、例外的に成長し続けていた。旅の途中で、双乳が膨らむ度に装備品のサイズが合わなくなるのだ。パーティーの皆にある種の呪いなのではないかと、からかわれもした。

エルフ特有の尖った耳に、切れ長の目、蒼い瞳は魔王を鋭く捉えている。

端正な顔立ちであり、街に行けば誰もが振り向く美貌の持ち主。尖った耳を見なくとも、全身から溢れる気品はただの人間ではないことが一目瞭然。

気高くも美しい賢者エルフのセリス。頭脳明晰であり、その知能の高さで勇者パーティーのピンチを何度も救ってきた。

「むううっ!」

二人のコンビネーション攻撃に魔王も驚きの声を上げる。慌てて灼熱のプレスを吐き、勇者を迎撃しようとする。だが、商人を焦がした炎は風の壁によつて阻まれた。

「なにっ!」

「フっ! 私達を甘く見たのが、運の尽きね」

アックアとセリスの必勝パターンだった。この連携はこれまでも、幾多の敵

を薙ぎ倒してきた。この奥の手があったため、パーティー二人が倒されようとも、セリスには一切の焦りはなかったのだ。

「たあああつ！」

勇者の渾身の一振りにセリスの援護も加わった攻撃。だが、魔王は瞬間的に背を向け反らせ、間一髪で避けた。

「ふんっ！ 今のは少し驚いたぞ」

「甘いわっ！」

魔王が体勢を崩した隙に、勇者の背後から現れたセリスのレイピアが一閃する。

「ぐうっ！」

「セリス！ ナイスフォロー！」

アクアに笑顔で語り掛けてくるが、「まだよ！」

首筋に直撃し、致命傷を与えたかと思いきや、セリスの刃は魔王の体内にまでは食い込まず、皮膚を削ぎ落とす程度で止まっていた。

「余に一太刀浴びせるとは、中々の技術とスピードだ。だが、力がなさすぎ」

「くっ！ なんて硬い身体をしているの」

自分の攻撃が大したダメージを与えていないことに気付き、セリスは慌てて距離を離す。

「阿吽の呼吸というやつだな。一朝一夕で出来るものではない」

魔王は言いながらも、余裕の笑みを浮かべる。

（攻撃力、防御力、魔力共に最強の魔

王だけはあるわね。さて、どうしたのかしら……）

「たあああつ！」

セリスは冷静に相手の戦力と戦況を分析しようとするが、勇者は構うものかと、もう一度、攻撃をしかける。

「もうお前に用はない」

勇者の剣が届く前に、魔王の鋭い突きが顔を捉える。吹き飛ばされ、追い討ちに、氷のプレスを浴びせられた。

「あああつ！ アクアっ！」

セリスが甲高い悲鳴を上げる。もう風魔法の防御は解けていた。

地面に叩きつけられ、勇者は動かなくなる。まだ生きてはいるようだが、すぐにも手当てをしないと命が危ういかもれない。

「……う、うう……逃げる……セリス……逃げるんだ……」

「そんなっ！ みんなを置いて逃げることなんて、出来ないわ」

「……………」

アクアの言葉に答えるものの、彼はすでに気絶していた。

（大丈夫……大丈夫よ。アクアはしばらく……）

自分に言い聞かせ、落ち着こうとするが、愛する人が傷付けられ、冷静なエルフ賢者は少なからず動揺する。

それに、自分一人になってしまうと、策略の幅がグッと狭まる。

（出来ることといえば、時間を稼ぐことくらいかしら……その間にパーティ

の誰かが回復してくれるのを待つしかないわね）

セリスは最後まで最善を尽くして、戦うつもりだった。

「ククク……しかし美しいな……」

「……えっ？」

セリスの思考が急停止する。魔王の言葉が自分に向けて放たれたのだと理解するのに、少し時間が掛かった。

「エルフの娘よ。そなた達は成人すると、歳を取らなくなるといのは本当なのか？」

「……そ、そうよ」

これも魔王の圧倒的優位な状況からの余裕なのかと、セリスは戸惑いながら答える。

確かに、魔王の言う通り、エルフは成人すると歳を取らないと言われていた。実際には、歳を取らない訳ではなく、要は肉体的成長が止まるのだ。そして、永遠に若い肉体を保ち続ける。

エルフ種族の最大の特長だった。

「それがどうかしたの？」

セリスは気を取り直して、レイピアを構え直すものの、

「よせよせ……どうせお主の狙いは時間稼ぎなのだろう？」

魔王が呆れたように呟いた。自分の狙いが見透かされたセリスは、その場に立ち尽くす。

「ならば、余と取引をしようではないか？」

（急に何を言い出したの？）

乱する。
「賢くも美しいエルフの娘よ。余の妻にならぬか？」

「は？」

セリスは思わず問の抜けた声を出してしまふ。

「美しい……そなたは実に美しいのだ」

そこで、ようやく魔王が別の目線で自分のことを見ていることに気がついた。街の酒場で出会う酔っ払いの親父なんかと同じ類だった。

豊満な胸や短い裾から覗く白い太腿、さらには直接的に股間をニヤニヤと笑いながら眺められる。

セリスは魔王の赤い瞳が怖くなり、思わず内股になると自分で自分の両肩を抱いた。

（な、なんて下品で下劣な思考の持ち主なの……魔王というのは……）

「このような下らない戦闘で、美しい華のような存在と出会えるとは。ましてや、その華の命を摘み取ることで、余には出来ん」

（下らない？ 私達が命懸けで戦っているのに、それが下らないですって）

セリスはこれまでの旅、全てが侮辱された気がして、怒りを覚える。

「余の妻になれば、お主の命はもちろん、そこに転がっている雑魚達も見逃してやつてもよいとは思っておる。悪い取引ではあるまい」

「さあ、答えを聞かせてもらおうか。戦場に咲く美しい華よ」

断れば慈悲はない。魔王の非情な目が物語っていた。

「誰があなたの妻になつてなるものですかっ！ それに、まだ勝負はついていないわ」

誰かが立ち上がったければ、まだチャンスはある。セリスはそう信じていた。

「ほうっ！ 断るとはな……強情な娘よ。もう少し冷静な判断が出来るエルフだと思つていのがな。……そうか心に決めた思ひ人が居るのだな？」

「……………」

セリスはその質問には答えずに、横目で倒れている勇者アクアを見つめる。「やはりその男か……羨ましいぞ。その雑魚が……お前のような美女に好かれるのだからな……」

「……黙れ」

セリスは前傾姿勢になり、レイピアを構えると、再度、魔王に襲い掛かるうとする。

「最後の最後まで余に刃向かおうとするか。そうか……残念だな……あまり乱暴にするのは好きではないのだが……」

「魔王の癖に、何を今更そんな奇麗事を言つて……」

セリスの言葉が途中で途切れる。

魔王の赤い瞳が怪しく光り輝いたかと思うと、意識が一瞬にして吹き飛んだ。両手から力が抜け、賢者エルフはレイピアを落としてしまう。

着い瞳の瞳孔が開いた直後に、白目

を剥き、口元が半開きとなった。

「余にダメージを与えるには、ペニスを刺激し精液を放出させる必要がある。それに、余の精子には魔力を回復させる作用がある」

セリスの深層心理に魔王の偽の弱点が刷り込まれていく。

「あとは、そうだな……余の傍に居るだけで発情してしまう最上級娼婦妻に仕立てあげてやろうではないか……」

セリスの意識が戻る。握っていたはずのレイピアが床に落ちていた。

何故か口端から涎が零れており、慌てて手の甲で拭う。

「わ、私に何をしたっ！」

「余は何もしておらんぞ。疲れて注意力が散漫になつていただけではないか……ククク……」

魔王が愉快そうに笑う。

（……くっ！ この状況一体どうしたら……）

セリスはその知性によつて、これまで何度もピンチを潜り抜けてきた。

（そうかっ！ そういうことだったのね）

妙案が閃く。魔王を倒すにはこれしかない。というか、何故、今まで気がつかなかったのだらう。当たり前すぎて、見落としていたとしか思えない。

（魔王のオ●ンポを射精させれば、倒せるじゃない。それに精子を飲めば、魔力も回復出来るのだから、一石二鳥

よ）

彼の厭らしい目線を考えれば、当然の論理的帰結だった。また、その考えが正しいと女の本能が告げていた。

「魔王っ！ あなたのオ●ンポを私に射精させなさいっ！」

セリスは今まで口にしたことのないハレンチな単語を言い放った。

（今、魔王は油断している。このくらの挑発には簡単に乗るはずよ）

「フフフ……いいだろう……」

セリスの読み通り、魔王はあっさりロープを脱ぎ捨て、黒いレザーパンツ一枚の姿になる。

「ただし、それならばお主の手で露出させてもらおうか……」

「ふえっ！」

女が殿方の服を脱がす。不自然な所作ではないものの、性体験が不足しているセリスは目を丸くし、躊躇する。

幾ら不自然ではないとはいへ、相手が憎むべき魔王ともなれば、話は別だ。

「それに、もうちょつと厭らしくねだつたらどうだ？ そんな言葉使いでは、興奮するものもしくなくなるぞ」

（く、屈辱的だけど、仕方ないわよね）

セリスは仁王立ちする魔王の前に跪くと瞳を潤ませ、上目使いをした。

「申し訳ございませんでした魔王様。セリスに魔王様の素晴らしきオ●ンポをご奉仕させて下さいませ。精液をお恵み下さいませ。セリスは精子が飲みたい淫乱なエルフなので……」

にするがよい」

（フフ……魔王とはいへ、エルフの知恵の前にはちよるいものね）

セリスは魔王のレザーパンツに何の疑いもなく手を掛けて降ろす。

「きゃっ！」

内心、作戦の成功を喜んでいたものの、驚きの声を上げてしまう。

魔王のペニスは、そのまま飛びかかつてくるのではと、警戒してしまうほど、荒々しく勃起していたからだ。強さを誇示する一種の模様のようにトグロを巻いた血管が浮かび上がり、何もしていなくともソコだけが、別の生き物のようにヒクヒクと痙攣していた。

遅い。凄く遅い。大きさと太さがセリスの二の腕くらいあり、まさに肉棒といった感じだった。

セリスは戸惑いながらも、見慣れない肉棒を凝視してしまう。

（こ、こ、こんなにも巨大に膨れ上がるだなんて……アクアも大きくなるこんな風になるのかしら……）

旅の途中、アクシデントにより、アクアの裸を見てしまうことはあった。記憶から消そうとしても中々消えない、脳裏にこびりついたアクアの小さな小さなオ●ン●ンを思い出す。

たとえ性的興奮を覚え、膨張したとしても、魔王のモノにかなうとは思えなかつた。

魔王の肉幹は青白い地肌のままなのに、皮が剥けた先端部分は新鮮な桃みたいなピンク色をしていた。うつつ

らと湿っており、生臭い雄の性臭が漂ってくる。

清楚な処女エルフには、今まで感じたことのない香りだった。その匂いを嗅ぐと胸の鼓動が早くなる。

（どうして、魔王のオ●ンポを前にしただけで、こんなにもドキドキしてしまうの）

こんな気持ちはアクアとキスした時でさえ感じたことはなかった。まるでお腹の奥底に眠る雌の本能がジリジリと目覚めさせられるような。

（と、とにかく、ここまでは順調なのだから。この魔王のオ●ンポさえ射精させれば倒せるはずよ）

セリスは弱点を露呈した魔王に対して、ほくそ笑むが、この後どうやったら、射精させることが出来るのか、まったく思い付かなかった。

（ど、どうすれば良いのかしら……）
子作りや夫婦の営みに対して、多少の知識こそあろうものの、実体験は一度もない。

（ああ……こんなことなら、昨夜アクアで練習しておけば良かったわ）

その高い知能をフル回転させるが、良案は閃かなかつた。

「何をぼーっとしておる？ お主が望んだことだぞ」

「は、はい……そうなのでですけど……こういうことをしたことなくて……」

「むう。ますます可愛らしいぞ……賢者セリス」

魔王は感慨深そうに呟く。すでに自

分の女とはかりに名前を呼び捨てにされるのが、屈辱的だった。

（でも今、我慢よ……）

「あ、あの、魔王様に気持ち良くなつて貰い射精して頂くには、どうすれば良いですか？」

結果、セリスは恋人相手にでも出したことのない、男に媚びる甘い声で憎むべき魔王に指導を仰いでしまう。

「そうだな。まずはその指で丁寧撫で上げてみる」

「は、はい」

セリスは素直に頷き、白く細長い指を肉竿に絡ませた。

（あ、熱い……それに硬いのに、中身は弾力があって、不思議な感じ……）

初めて生で触れる男性器は手の平に押し掛かるズシリとした重量感が凄かった。指先から伝わる精気に圧倒されるようになる。見ると、実際に触ってみるとではまた印象が違った。

（ああ、まただわ。どうして、オ●ンポに触っているだけで、お腹の奥が熱くなってしまうの……）

小股で発生した淫熱は全身へと広がっていき、無数の毛穴から汗を滲み出させる。小鼻に自然と流れ込んでくる魔王の性臭は、肺に取り込まれ、血液を循環し、セリスの肉体を内側からも火照らせる。ドクンドクンと、脈打つ肉棒を持ちながら、賢者エルフはうつとりしてしまふ。

「こ、こうですか」

瞳を蕩げさせながら、根元からカリ

クビまで、コスコス、コスコスと、リズムカルに何かの楽器を奏でるかのようになり、優しく擦り上げていく。本当に好きな人に気持ち良くなつて欲しいと愛情を込めてするように。

「おおうつ！ 初めてのことは、中々上手ではないか。それに気持ちが籠もつておるな。それが非常に心地良いぞ」

魔王は褒めてくれるものの、口元は明らかに嘲笑っていた。

（そうしていられるのも、今の内よ。やり方さえ教えて貰えれば、こっちのものなんだから）

賢者エルフは魔王の前で、ひたすら上目使いで媚びる視線を送りながら、従順なフリをする。

（こうした方が、もっと刺激的なはずよ）

器用なエルフはすぐにコツを掴み始めていた。肉棒全体の反応を見ながら、確実に感じるポイント見つけ出す。

しなやかな指をそれぞれ、肉棒の根元とカリクビに宛てがうと、集中的に刺激を与えていく。

「テクニク自体はまだまだこれからだが、センスは一流だな」

魔王はエルフの奉仕にご満悦の様子だ。

（残念だけど、今日があなたの最後よ。私がたくさん射精させて、倒してやるんだから……でも、なんなのこの気持ち……）

セリスは指の中で快楽に打ち震える巨根に対し、愛着のようなものが湧いてきた。指の動きを激しくすると、それにきちんと肉棒も反応してくれる。それが愛らしい小動物とじゃれ合っているみたいで楽しくもある。

肉棒の震えと共に鳴るように、自身の股間の奥がジュンツと痺れ、美しい太腿を自然と擦り合わせてしまう。

「さあ、次は少し舐めてみよ」

（オ、オ●ンポを舐めるですつて……でも、魔王を倒すためには、仕方ないわよね……）

生理的嫌悪感はあるものの、魔王にダメージを与えるのと、精子を飲み魔力を回復する方が優先だ。

セリスは遠慮気味に舌を出し、子猫がミルクを舐めるように優しく肉棒に触れる。

「ペロリ、ペロリ……ペロペロ……」

充血した海綿体の独特の感触と、ほのかな苦味にセリスは美貌を歪める。

ただ、魔王の男性器は不思議と清潔であり、吐気を覚えるなどの強烈な拒否反応は起こらなかった。

「そんなに遠慮せんで良いぞ。これまでに余に刃向かった種族の女達は、最終的にはおまも言わずとも喜んでしゃぶりだした。お主もそうなる運命にあるのだからな……」

（魔王の癖に綺麗なオ●ンポだと思つたらそういうことなのね。支配した女の口でオ●ンポを綺麗にしているなんて、最低だわ。それに女の方も喜んでオ●ンポをしゃぶるだなんて、信じられないわ。頭がどうかしてるんじゃない）



ないかしら……)

そう思いながらもセリスの舌先は止まらない。じゃれた子猫が頬擦りするかのよう、根元から裏筋、カリクビまで、愛しように舐め上げていく。

(ああ、何かしら、この不思議な感覚。オ●ンポを舐めていると私までどんどん淫らな気分になっていくわ)

舐めれば舐めるほど、鼻先に漂う雄の性臭が濃くなる。心では不快に思っているはずなのに、肉体が、下腹部を中心にどんどん熱くなっていく。

「ペロリ、ペロペロ……ちゅるるっ！」
始めの内は嫌々舌奉仕していたはずなのに、知らぬ間に大型犬のようにダランと大きく舌を出し、ペロペロと肉棒を夢中で舐め回していた。

唾液が口元から糸を引いて垂れ落ちようと関係ない。

舌奉仕の喜びに目覚めつつあるエルフ賢者は、肉竿の下に垂れている巨大な玉袋を口内に含む。

(凄く重たいわ。ここに魔王の力の源、精液がたくさん入っているのね。こんなにオ●ンポがピンピンで、こんなにも精子がパンパンなら、強いはずだわ)

寧ろ口内で優しく舐め上げると、不意に砂糖を焼いたような濃厚な甘ったるい香りがした。小鼻を動かしながら、その匂いの源を辿っていくと、充血して膨れ上がった亀頭に辿り着く。

(ああ……これだわ……ここから精液をたくさん吸い上げれば良いのね)
濃厚な先走り汁が滲んでいる割れ目

に舌先を這わせた。

(ああ……なんて美味しいのう)

甘美な刺激が舌先から全身に走り抜ける。脳内は快楽物質で溢れ、背骨から股間に落雷が直撃したかのような快楽電流が走り抜ける。

「いいぞ、そのまま口で啜えてみる」
「はあい……魔王様」

自分の拳ほどはある亀頭に小さな口を精一杯開けて吸い付いた。そのままチューチュー先走り汁を吸い上げる。(病み付きになっちゃいそう……)

先走り汁を飲んでみると、脳に霞が掛かり知性が押さえ付けられ、オ●ンポと精液のことしか考えられなくなる。麻薬のような催眠暗示の快楽に、賢者エルフは支配されていく。

(オ●ンポ、オ●ンポ舐めると気持ち良い……精子飲みたい……魔王の精子……一杯飲みたい……)

セリスは頬肉をこれでもかというくらいに狭めて、亀頭全体に快楽刺激を送り込む。

「フフフ……エルフの奉仕というのは予想以上に気持ちの良いものだ。エルフ種族全体が変態なのか、セリスが産まれつき娼婦の素質を持っているのか、どちらかだな」

「むうううっ！」
頭上を物凄く力で押さえ付けられ、強引に肉棒を喉奥まで挿入される。

「ぐううええっ！ うえええっ！」
硬く膨れ上がった亀頭で喉を突かれ、嘔吐反射してしまう。自然と両目から

涙が溢れ、無様なくぐもった声が漏れた。

(く、苦しいいいっ！)

氣道を肉棒で塞がれ、まともに呼吸が出来ない。なのに、確実に肉体は快楽を覚えていた。身体は芯から火照り、股間は潤み、豊富な胸の先端は尖りだす。催眠暗示により、魔王の肉棒に触れているというだけで、苦痛も快楽へと変換される。

(なんで、こんなにも辛いのに、感じてしまっているのっ！)

知性溢れるエルフは自身の肉体の反応が理解出来なかつた。

混乱しながらも、喉奥に挿入された肉棒に対してだけは、具合の良い女性器のようにきゅつと食道を狭めて、射精を促してしまう。

セリスは自分の肉体を使い、魔王の性欲を発散させることだけが勇者パーティーの勝利に繋がると信じていた。「望み通り、そろそろ出してやろう。しっかりと受け止めるがよい」

ピクピクっ！ ピクピクピクっ！
地震が起こったのではないかと思えるほど、強烈な痙攣が口中で巻き起こる。

(ああ、来るなら来なさい……むしろ早く来なさい……そして、私に精子をたくさん飲ませて……)

催眠状態のエルフは、心の底から魔王の射精を願う。
びゅるるるううっ！ びゅるるるう！
びゅるるるううっ！ びゅるるるう！

「むうううっ！」

口内が一瞬にして、大量の白濁液で溢れかえる。射精の衝撃により、舌の上で暴れ回る肉棒の感触がなんともいえずにリアルで、自分が本当に口内で精液を受け止めているのだと実感する。(ああっ！ 凄いいいっ！ こんなにたくさん出るなんてえええっ！)

ごきゅつ！ ごきゅつ！
セリスはチーフフォンデュのような濃厚で熱々な液体を必死になって、喉を鳴らしながら飲み込んでいく。

一気に飲み込めない分は口元から零れ落ちないように、頬を膨らませて口内に溜め込む。異常に粘着力の高い精液は歯と歯の僅かな隙間の歯茎にすら染み込んでいく。

(美味しい……精子美味しい。もつと、もつとセリスにたくさん飲ませて)

生臭い精液が甘く感じられる。白濁液を飲み込むと、喉粘膜や食道に痰のように絡みつきながらも、なんとか胃まで落ちていく。その衝撃の度に、股間にも刺激が走り、ぶるるっ！ と快楽で全身が震えた。

「ぐうううっ！ はあ……はあ……」
最後に一度喉奥を突かれ、直接胃の中に精液を注ぎ込まれると、ようやく肉棒が引き抜かれた。

「んんっ！ んんっ！ はあはあ……」
久しぶりにまともに呼吸が出来るようになるが、セリスはそれよりも、口内に残った精液を舌先で集めて、飲み込むことに集中する。

悪魔っ娘も催眠にかがれば思いのまま！

ひゃっ

あっ

あ…
はああ……っ

ぬんぬん…

キモチ

いいです
……っ

お●んこ

きもちいいよー…

鬼畜兄弟と魔王の宝玉

漫画 COMIC

おおたけし

くっくく
……

見ろ兄者
こやつら二人の催眠の
かかりっぷりを！

おおう

かわいらしく
メス汁を
たれ流して
ましゅねエえ♡

さすが

魔王の宝玉ヤツ!!



そうら
マーニヤ

触手を植えつけて
やるぞお♡

あはっ

自分で
まこ開いて
おねだり
するんだぞお♡

ダメっ

そんなの近づけ
ないで……っ!!

ちょっと
危険な蟲だから
直接さわれないのが
残念だがなあ♡

何コレえ
えっ!?

まこが
かゆくて
死にそうに
なるぞ♡

今まで散々
俺らのジャマをしてきた
罰だああ♡

もっともっと
蟲をねだって
みろお♡

んぐううう

マ…マーニヤの…っ
おんこ
蟲まみれにして
くだしいーっ

まんこが使いモノにならなく
なったらサキユバスはどうなる
のかなあ♡

クッククック！
ヒドい弟だ

あ…は…っ

ま…こ穴よく
こね回して
気をそらせておけよ♡

さあこっちの
天使様のおんぼも
イジめて
あげようねえ♡

まって
そんなの無理
ですっ…！

コイツはキツい
ぞおお♡
地獄キノコの
濃縮汁だから
なあ♡

おっ

ホーラ
しごかれると
たまらんだらお♡

がき

だが
イってもイっても
精液は出ないぞお♡

チ■ポ肉が
腫れ上がって
尿道ふさいでる
からなあ♡

めり

めり

めり

めり

めり

そーら粘膜
かきむしって
やろうねええ♡

はああっ

ぐおお
おおっ

気が狂うほど
キモチ良い
だろおお♡

こっちは
尿道ほじろう
ねええ♡

おうおう
このエロチンポ勃起が
強すぎて尿道プシー
くいしばってるぞ♡

どうだ
お前らああ♡

お前らの
ぐちゃぐちゃの
メス穴
どうしてほしいか
言ってみろおお♡

あがっ
あっ

入れてっ

そのチポで
お●んこ
ホジリ回して
下さいいっ!!

おじり
いいっ

チポ
しごき

イボイボゴシゴシ
きもち良くて
ごわれるうっ

つおお...っ!

このケツの穴肉を
かきわける感じ
チポトロけるぞおお♡

おうおう 膣がギューギュー
しめつけてくるなあ♡

退魔シスター フラム

偽りの慈愛に濡れる聖女

小説 やまもと さき 山本沙姫

挿絵 あーや

気高き聖職者の精神と肉体が
偽りの神の愛に染められる！



「くっ……なんてしぶとい奴なの……」

雲一つない晴天の下、鏡面のように静かな湖の岸辺を、空の色に負けない鮮やかな着衣を纏った若い娘が縦横無尽に駆け回る。

五センチほどの太さがある赤紫色の触手を無数に生やした、イソギンチャクに似た不気味な姿の怪物と戦いながら。

「クキキキキキッ……」

人間の歯ぎしりに似た奇声を上げつつ迫るモンスターを相手にするのは、紫色をした切れ長の目にスツと綺麗に通った鼻筋。それに頬のラインが鋭角的に引き締まった端正な顔立ちの美女。

身の丈一七〇センチオーバーのやや大柄な体軀ではあるが、戦士や傭兵といった戦いを生業とする猛者ではない。

背中まで届くほど長くしてしなやかな金髪をベールで覆い、首に黄金色のロザリオを下げた彼女は、ここテイルグの町の教会に勤めるシスター。

悩める者に神の教えを説き、行くべき道を指し示して多くの人々に慕われている聖女が、荒々しい怪物退治に乗り出しているのは理由がある。

先端に真紅の寶石を付けた長い棍棒、ホーリーロッドと呼ばれる選ばれた者だけが手にすることを許された聖なる武器を駆使して、住民たちを不幸と恐怖に陥れる邪悪な魔物を退治する退魔師。それが彼女のもう一つの顔だ。

「ほかに邪気は感じられない。となるとやはりこいつが犯人……」

この日の彼女は、数日前に発生した町外れの湖で水浴びをしていた町娘が、意識不明で全身粘液まみれの姿で発見されるといって悲惨な事件の調査をしていた。

そして浅瀬の中に潜む、邪悪な気に満ち満ちた魔物を発見したのである。

「それにしても、身を守るのが精いっぱいだわ。なんとか攻め入る隙を作らないと……」

鈍重そうな見た目に反して、イソギンチャク型の魔物は陸に這い上がっても素早く動き回りつつ、三メートルはある触手を次々と伸ばして、美貌の退魔師を翻弄する。

ピシユンッ！

「くっ……またきたー！」

目の前に飛んできた触手を華麗なバックステップでかわす反動で大きく波打つ胸は九〇センチをゆうに超え、熟れたスイカのように丸々としている。

やや外向きに開いた乳首は、薄手の布地を軽く隆起させるぐらいにツンと尖り、自然と聖衣の中に隠しきれない女の色香を自然に振り撒いている。

腹部に巻きつけた金糸の装飾を施した茶色のベルトがウエストをキュッと引き締め、爆乳の大きさをさらに際立たせた。

「はあっ！」

ピシユッ！ ポトッ、ポトッ……。

着地と同時に細かい手に握ったロッドを二振りすれば、表面にぬめりを帯びた醜悪な赤紫色の軟体が、まるで鋭い刃物で斬りつけたかのように切り刻まれていく。

しかし何度切り落としても、ほんの数秒も経てば切断面からまた新たな醜肉が、トカゲの尻尾の如く生えてきてしまう。

このままでは埒が明かない。

「一気に魔物の全身を壊さないと、何度でも再生されるみたいね。厄介な……」

鋭い洞察力で醜悪な怪物の特性を見極めつつ、攻撃を避けて走り、飛び回るたびに青き聖衣のスカートから覗く足はスラリと長く、表皮にはムチムチと健康的な張りがある。

しつとりと艶を帯びたきめの細かい肌の色は、日

差しの強い土地で暮らしているながら日焼けやシミ一つなく、まるで新雪のように白く美しい。

膝上から先を覆うフリル付きの濃いグレーのストッキングとガーターベルトが、乙女の柔肌の輝きをより一層引き立たせていた。

「絶対に倒してみせる。これ以上、犠牲者を出させないために……」

恐るべき怪物の猛攻に怯まず、懸命に戦い続ける勇敢な退魔シスターの名は、フラム・ナーダ。まだ一九歳と若いながらも、ベテランにひけを取らない力を持つ、優秀な退魔シスターである。

「やはり、ここは一気に法術で殲滅しないと、でも、いったいどうやって動きを止めれば……」

これまで数えきれないほどの魔物を退治してきた彼女は、戦うために二つの力を持っている。

一つは、兵士にもひけを取らないほどの腕前の武術。そしてもう一つは、心身を捧げた神の力を借りて邪悪を滅する「法術」と呼ばれる特殊な能力。

だが、それを使うには精神の集中と長い詠唱の間が必要である。しかし絶え間なく続く触手の連撃に、どうしても集中力が奪われてしまう。

「……あれだわ！」

苦戦を強いられながらも勝機を探る鋭い目に、大きな岩が留まると、フラムは一目散に駆け寄っていき、倒すべき敵に背を向けて。

「グルルルルルル……」

突如逃げ出す獲物に向かって威圧的な低いうなり声を上げ、触手の怪物が後を追いかける。

「かかったわねっ！」

狙い通り敵をおびき寄せるのに成功した着き聖衣の退魔シスターは、相手が間近に迫ってきたのを見計らって、巨大な岩めがけてホーリーロッドを突き込む。

ガギンッ！ ピキピキピキ……ドォッ！

「ビギヤウウツツツ！」
 轟音と共に降り注ぐ石つぶてに触手の根元を扶まれ、不様にのたうつ怪物を鋭く睨み、フラムはロッドの先端を突きつけた。

「我、フラム・ナーダは望む。主神ク……」

パキィイイイイ

——ンンンン！

ところが詠唱をはじめた瞬間、山盛りにした貝殻を叩き潰したかのような耳障りな破砕音が、辺り一面に響き渡る。イソギンチャク型の身体を中心に、口の奥で、鋭い牙を打ち鳴らしているらしい。

「なっ、なに!? この音は……」

鼓膜が破れるかと思うほどの不快な騒音に、思わず詠唱が止まる。このままではせつかく捕らえた魔物にトドメを刺せないばかりか、ヘタをすれば反撃されかねない。

「んっ……主神、クルメリンよ、我に邪悪なる者に鉄槌を下す、大いなる力を貸し与えたまえ……ホーリーブラストッ！」

しかし耳を押さえたくなる衝動を抑え、懸命に言葉を唱えると先端の寶石から眩い光が放射状に広がり、身動き一つ取れない哀れな怪物を包み込む。

ズザザザザザザザザ——。

すると途端に、赤紫色の肉体が灰色に変色し、まるで砂細工のようにハラハラと崩れ落ちた。

「やっ……た……え？」

だが、ようやく邪悪な存在を滅した勇敢な退魔シスターの目の前で、思いもよらぬ事態がおきる。砂山のように姿を変えた魔物の骸が七色の光を放ち、中から一人の男が姿をあらわした。

「だっ、誰っ！」

咄嗟にフラムはホーリーロッドの先端を突きつけるが、彼の姿を目の当たりにして思わず息を飲む。

腰に白い布を巻いただけの、裸同然の華奢で優しいな面持ちをした青い瞳の青年。しかも背中には、

白鳥を髣髴とさせる白く大きな翼が生えていた。

「あ、あなたは……まさか……」

突如あらわれた、教会に飾られている宗教画で見慣れた神々しい天使と瓜二つの男。しかも、絵の具では表現できない眩い後光が差す姿に、シスターの胸が激しく高鳴る。軽く眩暈を覚えそうなほどに。

「我が名はアリスト。天界より遣わされし者……」

「アリスト……や、やはりあなたは……大天使、さま……しっ、失礼しました」

おもむろに開いた口から出た名を聞いて、フラムは慌ててホーリーロッドを地面に置き、両膝を揃えて地面に跪き、深々とこうべを垂れた。

彼女が焦るのも無理はない。目の前にあらわれたのは教会が崇める主神、クルメリンの第一使徒。すなわち、神の教えを説く者たちにとっては、神そのものと言っても過言ではない存在なのだから。

故に、どうにも腑に落ちないことがある。

「し、しかし……アリストさま。何故、あなたさまのような高貴なお方が、魔物の体内から……」

「うむ、我が主、クルメリンの命を受け、この地の民に愛を説くために降臨したものの、不覚にも魔物に襲われ、取り込まれてしまっていたのだ。助けてくれて礼を言うぞ、フラム・ナーダ」

引き撃った面持ちのフラムが震える声で問いかけると、白き翼の天使は彼女の緊張を解きほぐすように優しく微笑み、ゆつたりとした口調で事情を説明する。

「そんな……なんともつたないお言葉を……身に余る光栄でございます」

思いがけず投げかけられた温かい言葉に、敬虔なシスターは魂が震える思いがした。

「そこで、助けてくれた礼にまずはお前から、神の慈愛を与えることにしよう。さあ、いつまでも畏まっっていないで、身体を横にして楽になりたまえ」

「そのような栄誉をわたくしに……ですが、その……横に……ですか……」

さらに投げかけられる至福の言葉に、生真面目なシスターは喜ぶと同時に戸惑いを覚えてしまう。若い娘が半裸の男、しかも神同然の天界からの使者の前で寝転ぶなど、恥ずかしいことこの上ない。

（でも……神の愛を受け入れて、町に幸せをもたらすためなら……）

胸の奥に燃る羞恥心を振りきり、彼女は大きめながら左右均等に美しく張り出した桃尻を地面につき、ゆつくりと身体を伸ばす。

「こ、これで……よろしい、ですか……」

「よろしい。では、これより神の愛を与える……」

頬を朱に染め、震える声で問いかけながら横たわるフラムの足元に仁王立ちすると、大天使は背中の大きな翼を開く。

「なんて、お美しい姿……」

自分を優しい目つきで見下ろす偉大な天使の姿に見惚れていると、開いた羽根の表面から細長い帯状の七色の光が飛び出し、蒼い聖衣を纏ったシスターの柔らかな肉体に纏わりついていく。まるで、全身をリボンでデコレートするかのよう

に。

「あ、これは……」

光の帯が触れる部位に、じんわりと心地いい熱さが走る。柔らかく大きな乳房、細い両腕。身体中のどこもかしこも溶けてしまいうような錯覚を覚えた。

「はうんっ！」

聖衣の裾から入り込んだ光が太腿に直接触れると、薄布越しに触れるのとは違う感覚が皮下を駆け巡る。熱さと共に、静電気のような痺れが染み込み、自然と足がビクンと痙攣をおこす。

「まずはこの慈愛の光で、お前の身体が神の愛を受け入れられるようにするために清めていくのだ。じ

後編

淫墮の姫騎士

THE PRINCESS KNIGHT "JANNE"

ジャンヌ

美姫転生

ちくまじゅうごう
小説 筑摩十幸

挿絵 木の碕由貴
ILLUSTRATION

原作 さくらざわひろ
ORIGINAL 桜沢大

PCゲーム「ジャンヌ2」は
8月30日発売予定!

ジャンヌとユーワ... 姫騎士姉妹を待ち受けるのは!?



登場人物紹介



ジャンヌ・フィリエール

リプファール王国の女王。人間界に転生して女子校生として暮らしていたが、救世主として召喚される。

ユーワ・グルノール

ジャンヌの妹。女王としてジャンヌなき王国をオーガの魔手から守っていたが、ギドーに囚われてしまう。

アナスタシア

ギドーに協力する謎のゴスロリ少女。ジャンヌを淫魔に改造しようとする。

ギドー

かつてジャンヌに倒されたオーガの王。だが復活し彼女を后にしようと狙う。

前号までのあらすじ

突如、リプファール王国へと召喚されたジャンヌ。そして己の出自を知る彼女だが、ギドーに洗脳された親友・ミハルによって、ギドーの花嫁となるべく、淫魔改造の儀式に捧げられてしまう…。

「処女を奪われ、淫魔としての因子を埋め込まれてしまったわたくしに、ギドーは昼夜を問わず挑みかけてきました。わたくしの身体をさらに淫らなモノに変え、オーガの仔を妊娠させるつもりなのです。そしてその毒牙は、とうとう妹のユーワにまで及んでしまうのです。」

「ひいんっ……い、いたい……んんあっ！ イボイボがあ……擦れてますうっ！ うああんっ！」

「あ、あれは……ユーワッ?!」

目の前の淫猥な光景にジャンヌは眼球が飛び出すほど目を見開いた。ピキニ體姿のユーワがギドーの胡座の上に跨がられ、その身に余るほど巨大な肉棒を可憐なスリットに押しつけられているのだ。ユーワは目隠しをされており、姉には気づいていないいや、それどころではないと言うべきか……。

「妹から離れ……！ うぐぐっ！」

叫ぼうとしたが、アナスタシアに首輪を引っ張られると声が出せなくなる。大事な妹が犯されるのをただ指をくわえて見守ることしかできないのは、あまりにも悔しい。

「グフフ。少しは慣れてきただろう」

「んあ、あひいっ！ はひいっ！ な、慣れるなんて……無理ですう……ンああお……お股が……ああ……裂けてしまいますう……はあうんっ！」

ゴリゴリとノコギリを引くようにイボマラを前後されて、ユーワはアイマスキの下美貌を苦悶に歪め、苦しげな呼吸を繰り返す。破格サイズの巨根素股に翻弄され、姉の存在にはまったく気づいてない様子だ。

「初めは相当嫌がっておったが、今ではかなりギドーに馴染んできた。フフフ。身体は小さくともやはり淫乱天使の血を引くだけのことはある」

アナスタシア・セプティエムが愉快そうに微笑みながら語りかけてくる。

「くっ……」

まだ陰毛も生え揃ってないスベスベの花弁が、ゴムのように左右に開ききつて、どう見ても許容量を超える剛棒に愛液を滴らせていた。とはいいややはりギドーのモノは巨大すぎて、とてもユーワが受け入れられるとは思えなかった。

「感じてきたな。お前もそろそろ欲しくなってきたんじゃないか？ 俺様がセックスの味を教えてやるぜ」

嘲笑いながら肉棒の先端を処女の膣口にあてがう。すぐにでも犯せる体勢だ。

「ひあう、あはあっ……感じてません……い、痛くて……ンああ……せ、せつくすは……ゆるしてください……はああはあっ！」

「確かにまだキツキツだな。まあ、痛いのは最初だけで、そのうちピンピンに感じるようになるさ。セックスしてくださいって、お前からおねだりしてくるようになるだろうぜ」

姫貝のような耳たぶを甘噛みしながら、ピキニアマーをずらし、申し訳程度に膨らんだ乳房を掌全体で擦るように愛撫する。

「うああ、そんなことしません……ハアハア……いやあ……せつくすいやあ……こ、こわいんです……ああああん」

おそろくセックスという言葉の意味すら知らないうちに、無理矢理性知識を教え込まれたのだろうほっそりした肩をくねらせ、なんとか破瓜の串刺しから逃れようと腰をひねる。

「早く俺のモノを全部呑み込めるようにユルユルマシコにしてやる」

ギドーはさらにユーワの身体を降ろして、亀頭を食い込ませていく。もう少し入れれば処女膜は裂けてしまうだろう。

「いたあ、あああんっ！ いやいや……ああん……いやです……ううん……ユルユルになんてえ……しないでください……はああ……ユーワ……お嫁にいけなくなっちゃうっ！ ふあああんっ！」

「グフフ。普通に人間と結婚できると思うなよ。お前は一生俺様のペットだ」

伸ばした手指がワレメをまさぐって、小さなクリトリスを摘み上げる。包皮を押し剥いて、グリグリと小円を描く振動を送り込む。

「ンはあああっ！ そ、そこは……あああ……だめですうっ！ ビリビリしてえ……ああああんっ」

敏感な性感帯をこつい指に責められて、ユーワはギドーに操られるままに未成熟な腰をヒョコヒョコと上下させる。剛棒と擦れ合う桃色粘膜が次第にとろけ、クチュクチュといやらしい水音を響かせ始めた。

（そんな……ユーワが……）

ブルブルと身体の震えが止まらない。ほんの少し前まで、何も知らない乙女だったのに、ギドーのペーイスに巻き込まれ、色っぽく腰をくねらせている……。目の前の妹に垣間見える早熟な性の反応に、戸惑うばかりだ。

「まだ処女のクセにエロい声を出しやがって。ジャンヌに見せてやりたいぜ」
膣穴の入り口を亀頭でくじりながら、意地悪く囁く。

「あひつ！ い、いやです……こんなところ……ハアハア……お姉様に……見られるなんて……ああ……恥ずかしくて死んじゃいますっ！」

「グフフフ。そう言われると、ますますやりたくなくつてくるぜ。おらっ、お姉様とご対面だ」

相手が一番嫌がることをする時、ギドローの昂奮は最高潮に達する。残酷な笑みを浮かべると、いきなりアイマスクをむしり取った。

「えっ……あ、ああ……お、お姉さまっ！」

ジャンヌの姿を見つけたユーワは、今度は動転の悲鳴を迸らせる。

「ユーワ……！」

やっとな声が出るようになって、ジャンヌは思わず名前を呼んでしまった。だがそれは妹を苦しめるばかりだとすぐに気づいて、無念に唇を噛む。

「ひいっ！ い、いやああっ！ 見ないで……ああ、あ……お姉様……ユーワをみないでえっ！」

喉を軋ませて、ユーワは激烈な羞恥に悶え泣く。しかし蜜孔は巨根を浅くくわえ込んだまま、刻一刻と迫る破瓜の瞬間を待つしかない。

「グフフ。もうすぐ一人前になるオ●ンコを見てもらえ。俺様が毎日弄ってやっただからずいぶん濡れやすくなっただぜ」

ギドローが両手をワレメにあてがい、割り拡げてみせる。ピチッと音がして珊瑚色の粘膜が爆ぜた。

「あ、ああ……いやあ……は、はずかしい……見ないでください……お姉様にこんな姿……はああん……見せないでください……あうんっ」

「ああ……ユーワ……」
むごいほど拡張され、規格外の怒張を押しつけら

れた淫裂に、ジャンヌの目は釘付けになる。薄い肉唇は伸びきって、粘膜も透き通るほど引き伸ばされている。■げな見た目と裏腹にギドローの玩弄に応えるように、愛液をトロトロと滲ませている様は早熟な女の息吹を感じさせる。

「そろそろいけ。愛しいお姉様の前で、処女膜をプチ抜いてやるからな」

「や、やめてください……ああ……お姉様に見られてるのに……せつくすされるなんて……うああ、痛い……裂けちゃいます……ああんっ！」

「グフフ、今さらやめられるかよ。ジャンヌもよく見ておけ、妹の子宮が俺様の精液便所になるところをな」

グチュツ……クチュツ……クチュクチュンツッ！

ユーワを身体ごと揺さぶり、ジワジワと狭い粘膜溝に巨根を沈めていく。ユーワは苦痛に童顔を歪めて、涙をポロポロこぼした。

「や、やめて……妹に、これ以上しなくてっ！ オーガの相手なんて、ユーワには無理ですわっ！ するなら……わたくしが相手をしますわ」

「フフフ。妹にチ●ポを取られてヤキモチを妬いておるのか？」

背後に忍び寄ったアナスタシアが、ジャンヌの蜜花にスッと指を這わせる。

「う……あああ……や、やきもちだなんて……そんな馬鹿なこと……あるわけないでしょうっ！」

「そうかのお？ ここはほんのり濡れておるようじやが？ 本当は犯して欲しいのではないか？」

「う、うううっ！ う言わないでっ！ それは……汗よ……もう、手をどけて……うあうんっ！」

ミハルの調教によって淫魔化され性感を何倍にも増幅された身体は、僅かな刺激にも反応を始めてしまう。ギドローに犯されそうな妹の姿を見て、下腹が熱く疼いていたのは事実だった。

「わ、わたくしを犯しなさいっ！ その代わりユーワを許してあげて」

「ふふん、可愛いフィアンセにそこまで誘われちゃあ、断るわけにはいかねえな」

意外にもあつさりギドローは了承し、ユーワの身体をベッドに降ろした。

「ふううあんっ……ハアハア……お、お姉様……そんな……私の代わりになんて……」

「いいよ、ユーワ……気にしないで」
姉を気遣うユーワに、ジャンヌはできるだけ優しい微笑みで応える。

「おら、グズグズしねえでユーワの上に四つん這いになるんだ」

「く……っ。わかりましたわ」

一体何を企んでいるのか。一抹の不安を覚えつつも、ジャンヌはユーワの上に身を重ねていく。

「お姉様……」

クリクリした碧眼や柔らかそうなホッペタなど、間近で見るととても魅力的な女の子であることがわかった。気のせいかな汗も甘くよい匂いがする。

「グフフフ。いくぜ」

「うっ……ンああ……あつああうっ！」
ドッグスタイルで背後から貫かれ、ジャンヌの背筋が反っていく。重く熱い衝撃が膣壁を割り裂いて沈んでくる感触は、何度犯されても慣れることはできない。

「やっばり濡れるじゃねえか。妹のレイプを見て濡らすとは心まで淫魔らしくなってきたじゃねえかよ」

「はあっ……あああ……そんな……はうん」

限界まで拡張される粘膜を無数の肉イボで擦られると、火がつきそうな灼熱感を味わわせる。やがてそれが骨までとろけるような甘美な疼きに変わっていくのが恐ろしくて、ジャンヌはイヤイヤと頭を振

りたくった。

「おし、奥まで入ったぜつ。おお、やつぱりジャンヌのほうがオ●ンコが熟れてるな。温かくてチ●ポが溶けそうだぜ」

ズブツ！ ゲチュツッ！ ズンツッ！ ゲチュンツッ！

「はあつ……あああつ……くうつ……あふうん」

「お、お姉様……大丈夫……？」

「ああ、ユーワ……だ、大丈夫ですわ……ハアハア……こ、これくらい……なんでもありませんわ……うはああんっ！」

ギドーの極太で身体の奥深くを突き上げられるたび、全身が揺さぶられる。今にもいやらしい声が溢れてしまいそうになるのを必死に堪え、ジャンヌは微笑んでみせた。

「もつと激しく犯されないと物足りないつてか。欲張りなお姉様だぜ」

岩をも砕く剛力を活かしたパワフルなピストンがジャンヌの蜜壺を突き抉る。派手な淫音とともに激しく愛液の飛沫が散り、身体ごと浮き上がりそうになる。

「うあつ！ あああん……だめえ……そんなに……激しくされたらあ……あああうん」

「ああ、お姉様……お姉様をいじめないでください」あまりにも苛烈な責めに、まだ知識の乏しいユーワは怯えた表情を浮かべている。

「グハハ。馬鹿だな。ジャンヌは悦んでいるんだよ」

「だつて……お姉様、苦しう……」

「女は心底気持ちいい時に、こういう貌をするんだよ。俺様にかかれば伝説の姫騎士様も所詮は一匹の牝ってわけだ」

妹に性教育を施しながら姉を犯す快感に、ギドーの肉棒はいつになく猛り勃つ。鋭く重い律動をリズムカルに蜜孔に叩き込んでいく。

んわ……ハアハア……ああんっ！ 妹に……デタラ

メ……教えないで……ンはあうんっ」

普通の人間なら壊れてしまいそうなどころだが、淫魔の肉体を与えられた今のジャンヌは、どんな激しい責めさえも快楽として感じとってしまう。血と肉が溶けて、ドロドロの粘膜の塊に身体が変わって

いくような気がした。

「ホッホッホッ。口では強がっても、身体は正直じやぞ」

アナスタシアの手指がジャンヌの蜜部へと滑り、淫核をキュツと摘んだ。

「アヒンツッ！」

高圧電流のような快美が恥骨を突き抜け、子宮に落雷する。意識が激しく明滅する中、肉体に溜まっていた淫なるオーラが、股間に集中していく。

「ふうあああ……な、なんですの……これはあつ……あああ……うっ！」

（熱い……燃えるようですわつ）

身体の最も深い奥底から、黒く蠢く得体の知れないモノがこみ上げてきて、下腹を突き破りそう。拳を握った手がワナワナ震え、肩胛骨を浮かせた

背中が反り返っていく。

「はああつ……あああ……うっ！」

ズル……ズルズル……ズズズズッ！

灼熱感とともにジャンヌの股間から赤黒い棒状のモノがグングンと生え伸びる。それは紛れもなく牝の生殖器官、ペニスであった。

「おお、ジャンヌにチ●ポが生えたぞ？」

「フフフ。淫魔の因子を一部目覚めさせたのじゃ。サキユバスは牝にも牝にも欲情する両性具有の色魔じゃからな」

「ハアハア……あああ……こんなあ……」

まったく予想外のことだった。

「さあ、そなたの中にあるどす黒い欲望を吐き出すがよい」

アナスタシアがペニスを握り、シユルシユルと擦り始めた。

「あひやうつ……はあつ……あああつ……そ、それに触らないで……ンあつ、あああ……うっ！」

クリトリスの快感を何十倍にも増幅したような快美が子宮に突き刺さり、ジャンヌの鼻先に桃色の火花が散る。

「感度もよさそうじゃ。まずは皮を剥いてやるでしょう」

まるで牛の乳搾りのように人差し指から順に指を折り曲げて圧迫されて、血流が先端部に集中する膨らむ亀頭に押し開かれて、包皮がぐるりと裏返って

しまう。

「ひいつ、ああ……うっ！」

「初々しいチエリーピンクじゃのう。ホホホ」

艶々と光る亀頭を露出させられ、ジャンヌは悲鳴を上げてお尻をはね上げた。剥かれたばかりの亀頭は恐ろしいほど敏感で、空気が触れただけでも痺れて

しまうほど。僅かな刺激にも肉棒は反応し、ムクムクと硬く大きく勃起していく。

「ククク。身も心も昂るじやろう。これが牝の快感じゃ。このいやらしく勃起した肉棒を妹の、ユーワの中に入れてみたいと思わぬか？ 処女を奪ってみたいと思わぬか？」

悪魔のように、或いは天使のように、甘く囁きながら、アナスタシアの指が感じやすいカリを重点的に責めてくる。

「ンあああ……ユーワにそんなこと……ああ……や、約束が……違いますわつ」

「俺は犯さないぜ。約束を守るかどうかはお前次第だ。おらおら、もつと勃起しろ、もつと発情しろ」

胸に回した手で乳房を揉み捏ねながら、ズンズンと重たいピストンを撃ち込んでくるギドー。「うああっ……あああっ……だめ……そんなにされたらあ……あああ……ん！」

巨大な肉の塊が、神聖なる秘園に傍若無人に入たり入ったりを繰り返す。そのたびにまるで獣の情欲が乗り移ったように、ジャンヌのフタナリペニスも雄々しく反り返っていく。

「お、おねえさま……」
常識を越えた展開についていけず、ユーワは心配そうにオロオロするばかりだ。

「焦らして暴発してはもったいない。どれ、少し手伝ってやるかの」

小さく噴つたアナスタシアの指がジャンヌの背中からお尻にかけてスウツと滑る。

「ふうあつ！ な、なんですのっ……うあああつ！」
ゾクツと戦慄く背筋から得体の知れないざわめきが身体の中心に走り抜ける。

「うああ……こ、これは……闇の波動……!?!」
それを裏つげるように、ジャンヌの背から赤いオーラの光が炎のように燃え立ち始めた。

「面白いことになってきたな。おら、変われ！ 早くエロエロの淫魔に変わっちゃえよっ」
剛棒の一撃がズンツと子宮に撃ち込まれる。

「アヒッ！」
目も眩むような快美の炸裂にジャンヌの背中が反り返る。そしてついに――

「ンああああ……つっ！」
漆黒の禍々しい翼が出現する。淫魔の霊的因子を目覚めさせられてしまったのだ。

「うっ、ううっ……か、変わらないで……あああ……だ、だめえっ」

どんなに力を抑えようとしても無駄だった。耳が

尖り、口元には小さな牙まで生え伸びる。スレンダーな裸身は量感を増して、黒いボンテージに彩られる。さらにお尻からはエナメルの艶を持つ黒い尻尾までもが生えてしまった。

「お、おねえさま……!?!」
忌むべき淫魔へと変身した姉を見て、ユーワは声を失い呆然としている。シヨックの連続でもう思考が麻痺してしまう。

「う、ううあ……ユ、ユーワ……あああつ……見ないで……こんな私を」
「オオウツ。淫魔になったらまた一段と具合がよくなったぜっ。そりゃあああつ！」

変身姿に昂奮して硬度を増した肉槍が、続けざまに子宮口をノックする。

ズブツ！ ジュブツ！ ヌブツ！ ジュブンツ！
「あつ、くうああ……こんな、身体を弄って責めるなんて……ああ、卑怯……卑怯ですわあ……ああ、ああ、ああああんっ」

「卑怯でもなんでもいいんだよ、お前が俺の奴隷妻に堕ちさせずにはな」
「うあああつ……押さないで……オ●ン●ンが……ユーワにい」

ギドーの怒張に突き動かされ、ジャンヌの腰が少しづつ降りていく。ズンズンと荒々しく膣肉を捏ね回されるたび、ジャンヌのクリペニスも熱く硬く勃起させられていく。ポタポタと先走りを滴らせる切っ先が、妹の無垢なスリットを擦り始めた。

「ひやうっ！ お姉様……あ、当たってますう」
「あああ……ユーワ……ごめんなさい……か、からだ……言うことを聞きませんの……あああん」

怯える妹に申し訳ないと思いつつも、淫魔化された肉体は、おぞましい近親相姦を強要してくる。

「あああ、だめえ！ こんなことさせないでえ！」
金髪を振り乱して叫んでも、陵辱者たちがやめる

はずもない。

「おら、遠慮せずにズブツとやるんだよ」
ジャンヌに愛する妹の純潔を奪わせようと、ギドーが追い打ちのピストンを膣肉に叩き込んだ。

「うああ……あああ……ユーワ……ゆるして……うああああんっ！」

背後からの圧力に屈してジャンヌの腰が前にせり出す。次の瞬間――

「やめて……お、おねえさま……い、いたい……きやあああああんっ！」
「ユーワ、あああ、ユーワア！」

絹を裂くような姉妹の悲鳴とともに、姉の肉棒が妹の処女膣を切り裂く。ペニスは半分ほど潜り込み、無残にも押し広げられた無毛のスリットの中心から、鮮血がツウツと伝い落ちた。

「ホホホツ。処女貫通じゃな。ついでにジャンヌも筆下ろしじゃ」
「グフフ。どうだ、妹を強姦して処女を奪った気分はよ」

さらに結合を深めようと、ギドーが体重を乗せて腰を打ちつけてくる。

「ンああ……あああつ……やめて……くああああんっ……こ、こんなこと……非道すぎますわあつ！」

相姦の背徳感と妹の処女を奪ってしまった罪悪感が胸をキリキリ締めつける。命に代えても守りたかったユーワを自分が傷つけてしまうとは、悲しくて涙が滲む。だがその一方で、温かくヌメる蜜饗の妖しい感触に、フタナリペニスは妹の膣内でますます勃起してしまう。

「あ、あう……お姉様……はあうん」
「うう……ユーワ、ごめんなさい。大丈夫？」

「はあはあ……私だって王家の者です……ちよつと痛かったけど……こ、これくらいのこと……へつちやらです……あああうっ」

健気に答える妹姫だが、頬は苦痛に強張り、顔には汗がびっしょり噴き出している。

「姉妹で仲のいいことだな。もつと仲良くしてやるぜ！」

「うあつ……やめなさ……くうああんっ！」

ギドーに頭を押さえつけられ、ユーワの顔が急接近する。

「おねえさ……んむちゅ……くちゅらん」

唇と唇が重なり、甘酸っぱい少女の匂いが鼻をくすぐる。柔らかい花びらのような唇の感触が、ジャンヌの脳幹を痺れさせ、肉棒にも快樂熱波を伝えた。

（ああ……ユーワの……唇……）

妹を見つめる碧眼が鋭さを増し妖しく輝き始める。本人は気づいていないが、それは牡が牝を見る目だった。

「はあはあ……ユーワ……ああん……ちゅつ、くちゅん」

さらに唇を押しつけ、身体を密着させるジャンヌ。ペニスは完全に根元まで埋まってしまふ。

ジュブツ……ジュブツ……グチュンッ！

「ああつ、やめ……突かないでください……うう……お姉様……んああつ！」

「はあ、ああん……ユーワ……あああ……こ、腰が……動いちやうの……あああ、いけないのに……はあはあ、ああん」

（ああ……ユーワの中……すごいですわ）

ギドーの抽送に合わせて腰を振らされているうちに、妹の蜜孔を攪拌させられているうちに、だんだん未知なる昂奮がこみ上げてきた。

淫棒に絡みつく。髪は柔らかさ、温かさ、そしてキツイ締めつけがジャンヌの中に植えつけられた荒々しい衝動を呼び起こそうとする。膣の下が燃えるように熱くなり、フタナリペニスにドクドクと熱い血流が流れ込んでいく。尿道の中を灼熱する何か

がジワジワと這い上がってくる。

「フフフ。腰を振りおつて。だんだん射精が近づいておるようじゃな」

「んああんっ！ し、射精……ハアハア……ですつて……くうああん」

女の自分が射精するなどあり得ない。しかし今、肉棒の根元に蓄積していく溶岩のような熱さは一体なんなのか。これまで経験したことのない、異様な官能の道程はジャンヌを困惑させた。

「そうじゃ、もうじきそなたは妹の膣内に夥しい精を注ぐのじゃ。淫魔ウィルスがたっぷり入ったやつをな」

「んあ……ッ!? な……なんですつて……ッ！」

「そなたの身体は淫魔ウィルスに冒されておるのじやから、セックスで感染するのは当然じゃな。ユーワも天使の血を引く者。きつと愛らしい淫魔になるじやろつて。ククク」

アナスタシアの言葉に慄然とさせられる。処女を奪わせただけでなく、ジャンヌにユーワの淫魔化までさせようというのだ。まさに悪魔のような発想だ。

「うああ……そんなことしない……ううつ、ユーワにそんな非道いことお……死んでもしせんわつ」

大切な妹にまで、自分と同じ苦しみを与えるわけにはいかない。ジャンヌは奥歯を碎けんばかりに噛み縛り、必死に肉体の炎上を抑え込もうとする。

「あああ……お姉様……い、淫魔つて……ユーワも……ああん……淫魔になつちやうの……？」

「ユーワ、心配しないで……ハアハア……ギドーたちの……お、思いどおりにはさせませんわつ……うつくうん」

「どこまで頑張れるか見物だな。オラオラッ！」

捕らえた獲物を廻り尽くすように、ギドーは過激な杭打ちピストンでジャンヌの腰を無理矢理突き動かす。

「あううっ！ だめ、やめて……うつくうん……う、動かさないで……あああつ！」

オーガの圧倒的なパワーに抗えるはずもなく、ジャンヌの陰茎もユーワの膣に、淫らな往復運動を繰り返してしまふ。とても狭く窮屈だが、そのきつさが強烈な締めつけと背徳の快感となつて、ジャンヌの肉棒に押し寄せてくる。

「ハアッハアッ……すご……あううん……ユーワとエッチするのが……こんなに……き、気持ちいいなんて……あつ、あああつ」

呼吸が乱れるにつれ、腰の動きが激しさを増していく。強要されているのか、自分の意志なのかだんだんわからなくなつてきた。

「んああつ……お姉様……いた……ああう……強すぎ……ああうん」

「ごめんなさい……ハアハア……でも、もう……腰が止まりませんの……ハアハア……ユーワのオコ……気持ちよすぎますのおつ！」

発情した獣のようにゼゼエと喘ぎながら、妹のヴァギナをいつそう深く抉り、いやらしく腰をくねらせて掻き混ぜる。優しく気高い姉妹と同一人物とは思えないほどの乱れように、ユーワは戦慄くばかりだった。

「ああ……だめ……だめえ……何か……きちやうう……あああ……だめえつ！」

尿意にも似た切迫感が尿道をジリジリと灼き焦がし、ペニスの付け根に得体の知れない衝動がどんどん膨らんでくる。いけないと思つて腰を引いても、肉棒に絡みつく窮屈な妹の感触がジャンヌの魂を驚づかみにして放さない。勃起は抜け出ることなく元来た道を辿つて再びユーワの膣内にズブズブと沈んでしまふ。幼い子宮を亀頭の先に感じると、その切迫感さらに激しさを増し、獐猛な昂奮がこみ上げてきた。

それは女を犯し、屈服させたいという牡の根源的な欲求、強烈な射精願望なのだ。

「グハハ、いい感じに盛り上がってきたな。ハアハア、そろそろ妹に中出しキメてやれよ」

グイグイと子宮を押し上げながら、双乳を荒々しく揉みしだくギドゥー。淫魔の本能が目覚めるにつれて柔褌が精を欲しがって食欲に肉棒にしゃぶりついてくる。陰囊まで呑み込まれそうな吸精力に、これ以上射精を堪えるのは難しい。

「あんっ、あああんっ、はああうん！ だめ……ああ……ユーワの中に出すなんて……そんなことしちゃ……ダメなの……あああうん」

背徳感に苛まれながらも、性感帯の鋭敏さを物語るように媚肉は果汁をたつぷりと滴らせてギドゥーの巨根を食い締め、フタナリペニスに妹の幼い子宮を蹂躪してしまう。

「ああ……」

姉妹の唾液で濡れた唇から恍惚の吐息が漏れた。黒翼をためかせ、尻尾の生えたお尻をくねらせる姿は淫魔サキユバスそのものだ。

「はあう……お、おねえさま……ああ……すごい……あそこが……燃えちゃう……あうんっ！」

ユーワもまた初体験だというのに、姉に合わせオズオズと腰を振り、ほっそりした肩をくねらせてセクシーな喘ぎを漏らしていた。ジャンヌの肉体から放たれる催淫オーラにあてられてしまったのだろう。くびれの少ない■体型に、そこはかたない女の子の色香が滲み出す。

「ああ……ユーワ……んちゅ、むちゅ、くちゅん」

そんな姿に刺激され、ジャンヌは再び唇を奪った。舌と舌をネットリ絡め、唾液を混ぜ合う。いつしか妹を「女」として見、欲情している自分に気づかされる。

（ああ……出したくなっちゃう……ユーワの中に……

……妹のオ●ンコにい……っ）

「パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！
自制心を振り解き、種馬のようにジャンヌの腰が躍動し、尻肉を打つ音が破滅へのカウントダウンを刻んでいく。

「ハアハア！ いいぞ、ジャンヌ。ハアハア……俺と一緒に射精するんだっ！ ゲオオオオッ！」

咆哮したギドゥーが一際強い一撃を子宮口にぶち込む。ズーンと響く衝撃にジャンヌの括約筋が反射的に縮まって、ギドゥーをギリギリと締めつけた。

「ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュッ！」

「あひいっ……ンあああ……う……う……う……人間の数十倍という大量のザーメンがジャンヌの蜜壺の中いっばいに溢れ返る。濁流の勢いは子宮口を突破して胎内へとドツと流れ込む。

「ギドゥーの……あついい……あああ……もうだめ……ユーワ……ゆるして……もう出る……ユーワの中に……うあああ……う……う……」

淫なる連鎖反応が玉突き衝突のようにジャンヌの肉棒を灼熱させ、これまで感じたことのない瞬間的な官能の爆発が陰茎の中で起こった。

「うぐぐっ、あひい……う……う……」

「ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュッ！」

生々しい牝声とともにガクンと腰が反り返り、引き撃った絶叫が迸る。引き絞った背筋がブルブルと胴震いしたあと、ユーワの中に沈めきつた勃起ペニスから禁断の魔精が進った。

「お、おねえさま……あきやあああつ！ 熱い……う……う……」

オーガにも勝るとも劣らない大量射精が、窮屈な腔洞をあつと言う間に満たし、逆流したぶんが腔穴からビュルビュルと溢れ出す。

「あああつ！ ユーワ……あうっ！ だめっ、まだ

でちゃうっ！ だめなの……いけないのに、オチンチンイクっ！ イクのとまりませんのお！ ああ……う……う……」

「ドプッ！ ドプッ！ ドプドドドプンッ！」

獣じみた咆哮とともに、妹の胎内に濃厚な淫魔ウィルスの精液を注ぎ込んでしまうジャンヌ。それがどんなにおぞましいことかわかっている、いやそれすらもうわからなくなつて、ジャンヌは淫魔の本能の命じるまま、相姦射精を繰り返した。

「ンああああつ！ お、お姉様っ！ お姉様が入ってきてえっ！ あああ……イクッ！ イキます……ああああんっ！」

魔精を撃ち込まれたユーワも、抗えないまま絶頂に追い上げられる。童顔を仰げ反らせ、震える手足が姉の身体にしっかりとしがみつく。

「ユーワ……あああ……イクッ！ イクッ……う……う……」

姉も妹も、性の業火に一瞬にして焼き尽くされ、理性も自我も粉々に分解されていく。汗まみれの肌を摺り合わせてのたうちながら、二匹の牝獣に堕ちていく。

「グフフ。妹まで淫魔にするとはひどい姉だな。グハハハッ」

「いよいよ、心までも淫魔らしくなってきたようじやな。この調子ならギドゥーの仔を孕むのも時間の問題じゃろう。クッククック」

陵辱者たちがそれぞれの思惑を抱いてほくそ笑む中、王女姉妹は白蛇のように身をすり寄せながら快楽を貪り続けるのだった。

その後も休む間もなくギドゥーの逞しい肉棒で何度も犯され、唇にもお尻にもオーガの精液を注ぎ込まれて、次第にわたくしは淫魔の本能を目覚めさせられてしまうのです。



そしてついにおぞましい種付けが行われることになったのです。

「すっかり淫靡らしくなったな、ジャンヌ。待ちくたびれたぜ」

祭壇前に作られた巨大な陵辱用ベッドの上で、ギドローが胡座をかいてふんぞり返っている。

「今日は大地の神が天上の女神を犯してオーガ族を産みだしたとされる、俺たちオーガにとつて記念すべき祭りの日だ。お前は神に捧げられる生け贄として俺に犯され、種付けされるのだ」

ギドローの股間には子供の腕ほどの長大な肉槍が、伝説を再現しようと隆々とそびえ立っていた。

ジャンヌが着せられている踊り子のような衣装もその女神をモチーフにしたモノなのだ。

今のところ淫魔の変身は解けており、忌まわしい男根も跡形なく消えていた。しかし身体の内面で、何かが決定的に変わってしまったことを感じずにはいられなかった。

「今日こそ絶対に妊娠させてやるからな。楽しみにしている」

「あ、ああ……ギドロー……」

その圧倒的なパワーを秘めた肉体を見ただけで、ジャンヌは腰が萎えて力が抜けてしまう。

この牡には絶対勝てない、屈服するべきだと言う直感を牝の本能が告げている。心も身体も萎縮してしまい、まともに顔を見ることもできなかった。

(ああ……こ、こわい……こわいわ……)

これまで数えきれないほどの精を注ぎ込まれたが、やはり異種間の交配は難しいようで幸運にも妊娠しなかった。だがギドローの自信に満ちた態度を見れば、何か特別な手段を用意しているのは明らかだった。これからギドローに犯され、ついに妊娠させられると思うと、心が凍りつき、恐怖でカチカチと歯が鳴

ってしまふ。

「どうした、嬉しくて声もでねえのか。グフフ」

薄ら嗤ったギドローが祭壇から降りて近づいてきた。肉食獣のような体臭とプレッシャーに圧され、ジャンヌは蛇に睨まれたカエルのように動けなくなる。

「立てよ。ジャンヌ。待ちに待った種付けの時間だぜ」

「う、うああ……」

肩をつかまれた瞬間、ジーンと股間が疼いて立っていらなくなる。淫魔ウィルスと子宮寄生体によって、ジャンヌの身体は極限の発情状態だ。今ギドローに責められたら心まで完全に屈服させられてしまうだろう。

「あ……歩けませんわ……はあ、ああ……」

ギドローに対する恐れと、これから味わわれるであろう快楽への期待が混ざり合っ、牝の粘膜をドロドロに溶かしていく。呼吸も動悸もどんどん速くなり、体温が急上昇していく。

「もう反撃もできないようだな。グググ」

「さすがギドロー様だ。あの生意気な天使を手懐けちまうんだからな」

周囲のオーガ兵たちも、酒をあおりながらジャンヌが妊娠させられるのを今や遅しと待ち構えていた。「だらしねえな。それでも元天使様かよ」

「あ……きゃあつ」

俵を担ぐように軽々と身体を持ち上げられ、肩の上に乗せられた。ゴツイ掌がいやらしくお尻を撫で回してくる。

「これからジャンヌは俺と婚約し、俺の仔を身籠めるのだ。お前ら、よく見ておけつ！」

ジャンヌを軽々と抱えたまま宣言するギドロー。捕らえた獲物の美しさを誇示するように、その場でゆっくり回って見せつけると、オーガたちがオオツと歓声を上げた。

(ああ……恥ずかしい……でも、なんて……遅しい身体なの……)

自分を軽々と持ち上げる岩のように硬い筋肉や頑強な骨格をお腹に感じると、それだけでギドローの牡の実力にあてられてしまい、花びらがジュンツと濡れてしまふ。

「なんだ、また濡らしているのか？ いやらしい匂いをさせやがって。まったくしょうがない牝だな」

「そ、それは……ああ、うらん」

凶星を突かれて、ジャンヌは耳まで赤くなって口ごもる。お尻のすぐ横に顔があるのだからバレないはずがなかった。

「もうすぐ孕ませてやるからよ。グフフ。ほれつ」

「ああああんつ！」

ドットとベッドの上に放り投げられ、スプリングの上で身体がバウンドする。まるでモノを扱ような乱暴さだが、そんな態度にすらジャンヌの心は甘い屈服感を感じ始めていた。

(ち、ちがいますわ……わたくしが好きなのはセンセイだけですわ……っ！ こんな……鬼みたいな……怪物みたいな……アレが大きいだけの……ああ……性欲が強いだけの……男なんて……)

心の中でいくら叫んでも、どういうわけか身体はまったく動かない。筋肉が恐怖で萎縮してしまっている。

「大人しいもんだな。グフフ、あの生意気な態度がウソみたいだぜ」

「ああ……いやよ……放して……放しなさい」

背後からギドローに抱き上げられ、胡座の上に乗せられても、抵抗らしい抵抗はほとんどできない。

(ああ……また……ギドローの身体が……わたくしに……触れますわ……)

それどころか背中を感じる分厚い胸板や、何段に

ついにピュアマイツ最後の希望が陥落……!?

変身が
解けたか…

美少女魔法戦士
ピュアマイツ
PURE MATES
守けさぶろう
漫画 助三郎
最終話



さて
今度は俺様の
ペニスでイかせてやるぞ

カ
ン
ン

どうやら
変身が解けても
「力」は流入している
ようだな

だが処女を失うまで
「力」はこの女の意思通り
性欲を抑える方向で
働いていたが…

「女」となった今は
理性とは裏腹に本能が
男を欲し…
快楽をより得られるように
作用している

しかもこいつに孕ませた卵は
バッドフェアリーの中でも
とりわけ俺と相性がいいように
調整された卵だ

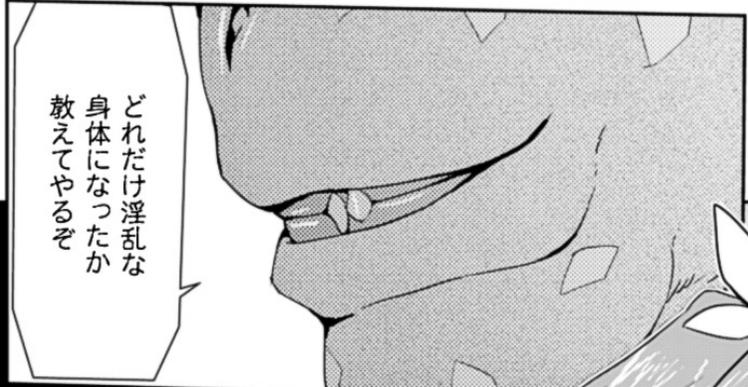
「卵」と「力」から
与えられる快楽は
先程より更に大きくなる…
耐えられる筈あるまい

前号までのあらすじ

仲間を囚われ、バッドフェアリーにより処女を散らすピュアビーチ—
桃香。首魁ギムジンはいよいよ彼女への種付けセックスを開始する…。



い…嫌あ!!!
な…なにを…!?



どれだけ淫乱な
身体になったか
教えてやるぞ



やっ!
やっ!
やっ!
やっ!
やっ!



嫌ア!!!



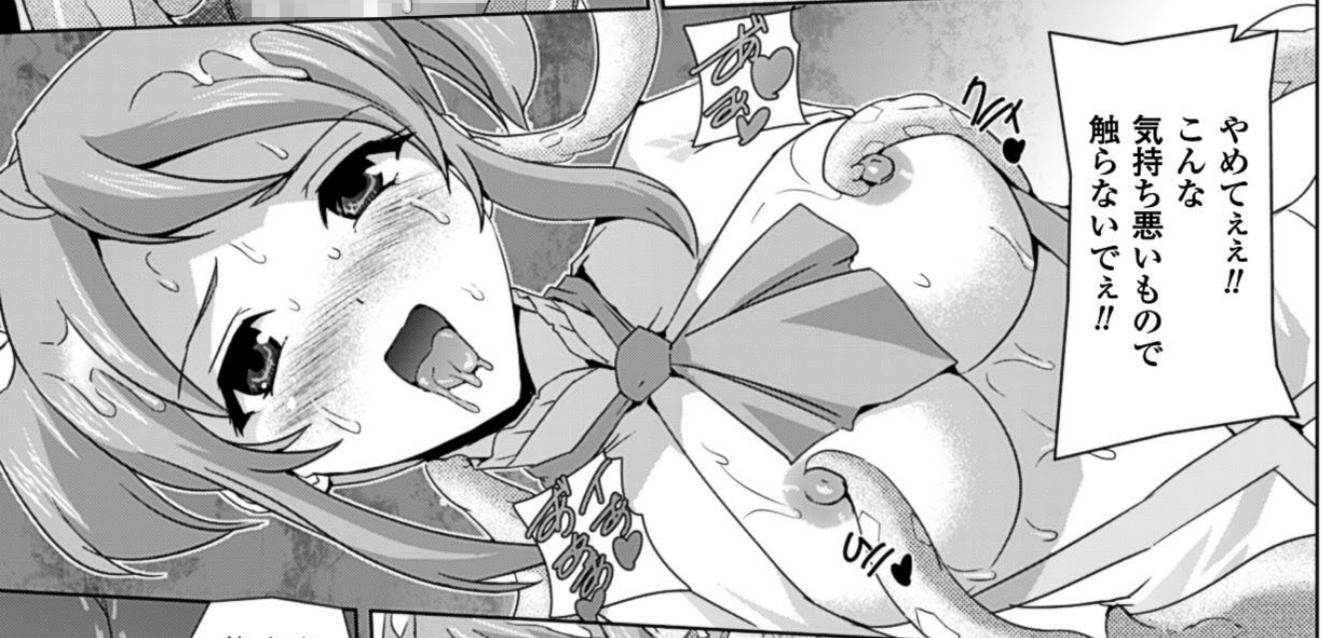
蕩けそうっ

からだか…頭が
ドロドロだ



ああああん
触られるたびに

身体の奥から
なにが熱くてドロドロした
ものが溢れそうっ



やめてええ!!
こんな
気持ち悪いもので
触らないでえ!!



おんこも
さっきから俺のペニスに
絡み付いてきておるわ



ふはははは!!

本当は
気持ちイイのだろう?

こんなに
乳首を硬くして

あ



気持ちいいので
あたま…まっしろに
な…ちゃっつう♡

す…凄いい♡



ら…らめえ♡
今そんなにされたらあ
あ！あああ♡

凄
♡

ほれ！ほれ！
どうだ？俺様のチポの味は？



ああ♡
あそこが勝手に
吸い付いてるうう♡

ああ♡



そんな激しくう
子宮突いたらああああ
ああああああ♥



……とっても
美味しい♥



あああ!
この唾液……
臭く……エロエロ……



ぐんぐん……
ほれっ!

さあ答えろ
さっきの餓鬼とこの俺…
ギムジン様のチポ
どっちがイイ？

あああ♥
いや…それは…

正直に答えないと止めるぞ？
それでもイイのかな？

た…大樹君よりの
ギムジン様のおチンチンの
方がいろいろおお!!

このおチンチに
負けちゃったあ♥

わ…わらひ…

わ……わらひはあ…

ははは！
言ったな！これで
お前は完全な雌豚だ!!

腔内にだしてやるぞ
雌豚!!

いく時は
大声でそう言え!

れ...れもお...
わらひ...

は...はひい!!

ああああ
雌豚
ぐんぐん

おち...手に負けて
幸せえ♥

セッ
セッ
セッ



悦獄に随ふ

気高き

妖狐は

あら ゆう
新居佑
sian

小説
NOVEL
挿絵
ILLUSTRATION

第二話

丸呑み・肉体媚薬改造の屈辱

下劣な妖魔に囚われた藤香
淫液とともに、気高き妖狐は
屈辱にまみれる

多くの人で賑わう市街地から、遠く離れた山中。樹齢数百年の木々がひしめき合うように生え並び、まばゆい満月の光すらも遮断してしまっている不気味な闇の世界だ。

それら無数の樹木を獣道に沿って分け入ったところに、大きく深い洞窟があり、現代最強の退魔師・綾辻藤香はその洞窟奥深くで怒りの剣閃を、情け容赦なく振るっていた。

「ころす……殺す。クロス……っ！ 私の邪魔を……章伯を奪うものは誰であろうと、肉片残さず殺し尽くすっっ!!」

暗い洞窟の中に浮かぶ無数の狐火の灯りに、藤香が握る大太刀に切り裂かれた、低級妖魔たちの青黒い血しぶきが咲き乱れる。

巨大な洞窟の横幅は、軽く四車線道路の広さはあり、高さはピルの四、五階分に相当する。

藤香はすでに立派な獣耳と九本の尻尾を生やし、艶やかな退魔スーツを身に着けている。かつて最凶の妖魔と恐れられた九尾の妖狐の力を露わにした藤香は、巨大な洞穴に潜む有象無象の妖魔たちを見つけた端から斬って捨てた。

「ひ……いいっつ！ 藤香、さまつっ……お許しを、ぎゃああああつっ!!」

ザヴツツ！ 肉体のみならず、魂魄すらも引き裂いたかのような重い斬撃音が洞穴に響くと同時に、中級妖魔である体長三メートルを誇る炎に包まれた蜥蜴——ヤマトカゲが醜い断末魔の叫びとともに絶命する。

千年の昔、妖魔の頂点に君臨していた藤香を知らない妖魔はいないし、藤香も何匹かは見知っていた。しかし……。

「いまさら命乞いなんて許さないわ。泣こうが喚こうが、頭を地べたにこすりつけようが……絶対にね！」

「そんな……くそっ、九尾の藤香も今はただの人間の女じゃねえか。まとめてかかりや……うぎゃあああああつっ!!」

ザンツツ！ ザンツツツツ！ ズブツツツツ!!

暗がりの洞窟に目にもとまらぬ剣閃が再び走り、何十という妖魔たちの命が刈り取られる。

普段、妖魔を退治するときの飄々とした様子は欠片もない。極々短いミニスカートからのぞく九本のふさふさした尻尾は、そのすべてがピンツツ！ と怒りの感情で直立に立ち上がっている。

「章伯……章伯……っ!!」

ザンツツ！ ブシヤツツ！ ドシツツツツ!!

深夜の洞穴内に、藤香が振るう斬撃の音と、それによって絶命していく妖魔たちの断末魔の叫びだけが響き続ける。

カツーン……。襲ってくる妖魔たちがいなくなつた岩の道に、藤香のピンヒールの音だけが鳴った。

何百という妖魔を斬り殺してきただろうか。どす黒く血塗られた洞窟を抜けると、そこは山の中腹をそのままくり抜いたかのような大空洞だった。

びっしりと生えたヒカリゴケで、その空間だけ昼間のように明るい。そしてその光に映し出された空洞の壁面には、見るからに邪悪そうな紋様が彫り込まれ、中央には祭壇のようなもので拵えてある。その祭壇に彼と、そして、奴がいた。

「藤香……っ!!」

「さすが九尾の藤香……。街ひとつ軽く攻め落とせる程度の連中を集めておいたつもりだったんだが……

……転生しても妖力は鈍っていないようだ。結構結構」
後ろ手に縄で縛られ、床に投げつけられている章伯が見えた。外傷はない。意識もはつきりしているようだ。張りつめた藤香の心が、ほんの一瞬だけ安らくなった。

「章伯……。くっ、貴様……。っつ!!」

そして章伯の横に立つ男に、これまで以上の鋭い視線を叩きつける。

男の年齢は見た目で三十代中頃。身長は百七十よつとで、体型はひよろりとした痩せ型だ。サラリマン風のスーツにネクタイを着け、オールバックの髪型にインテリ風の眼鏡を身に付けている。

しかし一見優男風の風貌とは裏腹に、口調は尊大そのもので、鋭い殺気をまとう藤香を前にしても、不気味な余裕を保っている。

「陰陽師・法限！ まさかあなたが私たちと同じように転生していたなんてね。しつこいにもほどがあるわ」

章伯がさらわれた現場に置かれた手紙に記された受け入れがたい事実。

かつて己の野心のために、九尾の妖狐だった藤香の命を狙い、当時宮廷の筆頭退魔師だった章伯を瀕死の状態にした男、陰陽師・法限。

見た目こそ現代風に変わっているが、自分たちと同じように転生したその男は、藤香が不在の千年の間に統制を失った妖魔たちを従え、今再び、藤香と章伯に仇なそうとしている。

妖魔を使つて、屋敷から章伯を誘拐し、薄気味悪いこの場所に藤香を呼んだ男が言う。

「元々陰陽師は魂の扱いに長けていてね。千年前の都もよかつたが、今のこの国の方がよほど支配しがいがある。感謝するよ、九尾の藤香。お前たちを使つて、今一度殺生石を作り出し、この国……いや、この世界を私は支配する！」

「そんな……。お前はいまさらそんなくだらしないこのために章伯をさらつたの!?!」

「ふふ、妖狐と退魔師が、わざわざ転生して添い遂げることの方が、実にはかばかしく滑稽だ。その魂は、殺生石の材料になるのがふさわしい」
法限が呪文を唱えようと、空洞の壁一面に刻み込ま

れた紋様が妖しく輝き、そこから一匹の巨大な触手妖魔が召喚される。

体長が数メートルを超える巨体の先端には、胴体と一続きになった、人ひとりを軽く一呑みにできるほどの大口が開いている。

赤黒い全身からはネットトした薄気味悪い粘液で覆われており、広い空洞にひどく臭う妖魔の体臭が広がっていく。

開いた大口からは、また新たな小さい触手が無数に生え、不気味にうねりながら、退魔師姿の藤香に迫り来る。

「藤香つつつ!!」

欲に狂った陰陽師の呪法を見て、拘束された章伯が叫ぶ。しかし藤香は動じる気配を見せなかった。獸耳を生やした美貌に余裕の微笑を浮かべてみせる。「心配してくれるの、章伯? 待つてなさい。九尾の藤香……退魔師・綾辻藤香が、こんなクズに負けるわけがないでしょう!」

章伯がさらわれたと知ったときの、壊れんまでの心の動揺。ここに来るまでの鮮烈な激情。そして章伯にかけられた心配の声を聞いたときの熱情は、確かに自分が彼を強く思っていると実感できるものだった。

「法限……。よくも章伯……。ふふ、綾辻家の下人へ手を出してくれたわね。今すぐ地獄に送ってあげるわよつつ!! 妖刀ムネマサ終の太刀・震電!!」

藤香の九本の尻尾が一斉に立ち上がる。強烈な妖気が発せられ、長大な大太刀に無数の梵字が刻み込まれていく。

雨雲など生まれるはずのない洞穴に、耳をつんざかんばかりの激しい無数の雷光が走る。帯電する静電気に、藤香の尻尾の毛が逆立ち、握った長刀に青白い雷のエネルギーが溜まっていく。

「私に逆らうすべてを灰燼に帰せ……はあああああ

あああつつつ!!」

ダイダラボッチのときに見せた神速の剣撃ではない。鋭い叫びとともに上段から振ったたつた一振りの剣閃が、数多の触手を撃ち滅ぼし、返す刀がサラーマン風の陰陽師の命を狙う。

「ぐつ……。私の殺生石の力をまた……。つ! この女狐……。ぐあああああつつつ!!」

地面を抉り、下から上へ。ザヴツツ!! と法限の身体を切り裂く紫電の刃が、悪しき男の返り血に染まる。これでもう自分と章伯を邪魔するものはない。

血塗られた刃から確かな手ごたえを感じ、早く章伯を抱きしめたいと、鼓動が高鳴る。

「あ……。藤、香……。つつ」

ビツツ!! 勝利を確信した藤香の頬に、熱く赤い水滴が飛び散ってきた。先ほど斬り倒した法限の返り血ではない。頬を伝うその鮮血の主の傷ついた姿に、藤香の美しい切れ長の瞳が、大きく見開かれていく。

視線のわずか先。拘束されたままの章伯に深い刀傷が刻まれていた。それは先ほど藤香が法限に与えたものと同じ個所だ。

「あき、たか……。つ。な、どうして……。私……。つつ」
愛する人を傷つけた記憶などない。しかし目の前の章伯の刀傷は、どう見ても自分がつけたものとは思えない。

人間、妖魔の間で、最強最悪、冷酷無慈悲と恐れられた九尾の妖狐。その生まれ変わりの少女が、一人の少年のために激しく動揺する。

凜と立った獸耳や九本の尻尾が、力なく垂れ下がりに、獲物を睨みつける冷たい視線が、か弱い乙女のように、ふるふると震えている。

きつく握っていた愛刀が、力なく床に落ちる。「ふふふつつ! 完璧に引っかかったものだ。転生

したといっても、所詮は畜生だな」

目の前に立つその男の姿は、傷を負った章伯とは対照的に、そのひよろりとした身体はおろか、スーッすら埃ひとつついていない。

「反魂の術……。つつ!!? あなた、自分の魂を章伯の身体に……。つつ!!」

唇をきつく噛みながら、藤香は男が施していた法術の正体を口にする。

それぞれの魂を入れ替えることよって、肉体に受けた傷を、入れ替えた者に負わせる身代わりの法だ。

（私は……。なんてことを……。つつ）

章伯を早く助けたいと思うあまり、男の卑劣なトラップに気付けなかった。

「ふつ、私は無傷。あちらの少年は、お前のせいで瀕死の重傷だ。今度こそその魂をいただかせてもらうよ?」

法限の発した呪法の触手が、傷ついた章伯目に向けて伸びる。刀を拾って、法限を倒す時間はない。

「章伯つつ!!」

なにも考えず藤香は、章伯の下へと駆け出した。迫り来る触手より早く、傷ついた少年を、そのふくよかな胸と身体できつく抱きしめ、殺生石の莫大な妖力を章伯の回復に注ぎ込む。

「とう、か……」

「よかったわ。章伯。私……」

藤香のお腹の内から放たれる暖かい光によって、章伯の傷がみるみる塞がっていく。血色を取り戻す章伯に、藤香は大切な言葉を告げようとした。

グボウウウツツ!! グチュウウツツ!!

殺生石の力を使い、章伯を救うことに意識を集中しすぎたために、初め章伯を狙っていた巨大触手妖魔が、自身に狙いを変更したことに、藤香は気づけなかった。

巨大な鯨のように口を開けた触手獣がグンツ！と天井近くまで立ち上がり、藤香の頭上から勢いよく迫ってきた。

「なに……んぼつつつつ!! ほぐつつ、おつ、んんんつつつ!!」

藤香の頭が、触手にパツクリと呑みこまれる。なおも藤香の全身を丸呑みしようとする触手を、藤香はなんとか両腕を伸ばして耐えしのいだ。

呑みこまれた美貌に、ムワツとする肉触手内の熱気が吹きつけられる。美しい栗色の髪が不快な湿り気にもみれ、きめ細かい柔肌にぬるんとした体液が垂れ落ちてくる。

「ほう、ギリギリで耐えたか。まあ、そいつが一度食らいついたら、女であるお前にはどうしようもできんだろうがな、くくく」

肉壺……そう表現するのが一番しっくりくる触手の体内にあつて、外にいる男の声は嫌というくらいはつきり耳に届いてくる。

ドクドクと蠢く赤い肉壁で覆われている触手の中は蒸し暑く、触手自身が放つ悪臭が鼻につく。

プニョプニョとした触手体内の感触は、皮をはぎ取った生肉そのものといえるものだった。それらが藤香の張りがあつて艶々とした肌に当たり、気高い女退魔師の心に不快な色を刻んでいく。

しかし幸いなことに、呼吸は普通に行うことはでき、グロテスクな妖魔の異臭を間近で味わわせられながらも、喋ることもできた。

（章伯を助けることはできただけだ……な、んなのこいつつ!!）

法限の口ぶりから、頭だけだが触手に捕らわれた自分を見て、明らかに油断している。

この気味悪いミミズのような妖魔がどのようなものかは知らないが、刀はなくとも、妖力を使って切り裂くことなど造作もない。

（章伯、待つてなさい。今度こそあいつを殺して、あなたを助けだしてみせるわ!）

退魔師としての矜持ではなく、愛する男性をもつ一人の女として、あんなクズ男にいいようにやられるわけにはいかない。

「緩辻藤香様を舐めないことね。この程度の拘束なんて……なつ、な、につ!!」

藤香が霊力と妖力をブレンドさせた破魔の力を集中させようとした瞬間、藤香の肌に気味の悪い感触が触れる。

毒々しい肉色の触手内部のいたるところから染み出してきたのは、濃い粘り気を帯びた半透明の液体だった。音もなくジワリとにじみ出て、垂れ落ちてきた大量の粘液が、藤香の大人びた美貌に塗りたくられていく。

さらに触手の大口の隙間から溢れ出した粘液は、藤香のまだ呑みこまれていない豊満な女体にもドロドロと垂れ落ちてくる。

「くつ、法限つ、これはいったいなんなのつ!!」

グラマラスな身体を思い切り動かしてみても、深い肉壺に頭を呑まれた状態では、粘つく正体不明な液体から逃れることができない。

「くくくつ、すぐにわかるさ。おつと、コッチの方面かわいがつてあげないと」

「いいから早く答えなさい……つ!! んんつつ、んぶうううつつ!!」

声こそ聞かえるが、外の……章伯の様子をうかがい知ることのできない焦燥感から、藤香がイラついたように言い返す。しかしその惱ましい唇に、肉壺から生え出た数本の触手が、力任せにねじ込まれる。

「んぶつ、じゆるつつ!! こ、んんんつつ!!」

触手の形は、まるで人のペニスのようだった。赤い肉色の触手ペニス、気高い退魔師妖狐の唇を、許可もなく蠢きまわり、喉奥にまで侵入する。

（ううぶぐつ、この……おつ。こんな気持ち悪いものを私の口になんて……!）

わずかに触れただけでどことなく肌を熱くさせる粘液は、まるでハチミツの容器を思い切りぶちまけられたようだった。

まだ呑みこまれていない、藤香のただでさえエロティックな退魔スーツにも、とろみのついた液体が垂れ落ちてくる。

熟れたスイカのような二つの爆乳のワレメに、トロトロのジェルが溜まっていく。ピンツと立つた獣耳もドロドロに汚され、口の中は、触手ペニスからにじみ出る同様の液体の味で、吐き気が出そうだった。

（こんなものつ、今すぐ喰いちぎつてあげるわつ!!）

藤香は、普段隠してある鋭い二本の犬歯を露わにした。このまま身体ごと丸呑みにされる前に、内側から切り裂いてみせる。

「ふつ、その生意気な性格を、私が開発したこの薬で矯正してあげようか」

ズブリーイッツ。

「んあうつ!! は……あああつつ!!」

藤香が口を大きく開けようとした瞬間、まだ肉壺に呑みこまれていない大腿開きの下半身に、鋭い痛みが走る。

肉壺に捕らわれても、決して強気と絶対の自信を崩さなかった藤香の瞳が大きく見開かれ、上半身がビクンツ!! と激しく仰け反った。

下着越しに刺された場所……まだ皮をかぶつたままのクリトリスに、細い注射針から押し込まれる薬が注入されたとき、藤香の全身を、無理やり呼び起された熱い牝の衝動が駆け巡る。

ドブアアアアアツツ!!

薬の注入と同じくして、喉奥に押し込まれた肉ペニスの先端が、人間の牡のようにおぞましく開き

そこからリッタークラスの大量の白濁粘液が放出される。

「おぼっつ、おおんっつ！ んおおおおおおおっつ!!」

注ぎ込まれた半透明の粘液は、たちまちのうちに藤香の胃袋の許容量を上回り、スレンダーで魅惑的なウエストラインを、まるで妊婦のようにパンパンに膨らませていく。

しかもそれらは、妖力が回らない身体の内側から、藤香の細胞、神経にいたるまでジワジワと染みこんでくる。

そして、それはクリトリスも同じことだった。過敏な神経や血管が圧倒的に集中している女豆に注入された薬液は、ジュンッ！ と熱い感覚を残しながら、淫核だけでなく、下半身すべてに染みわたっていった。

「は、ああっ。体が熱いつつ!! 力が抜け……くっ、んぐっ……ふううっ!!」

大量の妖しい液体を吐き出した触手が、藤香の口から抜き出てから一分ほどがたついていた。

大きく膨れ上がったボテ腹は、注入された粘液のほとんどすべてが、藤香の体内に染みこんで、元のキュッと引き締まった腰まわりに戻っている。

しかし、ようやく自由を取り戻した藤香の声音は、さきほどまでの高慢な色だけではない、明らかな発情の色が多分に混ざっていた。

それを見計らったように触手が完全に藤香を呑みこもうとしてくる。

顔が呑みこまれた肉壁がウゾウゾと蠢き、収縮していく。呑まれるのを拒むように、細い両腕に必死の力を込める。しかし逆に身体が甘く痺れていき、プルプルと震える両腕が、下等妖魔の力に押しされ始める。

「それは私が作った。特濃媚薬だ。現代での私

は製薬会社の研究員でね。くくく」

「び、媚薬……っ?! と、藤香……っつ!!」

法限の苛立たしい声とともに、章伯の心配そうな声が肉壺内に聞こえる。

「あ、章伯……っ。は、ああうっ。くっ、これくらいなんでもない……わっ。綾辻藤香様を舐めないこと……くう、ね……っ」

法限には女としての矜持を。章伯には恋人としての強がりを示した台詞。しかしいくら当代随一の退魔師であっても、女の性には逆らえない。

(む、胸が……股間が疼くわ……っ。このくらい、耐えな……んぐうううっ!)

全身で発する女の疼きに、意識が散漫になっていく。徐々に触手の口がおりてくる。呑みこまれまいと踏ん張ってきた藤香の腕が、ジワジワと垂れ下がっていく。

「んぐっつつ!! んんっつ……あ、くっ、くううううううっつ!!」

抵抗の意思を刈り取るように、ゴブゴブと藤香の身体が触手に呑まれていく。蠢く内臓に左右から押しつぶされるような感覚に、媚薬を受けた柔肌がビクビクと不本意に感じてしまう。

なんとか両脚を無様なガニ股に広げてまで、全身を呑まれることは避けたが、腰から上はすっぽりと粘つく肉壺に呑みこまれてしまった。

(う、迂闊だったわ。こんな薬をあいつが……っ。身体中が熱いつつ! 刺激が、ほしいっ……)

艶やかな唇から出た舌が、子犬のようにハッハッと物欲しげに動く。シャキッとしていた獣耳の先端も、力なく頭を垂れている。

肉触手の外にある開脚を強要された下半身は、無意識にさらに大きく開かれ、憎むべき男と愛する人に、無様な妖狐のガニ股開きを見せつけてしまう。

「ふふ、今回は普通の十倍の濃度に、百倍の摂取量

だ。どんな感じか、ココロに聞いてみようか?」

法限の気配が股下に伸びたかと思うと、悩ましい下着の上から、軽くスツと人指し指の平で、上から下に撫でられた。

「あっ! くっつ、ふうっ……っ」

たったそれだけで、肉唇から溢れ出した蜜液によつて、ショーツがあつという間に熱く湿っていくのがわかった。

呑みこまれないように開いた両脚が、プルッと妖しく痙攣し、鍛えられた美脚の筋肉と脂肪のラインにも、溢れ出した牝の本気汁が垂れ伝っていく。

「これだけの媚薬で正気を保っているのは、たいしたものだが。どうだい、少年? きみの女が淫らに変わっていく様子は? ふふ、ちゅぶっ、れるん……っ」

「ああっ?! やめ、なさい。この変態……っ。私は平気、よ……章伯っ。この程度で私が参ると思つて……んくふっ、くううっ!!」

ショーツ越しに股間を愛撫した法限の指が、ネットリとついた藤香の愛液をいやらしくしゃぶる音が響く。

章伯に心配をかけないように、身体中で燃え盛る淫欲と屈辱を、歯を食いしばって耐えしのごとくする。しかし注入された媚薬に犯された身体が、藤香の股間を熱く疼かせる。

「ん、妖狐のマン汁がこんなに美味なものだとはねえ。きみも舐めてみるかね? 私みたいなのには好き勝手されちゃ、カレシとしてまづいだろう? はははっ」

「くっ、藤香……このおっ!!」

章伯の悔しそうな声が肉壺内に届く。千年の時を経て、ようやく結ばれた自分たちの恋心を弄ぶ法限に、熱い怒りが湧き上がった。

「では、ここからが本番だ。せいぜい楽しませてく

れよ」

男の声に合わせて、肉壁から大小の触手がわらわらと生え出てきた。それらは、捕えた牝を犯す、という淫狼な牝の本能に導かれるままに、肉壺内の女退魔師に襲いかかる。

ジュルズ……ズリユリユウウツツ……。ジュズ、ジュブウツツ。

「ひうっ！ あっ、くっ……こいつ、らっ！ はなれ……んんんっっ！」

両腕は肉壺に吞まれたときのまま、まっすぐ下に伸ばされており、触手を払いのける術はない。蒸し暑くドロドロした逃げ場のない密閉空間で、熟れた女の肉体が小型肉触手たちに、いのように弄ばれていく。

ふるんと大きく膨らんだ二つの果実には、毒蟲たちがまとわりつく。量感たっぷり双乳の根元をギチユツときつく締め上げられると、生まれた快感の波動が先端へと突き進む。

甘く痺れるその感覚が、牝脂肪の詰まった膨らみ部分で凝縮されたところを見計らうように、乳首を激しく吸引される。

亀頭のような唇を開いた触手の先端が、媚毒のせいで大きく起立した牝乳首を、餓鬼のように荒々しく吸ってくる。

決して比べてはいけなと思いつつも、章伯のつたない愛撫とは次元の違う、魔性の官能が、両胸全体で弾け飛ぶ。

「あぐっ、そこは……っ。離れ、なさいっ！ んっ、あっ、くううっ！」

触手たちは、普通の人間にはない藤香だけの器官……獣耳に狙いを定めてきた。

大量に集まる耳の神経。それらすべてが直接体内に注入された媚薬によって、胸や膣にも劣らない性感帯へと変貌させられている。

耳の内側を、触手の粘ついた外皮が舐めるように這いずり回る。媚薬体液を滲ませる触手の耳愛撫は、まるで剥き身のクリトリスを弄られているかのような、たまらない快感を迸らせてくる。

（き、気持ち……昂ってくるわ……あ。耳がこんなにクルところだったなん……ひうっ、くっ……くそおおっ！）

肉壺の中の蒸し暑い熱気によって生じた、臭い立つ汗が肌を伝うだけで、ゾワゾワとした牝の感覚に苛まれてしまう。

媚薬によって何十倍にも高められた快感神経の過敏さと、触手の体内で身動きのとれない状態が、強気な女退魔師の心をじわりじわりと削り落としていく。

（くっ、この私をこんな低級妖魔がいつまでも……はあはあっ、いのようにできると思わないことねっ！）

藤香は媚薬によって性感を高められながらも、心は決して屈してなどいかなかった。かつて今も最強……その強い矜持が退魔師・綾辻藤香としてのプライドを呼び覚ます。

法限に気付かれないように九本の尻尾へと溜めていた妖気。それを解放すれば、所詮女を騙ることしか能のない触手妖魔と陰陽師など一瞬で塵にできる。「ふふ……私を怒らせた罪は重いわよ。食らいなさい、法限！ あっ、なっっ!! ひぐうううううっ!!」

尻尾を立てて、妖力を放とうとした瞬間、その尻尾からこれまで感じたこともないほどの快楽電流が藤香の全身を駆け巡った。

プシャッ！ と、ガニ股状態の股間から、臭い立つ牝の本気汁を噴出させてしまう。背筋だけでなく両脚がビクンッ！ と淫狼にわななき、溜め込んでいた妖力が霧散してしまう。

「この日のために、手なずけた妖魔を使って、綾辻藤香の能力を計っていたからね。油断ならぬ女には、相應の肉体改造を施しておかないと、くっ」

「肉体……改造……ですって!! あうっ、妖力が……!! は、ああっ、法、限んんんっ！」

指摘されて自身の身体の変貌に驚愕してしまふ。注入された媚薬はただ性感を高めるためではなく、細胞レベルで藤香の女体を淫靡なものに変えてしまっていた。

妖気を使うとするだけで激しい快楽が、全身を襲う。試しに爪や牙を出そうとしたが、たったそれだけで肉壺内の上半身が、ビクンビクンッ！ と淫らに痙攣させられてしまった。

「う、くっ……この下衆め……ええっっ！」

思わず漏れそうになる熱い吐息をきつく堪え、怨嗟の声を絞り出す。逃げることも、反撃することもできずに、藤香の魅惑的な女体が、徐々に官能の淵に付け込まれていく。

「この期に及んで、なおその態度……つくづく嬲りがいのある女だ」

「くっ……なっ、やめ……やめなさ……んんんっ！」

男の指先が、藤香の愛液に濡れたショーツを脱ぎ取っていくのがわかった。肉壺に吞まれ、不快な蒸し暑さに悩まされ続けている上半身とは違う、洞穴の冷たい空気が熱く欲情した陰唇に触れる。

「ほう、意外と毛深いな。どうだね、少年？ 自分」ときと今では、どのくらい濡れ方が違うかね？」

「法限んんんっ!! それ以上、章伯に話しかけたら……ひぐっ!! おおっ、やめ……く、ふううっ!!」

愛する少年に、こんな惨めな姿を見せたくないし、これ以上悲しませたくない。しかし乙女としての純粹な想いも、肉欲を弄ばれるだけで、余計卑猥な姿を晒してしまう。

ジュボツツ！ ヌボオオツツ！

男の中指が、濃い茂みの奥にぬるぬると埋められ、その入り口を繊細にタッチしてくる。

転生したことで、今なお狡猾なその性格から、すでに老獪といえるほどの性的テクニックをもつ法限の指責めは、どうにか快楽を堪えようとする藤香に、屈辱的な気持ちよさを押し付けてきた。

媚薬のせいで、たつぷりの愛液にジユワリとまみれた膣口の上壁を軽く撫でられたかと思うと、今度は本気汁をクリトリスに塗りたくって、シコシコと勃起淫核を擦りあげてくる。

「はあはっ……くっ……。いい加減やめ、あつ、んふうっ！」

男の指は、決して女穴の奥深くまでは突き込まれず、入り口付近とクリトリスを交互に……しかも両方決して満足させない軽く短いタッチで、快感を堪えようとしている女退魔師の情欲を煽ってくる。

そしてジワリジワリとした大人の焦らしに、耐え切れなくなつた藤香の理性が性欲に揺らぎ始めた瞬間を狙って、ジュブリッ！と愛液まみれの初心な女壺の奥深くにまで指を思い切り突き込んで、ゆっくりと抜き差ししてくる。

「あつ、んぐううっ！ はっ、あつ……くうっ、あうううっ！」

「まだ数回しか使っていないというのに、いい具合だな。やはり女狐の性欲は獣並みなのかな？」

男を毛嫌いする意思とは反対に、パツクリと左右に開かれた牝の花弁は、法限の指を、いっそ死にたいくらいきつく激しく求めてくる。

まだ淡いピンクの肉ヒダを、つたなかつた章伯とは違う、経験豊富な指使いで弄られる。牡臭い肉触手の体内とは違う、ひんやりとした下半身が熱くなる感覚が、法限に責められているという事実をきつく脳裏に突きつけてくる。

（感じるものです……かあつ！ 負けないわよっ。

誰があんなやつ思い通りに……いっ！）

馬鹿にされるたびに、章伯との関係を茶化されるたびに、男に対する憎しみの感情が湧き上がってくる。カチカチと卑猥に震える歯をきつく食いしばり、下半身に思い切り力を込める。

「そろそろ上の方も寂しくなってきただろう？ 女の悦びを思う存分味わうといい」

法限の意思に呼応するかのようには、肉壺内の触手が責めを一気に強めてきた。

胸や耳だけでなく、臍や腋にいたるまで無数の触手が這いずり回り、逃げるのできない快感を与えてくる。

とどめは再び唇に極大触手を突き込まれ、媚薬を直接口内に染みこまされる、淫毒フェラチオを強制される。

「や、やめ……じゅるっ、ふちゅっ……んくっ、ちゅぶちゅぶっ！」

（な、流されてはダメよっ！ あの男の前で……章伯の前では絶対に……っ！）

まるで口内を犯されているかのような、ズブンズジュンツッ！ という触手肉棒の突き込み、強制発情させられた舌と唇が勝手に絡んで、エロティックに舐めまわしてしまう。

新たな濃縮媚薬を喉から胃、そして全身へと染みこまされると、それまでどうにか保ってきた理性と本能のバランスが、どうしようもない牝欲へと振り切られていく。

「マコの締りがよくなっているぞ？ どうした、もう限界なのか？」

「そんなことおっ……。殺すっ、私はお前を必ず……あ、はあつ！」

身体中から閃く快感の爆発の中、なんとか絞り出した抵抗の言葉。しかし肉壺の外で、法限が膣と同時には剥き身のクリトリスまで責め始めると、情けな

い牝の嬌声へと変えられてしまう。

「ちゅるっ、んちゅっ……はあはあつ」

胸全体で、口の中で。そして膣とクリトリス……耳など身体中が、明確な快感を欲していく。

全身の毛穴から濃い発情臭をまとった汗が溢れ出し、エロティックな退魔スーツに包まれた女体を、媚毒粘液とともにネチヨネチヨに侵していく。

ジユボジユボツッ！ ギチチィツッ！！

無様なガニ股開きの中心の花弁を、男の三本の指先……中年の巧みな出し入れが責めたてる。処女を散らしたばかりのまだ初心な、それでいて性感だけを高められた女壺が理性を飛び越え、男の指を物欲しげに啜え込む。

直接注入された媚薬の効果により、小指大にまで肥大化させられた剥き身淫核。ズキズキという痛みと熱さを、すべて気持ちよさへと変換し、法限の指使いに翻弄される。

「ふああつ、くう……あ、んんっ」

（ぜ、全身が……頭が蕩ける……うっ。我慢なさい、藤香あつ。章伯の前で、こんなやつになんてっ！）

心配から、章伯がまだこの場にいるのははつきりとわかる。だからこそ他の男から与えられる快楽になど、絶対に屈するわけにはいかない。

「気持ちはまだ折れていないようだが……身体の方はそうはいかないようだねえ！」

言った男の左手が、剥き身淫核を思い切り抓つた。そして膣内に挿入した右手の三本の指をクィツ、きつく折り曲げて桃色の肉ヒダを、きつく擦りあげる。触手たちも主に応じて、一際強く藤香のあらゆる性感帯を全力で締め上げた。

「そんな……！ あ……おおっつ！！」

瞬間、全身で快感が爆ぜた。章伯との愛ある絶頂ではない。好きな男の前で辱められ、無理やり昇り詰められた……どうしようもない屈辱のエクスタ

妖艶な魔少年ルシアに
襲われ大ピンチ!?

思春期な アダム

第7話

MAGICAL VALKYRIE
天海雪乃

原作：さかき傘

カッ
ッ
ッ

なんだよ
睦月^{むつき}たち
早退かよ

エンジユちゃん
お弁当置いて
行っちゃった…

にしても
雨どんどん強く
なってるな！

カッ
ッ
ッ

ホラ！
もうすぐお昼休み
終わるんだから
早く食べて食べて！

うるせー
ぶに子！



前号までのあらすじ

すべての女性を支配する“蛇眼”に覚醒した睦月少年。天使少女エンジュにボディガードされる彼の前に、魔族の少年ルシアが現れ……!?



エンジュ!!!

あ



ス
ー
ッ
ア
ダ
マ
羽衣灼化!!



!!?

チツ

切っ先が
刺さらない…!?





フン…防御を
かためたって
そのでかいだけの
大剣じゃ

立ち回りで僕に
勝てないよ？



どうする？
睦月クンを
置いてくなら
退いてあげても
いいけど

今度は直接
キミの首
イッちやうよ？



エンシユの
スーツはきつと
ミカさんの下着と
同じ天使特性素材で
できてるんだ



だから着てる
部分は大丈夫なん
だろうけど

そこ以外を
狙われたり
したら……！

エンジユ……
逃げようよ
殺されちゃうよ

……睦月
目を閉じていて

いいから
閉じなさい
エッチ

それに見たく
ないでしょ

生き物が
バラバラになる
ところなんて

囚われた女怪盗たちの恥辱の肉体改造ショー!!



紅の盗賊姫レイア

Deep red thief

最終話 淫謀に墮ちる紅の姫

小説
NOVEL

ちくまじゅうこう
筑摩十幸

挿絵
ILLUSTRATION

すけさぶろう
助三郎

登場人物紹介



レイア・リオナー

王家の血を引く王女にして「レッドチェリー」の異名をとる怪盗少女。父王の仇であるブルゴックと戦うが…。



エリザベート

ルハサン連邦の監察官を称する妖しい美女。レイアの仇敵であるブルゴック將軍を操る。

ジェフティ

リオナー一族の忠実な家臣。王家復興のためレイアを除く支援している。

前号までのあらすじ

貴族ジェフティの庇護のもと、マリ、シャンティとともに宝玉を探し求める王女レイア。仲間を人質にされた彼女は、奴隷に扮して奴隷商の元から宝玉を盗み出す。すでに仲間たちはエリザベートの手で洗脳され、彼女もまた妖女の餌食に堕くすることに…。

ブルゴックは意気揚々と、踊り出しそんな足取りで地下への階段を降りていく。

これまででなかなか屈しなかったレッドチェリーレイア姫がもうすぐ奴隷に堕ちるといふのだから、楽しくないはずがない。それは単に最高級の美少女奴隷を手に入れたのみならず、王家の秘宝とアルラン国を完全に手中にすることを意味する。富と名誉と女。男としてこれ以上の幸福感はないだろう。

「どんな奴隷娼婦になったか楽しみだわい」

昂奮で震えそうな手で扉を押し開くと、

「ンああっ……はああっ……あつあつ、イ……イ……クっ……あああ……んっ！」

蒸れ爛れた空気が漂う室内に、レイアの甲高い牝声が響き渡り、甘酸っぱい牝の芳香と、栗の花のような牝精の匂いがムンッと鼻をくすぐった。

そこはエリザベートの屋敷にある地下の拷問実験部屋。アイマスクで視界を奪われたレイアは鎖で手足をX字に引き伸ばされ、空中で磔状態にされていた。足元に置かれた搾精用ガラス容器いっぱいレイアが吐き出した白濁液が溜まっており、性拷問の凄まじさを物語っている。

「ウフフ、レイアさん、これで百八十八回目の射精

なノダ」

「もうすぐ隊長も幸せになれる。私たちと同じようにな」

背後からはマリィがペニスバンドで膣肉を犯し、前からはシャンティがフェラチオでクリペニスを責めたてる。二人とも完全に洗脳されてしまい、今ではエリザベートの忠実な部下として、レイアの調教係となっていた。

「いかがですかエリザベート殿、レイア姫の仕上がり具合は？」

「これはショウケン様。もちろん完璧、これ以上ないほどパーフェクトに仕上がっておりますわ」

楽しいに微笑むエリザベートが腰をクネクネさせる。上気した肌を見れば、彼女がレイアの調教をオカズに、オナニーしていたことは明らかだ。

「すべての希望を絶たれ、今のレイア姫は身も心もポロポロ。この状態なら、どのような洗脳も思いのまま、いやらしい露出マゾの悦びをたっぷり教え込んでいるところですわ」

レイアの頭部にはサークレットののような金色の環が嵌められ、深層心理に淫らな露出願望を刻み込むべく強力な洗脳液が送り込まれている。

「フッフッフ。仲間たちに責められるのは、どんな気分ですか、姫様」

「あ、ああ……ブル……ゴック……」

男と女の悦楽を味わわれ続け、とろけきつた美貌でブルゴックを見つめるレイア。アイマスクの下の紅腫はきつとどんよりと曇っているだろう。

「お、お願い……ンは……もう二人をやめさせて……ああ……二人に責められるのはいやあつ」

「そう言いながら、チポはますます元気に勃起しているようですが？」

「そ、そんな……ああう……み、見ないでえ……ああ……視線が……熱い……っ」

ブルゴックの視線にも反応してしまつたのだろう。淫核ペニスは勢いを取り戻し、勢いよく反り返っていく。今のレイアにとって、男の視線は最高の娯楽なのだった。

「ククク。それにしても……なんとも無様でふしだらなお姿ですな。どれだけ射精すれば気が済むのですか。一国の姫ともあろうお方がはしたない」

ブルゴックは胸がすく思いで、ネチネチと言葉責めを続ける。高嶺の花である王女を好きなようにいたぶれる下克上の悦びが、イヤでも股間を熱くさせた。

「はあはあ……いや……言わないで……もう、出したくありませんのお……ああうう」

「だつたらこの王家の秘宝をショウケン様にお譲りするのよ。血統の生体認証があるらしくて、あなたの同意が必要なのねえ」

エリザベートが手にした剣の鞘でクリペニスをスウツと撫でる。剣の柄には紅い宝玉が五つ十字に配置され、高貴な煌めきを放っていた。それは神話に登場する伝説の剣、神より授けられたというアルランの正統統治者の証なのだ。レイアも初めて見るモノだったが、そこに感じるオーラには本物だけが持つ迫力があつた。

「はあつはあつ……ああ……それは、それだけはいやよ……ンああ……ア、アルランをあなたたちに渡すなんて……死んでもイヤよ……アアア」

ギリギリまで追い詰められながらも、レイアは首を横に振りたくる。その精神の潔癖さには、これまで何百人も拷問で墮としてきたポイズンマスターも舌を巻く思いだった。

「まあいいわ。それならあなたを露出症の下変態に洗脳して、この臭くてぶつといフタナリチポを生やした姿を国民の前で晒し者にしてあげる。自分がどれだけ卑しい牝豚か、王位を継ぐ資格がないこと

を、民にもあなた自身にも思い知らせてあげるわよ。ウフウフウフ」

「ンあ、ああ……そんなのいやよ……こんな姿を見られるなんてえ……あああつ！」

いやらしい肉棒を生やした姿を晒し者にされる……想像しただけで死ぬほどの羞恥に襲われ、狂ったように首を振りたくるレイア。だがどうしたことだろう、ペニスは勢いを増して勃起していくではないか。

「おやおや、イヤと言いながら、本当は皆の前で恥を晒したいのだろう、隊長」

鎖を荒々しく引き扱きながら、マリィが膣奥を突きまくる。

「ウソについても無駄なノダ。この変態オ●ンポは正直なノダ。見られたい見られたいって言ってるノダ……んふっ、くちゅ、じゅばあ」

シュポシュポと顔を前後させ淫核棒を磨き上げるシャンティ。歯は特殊な粘膜に覆われているうえ、無数の柔髪までも口腔内に形成されており、極上の快楽を与えてくるのだ。

「ンあ、ああ……ちがう……そんなこと思っていないわ……や、やめて……シャンティ……マリィ……もうやめてえ！ あ、ああおとおおつ！」

仲間からの濃厚な色責めがレイアの精神を着実に疲弊させていた。敵ならば気を張ることもできるが、相手が仲間だと思ってもできない。

「おううう、すごいぞ隊長。ハアハア、こんなに締めつけて、もうガマンできないっ！ 出してやる、隊長の中に、それえっ！」

マリィがグンツと深く腰を突き入れる。するとドイルドウの先端から、熱い液体がレイアの子宮目にかけてドクンドクンと噴き出した。それはエリザベトが使う中でも最も強力な催淫媚薬で、何人もを魔人同然に狂わせた魔薬なのである。

「あきやあああああつ……あ、熱い……子宮に入ってくるう……ああああ……んっ」

「あああん、レイアさん可愛い！ 見られているところを想像しながら、熱いミルクを出すノダ」

搾精器と化したシャンティの唇にギユウギユウト強烈に締めつけられ、淫棒から腰椎へ、桃色の官能電流が駆け下り、射精中枢を直撃する。

「ンお……だめえ……レイア……王女じゃなくなつちゃう……露出症の変態になつちゃう……あつああつ、オ●ンコ、イクツ！ チ●ポ、イツちゃう……っ！」

ドプツ！ ドピュツ！ ドクドクドクンツ！

灼熱魔薬に胎内を焼かれながら、断末魔の大量射精を仲間の唇に噴き上げ、レイアは何度目とも知れない絶頂に登り詰めてしまう。とろけきつた紅腫からは、輝きが消えていた。

「ひい……はひい……っ」

やがてすべての力を振り絞ったようにガクンと頭を折って、失神してしまった。

「おお、あの気丈なレイア姫をここまで調教するのは……さすがですな、エリザベト殿。感服いたしました」

強力な催淫媚薬を駆使し、わざわざ異国にまで行って凄腕の調教師に調教させ、最後は洗脳した仲間にとドメを刺させる。執念すら感じさせる手腕にブルゴックは唖るしかなかった。

「あと一步というところですわ、シヨウグン様。ウフウフ。ではお披露目に備えて、牝豚奴隷に相応しい化粧をしましょうかしらねえ。女に生まれたことを後悔するほど、大恥をかかせてあげますわオホホホ」

細めた瞳がキラリと冷徹な光を反射した……。

そしてさらに一週間が経った頃、アルラン王国に

衝撃的な情報が流れた。

「お、おい、聞いたか？ 怪盗レッドチェリーが捕まったらしいぞ」

「ウソだろ、間抜けなブルゴックなんか捕まえられるはずがないだろ」

「なんでも連邦から凄腕の助っ人を呼んだらしい」

「まじか……レッドチェリーもとうとう年貢の納め時か……」

「彼女は王家の生き残り……レイア姫かもしれないっていうのに……残念だな」

「午後から城門前の広場で公開裁判らしい。行ってみるか」

国民たちは同情しながらも、好奇心を抑えきれない様子で、続々と城門前に集まっていた……。

「ウフウフウフ。大勢集まってきたみたいねえ」

そんな様子を遠眼鏡で見て、馬上のエリザベトが楽しげに嗤う。

「レイアちゃん。心の準備はいいかしら」

「うう……っ」

首輪に黒いマントを羽織らされたレイアは悔しげに俯いた。

「ち、ちがう……本当はこんなことしたくない……心の底では自我が抵抗する。しかしエリザベトの瞳に見つめられるだけで、逆らう気力が萎え、命令に従わなければならない気持ちになつてしまう。執拗な魔毒洗脳による暗示効果だった。」

「私たちが頑張るノダ」

「我々は仲間だ。男爵と王家のために、一緒に頑張ろう」

「くっ……二人とも……」

マリィとシャンティが微笑みながら声をかける。しかしその笑顔が乏しく、魂が抜け落ちたような虚ろな笑い方だった。

「いいチームワークねえ。ではでは、お城に向かう」

て出発よお。門を開けなさいっ」
馬の腹を軽く蹴って、エリザベートが行進を始め
る。

「うう……ああつ」

淫核枷に繋がった鎖を牽引されて、レイアもヨロ
ヨロと後に続いた。

屋敷の門をくぐると、すでに道の両側に多くの民
が押し寄せていた。

「おつ、出てきたぞ！」

「あれがレッドチェリーか。なるほど、仮面をつけ
ていても美人だつてわかるぜ」

有名な義賊レッドチェリーを一目見ようと集まっ
た人々は、哀れむようなそれでいて興味津々といっ
た視線をレイアに向けている。

（あ、あああ……）

無数の視線が突き刺さるのを感じて、あまりの恥
ずかしさにレイアは目眩すら感じる。奴隷商人のス
テージに立った時と違って白昼の町中なのだ。桁違
いの羞恥地獄に全身の毛穴から炎が噴き出しそうだ。
（こんな恥ずかしすぎるっ……で、でもお……）

その羞恥と表裏一体となった露出の快感が、ジワ
ツと下腹から拡がって背筋をゾクゾクさせた。度重
なる洗脳と調教によって、レイアは恥ずかしい姿を
見られることに極度の興奮を覚える過淫症の露出狂
になってしまっていたのだ。

「ウフフ。さすが正義のレッドチェリーは人気があ
るのねえ。みんなに見られて嬉しいでしょ、露出マ
ゾのレイアちゃん？」

「ああ……そ、そんな……ことは……」

ズバリ言い当てられ、否定することもできずレイ
アはますます仮面の頬を紅潮させる。

（私……どうなっちゃたの……本当にマゾの露出狂
にされてしまったの？）

ドキドキと心臓は高鳴り、ハアハアと呼吸が乱れ

る。乳首もクリペニスもマントの下でピンツと尖り
立ってしまう。半開きになった唇からは「ああつ」
と、早くも熱い息が漏れてしまう。

「ウフフ。よい仕上がりね」

すっかり墮落した王女を満足げに見つめたあと、
エリザベートは大眾の方に向き直る。

「さあ、皆さん。これから世紀の大泥棒レッドチ
ェリーの市中引き回しを始めますわ。憧れのレッドチ
ェリーの恥ずかしい姿を拝ませてあげますわよお
ウフウフウフ。さあ、まずはご挨拶よ」

エリザベートの命令を聞かされた途端、レイアの
肩がピクンと跳ねた。絶対に逆らつてはいけないと
いう声が頭の内側にこだまし、反抗する気力を消し
去ってしまう。深層心理にまで刻まれた服従心に抵
抗することは、極めて困難だった。

「ハア……ハア……み、皆様……」

レイアは夢遊病者のような足取りで一歩前に出る。
そして本人が意識するより先に、唇が教え込まれた
台詞をしゃべり出す。

「わ、私の名前はレッドチェリーのレイア……世間
を騒がせた世紀の美少女怪盗ですわ。ハアハア……
皆様は私が正義のために盗みを働く義賊だとか、リ
オーネ王家の再興のために闘うお姫様だとか思っ
たらっしゃるみたいだけど……そ、そんなことは全然
ありませんの……」

「ハアハア……私は自らの欲望を満たすために盗み
を働き、それを正当化するために、義賊ぶっていた
だけなのですわ。でも偉大なるブルゴック將軍に捕
まり、自分が間違っていたことを悟りました……ハ
アハア……ああつ……こ、これからは心を入れ替え
、奴隷娼婦として真面目に働き……被害者の方に
弁償していくつもりです。その為に身体を……と
とびきり淫らに改造してもらいましたの」

激烈な羞恥に堪えながら教え込まれた台詞を口に

するレイア。事情を知らない民衆は、レッドチェリ
ーの秘密の暴露に驚きを隠せない。

「ハアハア……見てください……これが私たち怪盗
団改め、売春少女隊となったレッドチェリーの……
覚悟の姿ですわっ」

宣言すると同時にゆつくりとした動作で黒マント
を脱ぎ捨てる三人。

「ウオオッ！」

「なんだ、ありや……」

露わになった美少女怪盗団の姿を見て、観衆はさ
らに大きくどよめいた。

美しき怪盗少女たちの身体には黒い網目のロング
グローブとタイツがセクシーに手足を飾り、踵の高
いハイヒールがそれをさらに引き締めてみせる。胴
体部分はV字の細い紐状のレオタードが肩から股間
まで伸びており、辛うじて乳首の先端とワレメを隠
しているだけだ。

ドワーフ少女は■げな妖精ボディに刺青とボディ
ピアスを施され、エルフ少女は牝牛のような爆乳を
ぶら下げ、そしてリーダーと思われる仮面の紅髪少
女は鳩尾まで届くかという巨根をそびえ立たせてい
るのだ。

「お、おい、なんだよ、あれ……チンポが生えてる
じゃないか……リーダーは男か？ いや、胸がある
からオカマか？」

いずれ劣らぬ美少女でありながら、卑猥すぎる猥
褻ボディを見せつけるレッドチェリーに、観衆は口
をあんぐりと開けたままになる。

「あのフタナリ女が、レッドチェリーのリーダーだ
つて言うのか？ ウ、ウソだろう」

紅の怪盗団のリーダーは王家の血を引く美少女で
あるという噂が流れていただけに、目の前の顔こそ
愛らしいものの、予想を遥かに超えるふしだらな身
体の少女に対して明らかな失望と蔑視が広がって

る。

く。

「ああ、見られてる……見られてますわあっ！」

何百という視線が媚薬の注射となって淫棒に突き刺さる。海綿体がカアッと熱くなり、亀頭が毒々しいほどの赤さで膨らんでいく。

「はあああん……見られて気持ちいいノダ……」

「はああ……もつと……見てくれ……あああ……」

マリリーとシャンティは早くも被虐の官能に火がついたらしく、腰をくねらせ蜜壺に指を突っ込んでオナニーを始めてしまう。

「ああ……二人とも……そんなことしては……」

「レイアちゃんもガマンする必要はないのよ、ほうら、みんなの前でシコシコしなさい」

「ううう……あああ……て、手があ……あああ……」

勝手に……ンああああんっ！」

命令に逆らえないレイアも、露出の快感に痺れた勃起肉棒を抜き始めた。スリスリと手指を動かすたび、甘ったるい痺れが足の親指から膝、太腿、股間へと這い上がり、洗脳と調教により被虐の悦びを刻み込まれてしまった肉体は、たちまち淫らな反応を始める。

「どんな気分か、言ってごらんなさあい」

「はああああ……恥ずかしい……あああ……恥ずかしいの……イ、イイの……オ●ン●ンが……あああ……」

「あう……とつても気持ちいいですわあ……ああん」

仮面少女の昂奮を物語るように、乳首は赤く尖り、蜜爨も熱い牝蜜をジクジクと湧かせていく。幾百もの視線を受けるクリペニスもますます見事に反り返り、威容を見せつけた。

「ウッフフ。もう、あなたたちつたらエロすぎよ」

「従順に墮落の自慰を始めた少女怪盗団を見て、エリザベートは満足そうに微笑む。

「でもまだまだこれからよレイア姫。もつともつと、恥ずかしい目に遭わせて、王女として……いえ、人

間として終わらせてあげるわ……」

周囲に聞こえないように呟きニンマリと笑う。悪魔がこの世にいれば、そんな笑い方をするであろう邪悪な笑み。

「さあ、レッドチェリーたち、オナニーしながらいいから、どんな風に肉体を改造したのか説明するのよ。まずは爆乳エルフからよ！」

美貌のポイズンマスターが乗馬鞭を軽く振ると、マリリーは従順に頷き、自己紹介を始めた。

「ハアハア、了解しました……私はマリリー。エルフ族ですが、痩せすぎな身体では魅力が足りないと思いい、おっぱいに脂肪注入して……ああん……バスト百二十の爆乳エルフにしても良かったです……これからは、エルフ専門の風俗店で働くつもりですので、皆様よろしくお願ひします」

乳房だけでなくお尻や太腿も脂肪注入されてムチムチと張り詰めている。エルフラしからぬポッチャリ体型は爆乳と相まってとても盗賊団とは思えないモノになっていた。首から上は以前のままスリムなので、なんとも奇妙な感じだ。

「特に胸はより多くの股方に悦んでもらうため、媚薬をいっぱい注射して、二倍以上の大きさに豊胸しました。アアッ……今ではこんな風に……」

マリリーが左右から手を寄せて締めつけると、重そうな爆乳は風船のように歪に変形した。そして太い乳頭の先端がプルプルと震えたかと思うと……。

「プシャアアアアッ！ チュルルルッ！」

「ンはあつ……あああつ……見てください……牛みたい……ミルクまで……できるように……なつた私を！ ああんっ！ 毎日、バケツいっぱい搾つても……ああ、また出る……オオオ……出るうっ！」

鼻輪が光る美貌を仰げ反らせると、白く温かな液体がバスタよりも太い水流となって、ピュウッピュウッと迸る。

「ぼ、母乳だ……母乳が出たぞ」

「なんていやらしい身体なのかしら」

妊娠したわけでもないのに大量のミルクを滴らせるデブエルフ娼婦を、観衆は呆気に取られた顔で見続けた。

「ウフウフ、はしたないわねえ。さあ自己紹介を続けなさい、お次はドワーフちゃん」

「うあうん……はい、エリザベートさま……私はシャンティっていうノダ。お口をフェラチオ専用で改造してもらつて、今ではお食事しなくても、精液だけで大丈夫になったノダ。でもそれだけじゃ満足できなくて身体中に、いっぱいタトウとピアスをしてもらったノダ。あああん、どうですか、とつても綺麗なノダア……アアアン」

Aカップのまま、乳首と乳輪だけが肥大化したアンバランスな乳房を取り囲むように赤いハートが、下腹にも女性器を思わせる卑猥な紋様が彫られている。さらに手首や足首をグルリと囲む鎖は奴隷状態を表し、柔らかな頬に彫られた男性器など、まるで娼婦のようだ。

「これからはドワーフ専用のおしゃぶりクラブで働くことにしたので、皆様よろしくなノダ」

両手を広げてクルリとターン。

■体型を彩る淫猥な絵柄はなんとも背徳的で、絹肌の雪白さを台無しにしている。

それだけに留まらず乳首やお臍、耳や舌やラピアにまで金のピアスがいくつも輝き、彼女の変態的な性欲の強さをアピールしているようだった。

「あんなちっちゃいくせにド派手なタトウとピアスとは……」

「可愛い顔してピッチとは……女は魔物だな」

ギャップの大きさに観衆は驚き、呆れ、そして異様な昂奮に襲われている。

（うう……マリリー、シャンティ……）

二人を救えなかった自責の念がレイアの胸を焦がすが、押し寄せる被虐の快楽でそんな余裕も次第に失われていく。

「いいわよお。それでは最後はリーダーのレイアちゃんよ」

「はあ、はあっ……わ、私……レイアはクリトリスがとても敏感で毎日毎日……マ、マンズリしてましたの……その性癖を活かした、フタナリマゾ娼婦になりたくて……ああ……クリトリスを……オ、オ……ン……みたい改造してもらいましたのよ……あああんっ……見てえ、オ……ン……ンにピアスしたり、真珠を入れたりしましたの。とつても立派でしょう？あああん」

見せつけるように腰を突き出し、ブルルンッと肉竿を一振りするレイア。まるで金棒を振り回したように、濃密な淫気が観衆のほうへむわっと押し寄せる。巨根クリトリスにはいくつもの真珠が埋め込まれて凶暴な突起となつて突き出し、さらに尿道に沿っていくつもピアスが施されていた。

「でけえ……す、上げえチ……ポだな」

「俺より立派じゃねえかよ」

自分たちを遙かに上回るレイアの疑似男根を見て、男たちは思わず息を呑んだ。

「ああ……ああ……そんなに見られたらあ……ああむ、オ……ン……ン見られてえ……手が……と、とまらない……はひっ……い、い……っ」

好奇の視線が亀頭粘膜に突き刺さるのを感じ取り、レイアの中で露出の快感が湧き起こる。自分で自分を抑えられないほど昂奮し、火がつくような勢いで肉棒を抜き上げた。

「あつ、はあああつ、いや……ああああおとおつ！イ、イ、イイツ……チ……ポ……見ないで……ああ……あああんっ」

どんなに恥ずかしくて惨めでも、洗脳に支配され

た身体は言うことを聞いてくれない。腰まで前後に振り立てて、おぞましい牡快楽を食つてしまう。

「女のくせにセンズリしてやがるぜ」

「と、とんでもない変態女ね、穢らわしいわ」

「だめ……だめえ……っ！も、もう……私い」

（ああ……見られてる……恥ずかしいフタナリチ……ポ奴隷になつた私を……）

そんな嘲りにすらマゾの炎が燃え上がり、レイアは取り憑かれたように肉棒を両手で擦り上げてしまふ。真珠とピアスを纏つた異形クリペニが、尿道を膨らませてビクンビクンと痙攣する。

「ウフフ、もう射精しちゃいそうじゃない。完全なフタナリの露出マゾ奴隷になるまであと一歩かしらねえ。でもまだイカせてあげないわ」

エリザベトが指示を出すと、衛士がレイアに近づき、疑似陰茎にヒトデのような生き物をまとわりつかせた。それはマリイやシャンティを墮落させた拷問淫蟲だ。

「あひゃんっ?! な、なんですの……? うああん……入つてくるう……ンあああっ?!」

淫蟲はフジツボのような頭をレイアの鈴口にねじ込み、さらに四本の腕をX字に伸ばして亀頭部にしがみつくと、コルクのような強固な栓となつて射精を封じてしまふ。

「ンあああ……こんな……だ、出せない……っ」

急に欲情をせき止められ、動揺するレイア。しかし淫蟲の効果はそれだけではない。尿道内に侵入した蟲の筒状頭部の表面には細かな柔毛が生えており、それが内側で細かく振動し、敏感粘膜をくすぐるように責めてくるではないか。

「バイイン……チュプツ……ジュプツ……ブイイイン……ズズウウツッ！」

「はひいっ……う、うごいてますわあ……な、中でえ……ンひいっ!!」

しかも柔毛からは強力な催淫媚毒が染み出して、射精本能をダイレクトに刺激する。たちまち肉棒はビキビキと血管を浮き上がらせ、亀頭も真っ赤に膨れ上がる。

「んああああおつ……すごい……すごいのに……だ、出せない……出せませんのお……ンおおっ」

射精封じの苦しさに悶絶し、それでも肉棒磨きをやめられないレイア。焦れつたさが手を動かし、それがさらなる焦燥を増幅させる。血管が尿道が、破裂寸前に膨れ上がり、塞がれた鈴口を苦しげにパクパクさせた。

「ウフウフ、その蟲に取り憑かれたら最後、一生死ぬまで勃起したままなのお。これからずうと私が射精管理してあげますわあ」

「あ、ああ……そんなあ……これ……くるしいの……はあ……ツ、ツライですわ……ああう」

仮面の美貌に生汗をタラタラ垂らし、レイアは悶絶した。いくら淫棒を擦っても、蛇の生殺しのようにジワジワと先走りを漏らすことしかできない。狂おしいほどの焦燥がますます膨らむばかりなのだ。

「奴隷志願するだけあつて、エロエロだな」

「くうっ……見ているだけじゃたまんねえ。金は出すから一発やらせてくれねえか」

三人の媚態に引き寄せられ、男たちが周囲に群がってきた。

「あらあら、これじゃあ進めせんわねえ。仕方がないから一回百フルムでフェラチオサービスしてあげなさい」

「あああん……わかつたノダ。いっぱいっばいお口を犯して欲しいノダア」

三人の媚態に引き寄せられ、男たちが周囲に群がってきた。

ある日の出来事



夏といえは怪談、怪談といえは人魂、人魂といえは—

怨霊退散!!

ふたご巫女

死神のお仕事

か の う 嘉納あいら

漫画 COMIC

自分不器用ですから…



如月珠音
如月神社の双子巫女の姉。おっとり巨乳で、男の靈に憑かれやすい。



海へ来た



如月鈴音
如月神社の双子巫女の妹。靈力は弱いがしっかり者の常識人。



平和だなあ……



真中
如月神社に押しかけて居候している17歳。珠音の中学時代の同級生。



でもそろそろ言わないと…その為に来たんだし…

あと●●●日で…



世界が滅亡しちゃうってコト

平和な日常



いつも真守の催眠術にからないかと恐れる鈴音



スズ・ネ・さん



……



お前は平和でいいな

いいなア！真守ちゃんは鈴音ちゃんといつも楽しそうで！！

催眠済み

イセリア 英雄戦記

the Legend of the Isepa War

第27話 火の王女と砂の王子

おおくまたぬき
小説 / 大熊狸喜

ぼたん
挿絵 / 牡丹

イセリアを放棄したファイオナたちは、
フェイエン武踏会へと足を踏み入れる。
しかしそこはグラマトンの手に墮ち、
凛々しき女戦士たちを待つのは、
魔物による洗脳陵辱!



まだ昼前だというのに、グラマトン聖教会の空は、湿った暗い雷雲に包まれていた。

それはもしかしたら、教会で行われている暗黒儀式の影響かもしれない。淫祇邪教のシンボルを高く掲げた祭壇を、黒いフードを被った男たちが何重にも取り囲んでいる。

六メートルほどの中心部では、捕らわれたイセリアの女王、アリオナリブリティッシュが、男たちによって肢体を罵られ続けていた。

首輪ひとつで繋がれた女王は、艶めかしい女体を四つん這いの姿勢で、下と前後からの三人による同時陵辱。騎乗位で根元まで犯す男には、質量を増した爆乳を持ち上げられてこね回され、赤い乳首を指遊びされている。

色素の薄い後乳を深く肉抽送されながら、タツプリの白い尻脂肪を撫で上げられて、ポツテリとツヤツヤな唇にも極太いペニスを含んで舌舐め。「んぶ、んく、んひゃああつ——あああつ、素敵ですううつ——皆様でつく、んむんつ——もつほ、もつと私につ、精液をおおつ——んむぶつ！」

聖母とまで謳われた清楚な美貌を官能に湧きさせて、快感で焦点を失った涙の眼差しは、官能か絶望か。

どれほどの間犯され続けているのか、アリオナの白い肌は紅葉し、髪も頬も唇も、乳房も背中も、白い巨尻も前後の女乳も、男たちの粘りつく精液を垂れさせ、粘糸を引いていた。

「これがイセリアの女王様かよお、嬉しそうにエロ尻振りやがってっ！」

「舌使いなんで、どんな娼婦だつて顔負けのイヤらしさだぜ！」

男たちは淫祇邪教の信者。フードの中は全裸で全身を剃毛している上、その肌を白化粧で染め上げていた。

儀式に参加する際に、教会特製の興奮薬を飲まされたから、勃起は普段と比較にならないほどの硬度だ。

「目一杯つ、アンタのマコに俺の子種を吞ませてやるうつ——んうつ！」

見ず知らずの男に犯されて、胎内に精液を吐きつけられてしまふ女王は、しかし蕩けきつた臉を悦楽に震わせて、歓喜の艶声をあげる。

「っんああああつ——またいきますううつ——アリオナつ——皆様に犯されてええつ——しあわせつ、ですううううううつ——つ!!」

胎内での勃起蠢動に、全身の絶頂が止まらない。

思考が停止してレイプの官能に染められてしまったイセリアの女王は、涙しながら強姦信者たちに、感謝の淫声を捧げている。

そんなアリオナの腹部は、妊娠十ヶ月に届こうかと見まごうほどに膨らんでいた。聖母の胎内に巣くうのは、邪教が仕込んだ魔王の胎児。

強姦の男たちは気づいていない。魔胎児は、アリオナの官能と男たちの精液、そして男たちの命を糧に、成長を続けているのだ。

吞まされた薬品は男の快楽中枢を刺激して、命の危機感覚を麻痺させる。数回の射精で命を吐き出すと、その晩、生涯を閉じる。

そんなすべてを知るスレアが、我が神の復活が順調な様子に、満足げな笑みを見せていた。

「んんん。メイベルローゼの件は予想外でしたが、これなら、教祖様にもエバ様にも、ご満足いただけるご報告ができますわ〜」

微笑む女錬金術師に伝えるように、アリオナの胎内に宿る魔王が、ギラリと邪眼を輝かせる。

しかしその輝きの真なる意味に、スレアが気づくことはない。

ミーシャとメイベルローゼと別れてから、数日後。

イセリア王都から避難するフィオナたちが、同盟関係にある隣国、フェイエン武踏会に到着したのは、昼を少し過ぎた頃だった。

王都にやってきたのは、王女フィオナと忠義の女騎士セリーヌ。それにオラリオ連盟の反政府組織「自由の剣」の女戦士シェリルの三人。

数万という避難民はひとつ前の宿場街で待機して貰っていて、護衛たる騎士隊の指揮権は、第三騎士団の副団長であるレーシアに預けてあった。

(聞いていた通り、この街にも、戦の火が……)

家など、戦火の後が散見できる。三日ほど前にグラマトンとの戦があったせいか、一旦とはいえ戦いが収束している現在でも、街には戒厳令が敷かれている。

昼の中心街に誰ひとり見かけないのは、フェイエンの人たちが戒厳令を守り、家に籠もっているからだろう。

昨夜、宿場街に到着してすぐに、フェイエンの王である宝仙に謁見を申し込む使者を送ってあった。

難民を引き受けてくれる約束は取りつけてあるけれど、その前にフィオナ自身がご挨拶を申し上げる。

そのために、三人で参上したのだ。

現在、フィオナはイセリアの象徴であるはずの「精霊装甲」を失っている。今着用している白いロングドレスも、途中の街で購入したものだ。

それでも、王家の人間として最低限の飾りは必要だからと、執事たちが持ち出したくれた多少の宝飾類。

これだつて、イザとなつたら高額な金銭に換える、という意味がある。彩りも美しく豪華な瓦作りの王宮に歩を進めると、棍を携えるふたりの衛士に止められた。

「イセリア英雄公国の、フィオナリブリティッシュで御座います」

美しく丁寧な挨拶をする少女姫に対し、衛士たちは厳格な対応を以て、謁見はフィオナひとりだけですと勧告。護衛もなしの謁見。異様な対応にセリーヌが一步前に出た。

「無礼を承知で申し上げますれば、フイオナは女王が名代。如何な事態とはいえひとりで参れとは、少々礼を失する行為ではありませんか？」

少し強い視線で異議申し立てをする忠騎士を、制するフイオナ。

「セリーヌ：」

質素だけど上品なドレスと、僅かな貴金属だけで身を飾った少女姫は、穏やかなれど凛とした眼差しで、了解の返答をする。

「承知いたしました。なにとぞ宝仙様との謁見を、お願いいたします」

セリーヌたちから引き離されて、ふたりの衛士に護られながら、フイオナは王宮内へと姿を消した。

正面玄関でとり残されたセリーヌの耳に、シェリルの呟きが聞こえる。

「……何だ、このイヤな感じは……」

王宮前の広場で直立して主を待つ真面目なセリーヌは、厳しい美顔を崩さないシェリルが気になる。

「どうしたシェリル、さつきから何を気にしているのだ？」

「あたしはカンで生きてきたんだ。ここは何か臭い……!」

赤髪を靡かせる女戦士の言葉は、青髪の女騎士にはイマイチ不明瞭だ。

「……現在のフレイエンは、グラマトンとの戦時下にあるからな。確かに、安全な状況とは……むっ!」

待機の間は、唐突に遮られた。美しくも禍々しい響きが、広場全体

に木霊する。

「アラ、ブリウム、ネレズザリイ、ルブレゼリゼン、ダグネバラギイ!」

セリーヌは聞いたことのない言語だ。

失われた暗黒魔法とおぼしき呪文が唱えられると、広場の地面に魔法陣が浮かんで、赤く閃光する。

その直後、まるで水面に浮かび上がるように、地中から数十体の魔物が出現した。

「何……?!」

召喚したのではなく、罨として地中に魔物を潜ませていたのだろう。

ふたりを遠巻きに囲む怪異は、オークやオーガやコボルド、リザードマンや猿人など、低級な亜人種ばかり。

しかし皆、その下半身は異様なほどに性興奮をしている。

「魔物だと……?!」

「イヤな予感が当たりやがった!」

周囲を遠巻きにする魔物群に対し、素早く剣を構えたふたりは、背中合わせに防御優先の体勢をとった。

「ふたりとも、こちらを見なさい」

命令口調な女の声が、王宮の二階テラスから聞こえる。呪文を唱えた声と同じ人物だろう。

見上げたテラスに現れた五人の影に、広場のふたりは我が目を疑った。

友好国であるこのフレイエンで、フイオナが背後手に拘束されているのは、イセリアの姫を捕らえているのは、

「氷継、エルス……! それに、ドロー様……?!」

「お久しぶりですわね、セリーヌ」
クスクスと笑うエルスは主の左側に立ち、その首に槍を突きつけている。

右に位置する大団長ドローは、長剣エルダイータを、フイオナの首に当てていた。

拘束の縄を背後で受け持つのは、素顔の氷継。

怯える姫に比し、三人ともドコか夢心地な、異様な笑みを浮かべている。

そして四人から少し離れた位置に立つ、純白ドレスの初見な女。

女騎士と女戦士をあからさまな侮蔑の視線で見下し、邪悪な雰囲気を感じるともしない。

「初めまして、あなたがイセリアのセリーヌですね。それともう一方は……ああ、オラリオの逆賊、シェリル……でしたかしら?」

鋭い視線を突きつけるセリーヌに、女は意外にも、自ら正体を明かした。

「私はエバールケルグラマトンと申します。宝仙王に替わり、このフレイエンの代表を務めさせていただきますので、おられますわ」

「なっ、何だど……?!」

フイオナが捕らえられてしまった事実から、この女の話がウソではないことがわかる。

すでにフレイエンが墮ちていた事実には衝撃を受けながらも、忠義の騎士は一瞬で思考をした。

（どうする……!）
フイオナが捕らえられている――。

氷継とエルスとドロー様のあの状態は、魔力によって洗脳されていると見て間違いはない――。

フレイエン陥落のウラには、きつとドロー様たちを手駒にした、この女たちの奸計が――。

だとしたら、現状、すべての事態が絶対的な危機だ。

（何としても、フイオナだけは救出しなければ!）

メイズVIIが解放され王都を放棄した現在、フイオナはイセリアの人々にとって、さらに帝国やグラマトンと闘う全ての人々にとって、最後の希望だ。

（この上、フイオナまでもが敵の手に落ちてしまったら……もはや対抗できる術はない……!）

セリーヌは自らの命に替えても、主の奪還を模索。

隣では、シェリルが油断なく周囲を見回していた。きつと同じことを考えているのだろう。

しかし白い聖服のエバは残酷に笑うと、当然の如く騎士たちの一手二手先を封じ込めてきた。

「抵抗されても厄介ですから……まずは私に対する敗北の証として、完全な武装解除をしていただきますでしょうか?」

「か、完全な武装解除……だと?」
つまり刀だけでなく、防具に至るまですべてを捨てよ。という意味だ。

睨み上げる女騎士を、白衣の聖女は余裕の笑みであしらう。

「……フイオナの首に、血のネックレス

スを描いてもいいのですよ?」

少女姫の白くて細い美首に、ツンと左右から切っ先が押しつけられた。

「きつ、貴様っ——っ!」

数瞬の躊躇の後、激昂するセリーヌに、シエリルが小さく耳打ちをする。

「…悔しいが今は言う通りにするしかないぜ。生きてチャンス待つんだ」

確かに、今はそれしかない。

ふたりはテラスの女を睨みつけながら、武装解除を始めた。

「セ、セリーヌ、シエリルさんっ!」

親友たちの敗北に、フィオナの胸が締めつけられる。

漆黒の剣クラウソラスを地に落とし、ブレストアーマーや手甲を外してゆく。

シエリルも、刀やマントを捨てて、手足のアーマーを解除。

ロングなバトルドレスだけになったセリーヌと、衣服状態のシエリル。

しかしエバは、まだ許さなかつた。

「完・全・解・除…と、言つたはずですよ? 脱ぎなさい:全部、ね」

「……ちっ!」

意味を理解したシエリルが、大胆にシャツを捲り脱ぐ。

「今に見ているよ:っ!」

人のいない中央広場で赤髪の女戦士が巨乳を溢れさせると、青髪の女騎士もさらなる脱衣。

周囲を囲む怪異たちも、美しいふたりのストリップに、股間の肉棒から先

走り液をこぼし始めていた。

バトルドレスを脱いで大きな乳房を

包む戦闘用の下着を外すと、陽の光に白い乳房と桃色の乳首が露出される。

思いきって最後の一枚を脱ぎ捨て、セリーヌとシエリルは真昼の中央広場で、淫邪な怪異に囲まれて、一糸纏わぬ全裸となった。

怪物たちの強烈に邪な視線が、乳房の膨らみや剥き出しのヒップ、隠した秘処に集中して視姦。

「ふふ……いい恰好だこと」

両腕で身体を隠す情けない恰好を、討つべき敵の女に笑われる。

セリーヌたちに向かつて、エバがクルクルと指を廻したら、脱衣したふたりの武装すべてが魔法陣に包まれた。

十数メートル離れた王宮正面の入り口まで移動されると、武器は魔法の境界に隔離されてしまう。

(あれでは……取り戻せない:っ!)

フィオナを人質に捕られ、武装を解除されて全裸にされて、武器のすべてが完全剥奪。

一步一步、確実に追い詰められてゆくセリーヌたち。

そんなふたりにさらなる追い打ちをかけるように、エバの隣に、闇の錬金術師スレアが現出した。

「エバ様、教皇様へのご報告を終えました。それと……あらら」

テラスと広場を見渡すと、それだけで現状を理解したらしい。

視線だけで聖女からの了解を得ると、ふたりの足下に、首輪が投げられた。

自ら付けると、目でわかる。

女騎士たちは、拾った首輪を自分の手で装着させられた。

「こんな…屈辱になど:っ!」

負けて堪るか。と呟く瞬間、首輪は魔法を発動。

「な、何だよこれっ——あうっ!」

細い紐状の触手が数本伸びると、タププリの乳房が根元から巻き上げられて、グッと突き出されて強調。

白い柔乳脂肪の先端では、桃色の媚突が陽光に艶を見せる。

さらに両腕も、背後にキツく拘束されてしまった。

「こ、これでは……!」

隙をうかがうどころか、反抗もできない。

無抵抗にされた女ふたりを、エバは残酷さを隠さない瞳で見下している。

隣で微笑むスレアは、その目的をえげつないほどハッキリと言いきつた。

「さんざん魔物たちの命を奪つたおふたりには、その罪を、その身体で償っていただきますようか」

つまり、魔物たちによる強姦凌辱。

「ふ、ふざけるっ——っあうっ!」

抵抗しようとしたふたりの身体が、しかし淫邪な力に呑み込まれた。

スレアが魔法を唱えた途端、首輪の魔力によって、女体が強制的な興奮状態にさせられたのだ。

心臓がトクトクと鼓動を早め、乳房と子宮が異様なほど、飢餓感を湧かせられてゆく。

(こ、こんな…身体が、震える:!)

閉じられた割れ目の奥がチユク…と息つき、熱い恥蜜が潤ってくる。

「こ、こいつらあ……うく:っ!」

同じ性感責めに晒されるシエリルが毒づくどほぼ同時に、エバも辱めを思いついたらしい。

氷継に命じると、牢獄から下衆な囚人をふたり、広場に連行させた。

「ひいっ——か、怪物だああつ!」

魔物群に怯えるふたりの男に、偶然だけど、セリーヌは見覚えがある。

イセリアで半年ほど前、騎士団の会合の帰り、夜道で女性に乱暴していたため、打ち倒した暴行魔たちだ。

怯える犯罪者たちに、エバは楽しそうに、再び太古の呪法を施す。

「グリニャレバラリユバラリ、ドズマニユバラゼルユバ……ピラッ!」

聞き取りにくい闇の術式が完成すると、男たちの身体が赤く発光。

「うぐぐっ! 何だっ——ぐアッ、ぐああアアアアアアアッ!」

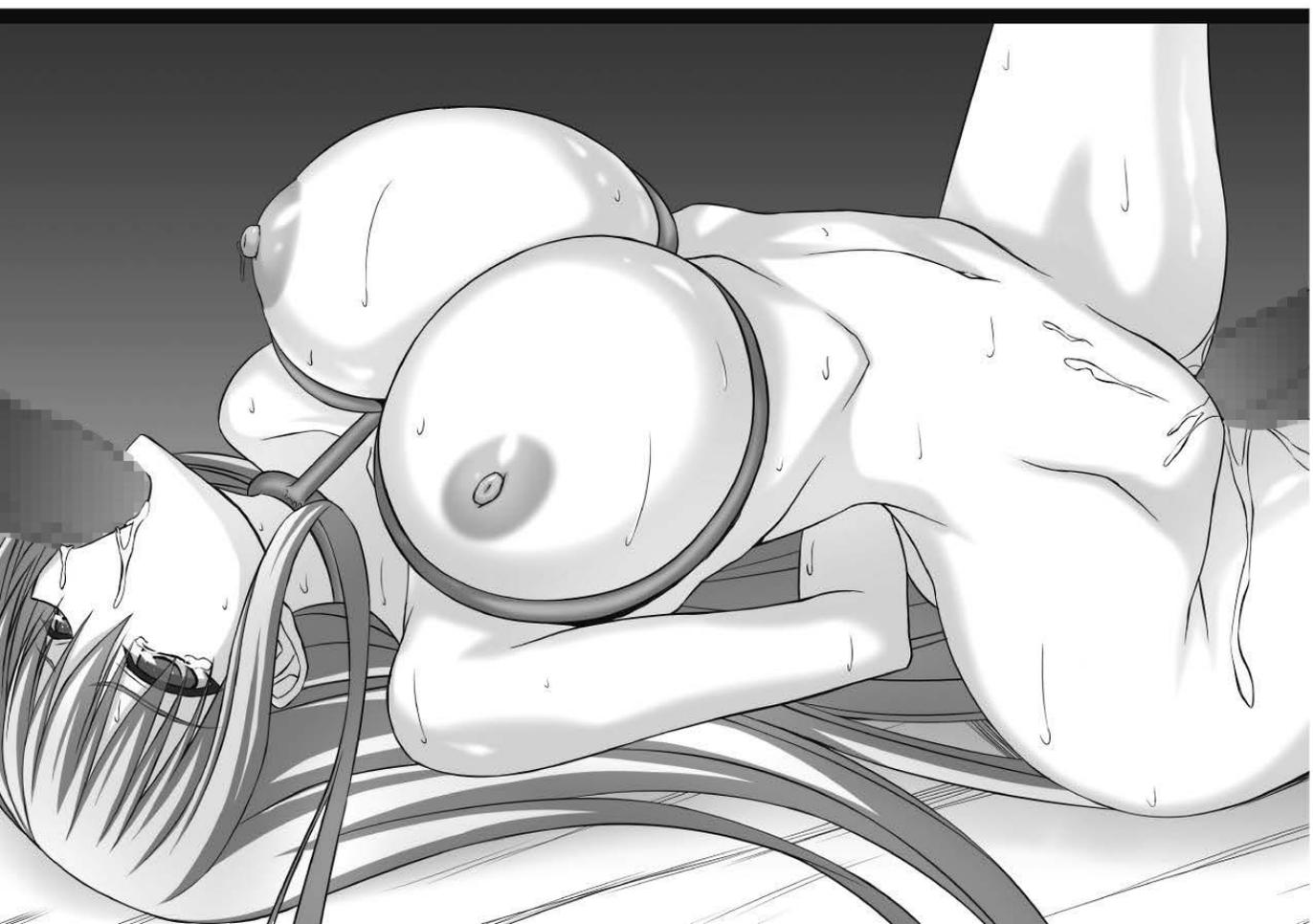
男たちの顔が、身体が、変異してゆく。鼻が尖り、首と胴体が引つ張るように伸びて、衣服の破れた肌は短毛がビッシリ。

爪が伸びて、脚が獣形となり、尻には短い尻尾が生える。

数秒と悶え苦しんで光が収まると、ふたりの姿が変異していた。

「グルルル…ナンだか、ソーカイなキブンだあああ!」

「な、何という:!!」



停止させられてしまう。

上下突きさされる肢体は乳房をタブタブと激しく揺らし、上気した肌が性官能で小刻みに震える。

子宮から背筋と脳までが直結して、身体を中心に上下から、肉官能で染め腫とされてゆく。

このままでは、もう——。
「んふつくつくううつ——やめろふぐつ——イッ——イイヤらあああつ！」

イク。という言葉葉を、擦り潰されてゆく理性で必死に呑み込む。

途端に、追い詰められている事実が惨めな被虐感に変換。女体は自ら、我慢の限界を突破させられてゆく。

唇と舌が、濡れる膣壁が、牡を締めつけて射精を促した。

女のオネダリを見抜いた強姦魔たちが、勝ち誇って女騎士に止めを下す。

「ホしいのかよ、オンナキシサマがようつ、ゲツゲツゲツ。ナカダシしてやるぞつ、ウラアツ！」

——ツツツチュブツツ！
「つ——つんはあああつ！」

体重を乗せた一撃で、子宮壁が強く叩かれた。

その瞬間、青髪騎士の脳裏が眩く白光。肢体が跳ねて、性絶頂へと叩き上げられた。

「イイっ——イくうううつ——んっあつあああつ——奥まで犯されてへええつ——イってしまふううううつ!!」

卑しい強姦魔たちに見下されながら、恥ずかしい告白の中、犯されたセリ

又は拘束肢体を痙攣させる。

白いヒップと豊かな乳房がブルブルと弾み、乳首もキユウ……と赤く硬化。同時に、隣で犯されるシエリルも、恥辱の頂点へと上げられていた。

「ヒクヒョおおつ——イかされつ——イかひやれるううあああああつ!!」
健康的な肌を震わせて、女戦士はレ

イブ絶頂を迎えさせられる。
下向きで質量を増した巨乳がタブブルつと揺れて、大きなヒップが恥ずかしくうに震えた。

ふたりの姦女は、牡魔獣たちの射精を同時に味わわれる。

「あのセリーヌに、ナカダしいつ！」
——ツツツビユリユリゆるりゆるりゆるつ、ドぶユルル……ツツ!!

セリーヌの子宮粘膜が、粘度の高い強姦魔の精液で満たされる。

「ああ……な……い、ばいに……！」
穢れた男たちの精液という汚辱感なのに、胎内を満たされてしまうと、女の充足感へと塗り変えられてゆく。

「いやら……ああ……もつと、びゅ……つて……」

子宮が膨らむほどの粘液詰めに晒されるシエリルも、魔物妊娠の恐怖を上回る絶頂快感の喜びで、脳が染められていた。

「あは……あたひ、らか……あついい……」
口内で吐き出された精液も、ふたりの肉体は何の疑問も抱かずに自ら溜飲

「んくつ——つ!! なぜへつ、わらひは呑んつ——んくん、んはううつ！」

幾度も勝手に飲み干す自身の身体が、理解できない。

穢れた行為に自尊心が傷つく。なのに、牡の精臭で鼻腔を擦られると、それだけでまた思考が停滞させられてしまう。

絶頂から降り始めると、両腕の拘束触手が解かれる。
自由を得たかと思つた途端、心臓がドクンつと鳴つた。

「こ、これ、は……！」
驚愕する、セリーヌ。

鼓動が、意識が、熱く激しい魔力に覆われてゆく。

かつて経験した女騎士だからわかる。これは、洗脳——。

セリーヌの反応に、スレアは笑う。
「その首輪は、牡の精液で少しづつ女を洗脳する首輪です。まずは確実に肉体を奪つて、あとは精液を浴びるごとに、少しづつ意識を……」

セリーヌとシエリルだけでなく、フイオナも愕然とした。

「そ、そんな……あまりにも……つ！」
青ざめる少女姫と性的危機に焦燥する女騎士たちに、エバはさらに恐るべき事実を告げる。

「街の外にも、モンスターが出現させました。イセリアの避難民がいるとしたら大方……この国から一番近い宿場街あたり。クスクス」

「なっ——つ！」
モンスターの軍団が、民の待つ隣街へと向かっているのだ。

しかも魔物は、ハーピーなど空からの攻撃に特化した種が中心で、さらにガーゴイルなどの魔法生物も混ざっているという。

「男性は皆殺し。女性はさらつて、儀式の生け贄に使いましょうか」
(そんな魔物群に襲われたら……?)
空からの攻撃に加え、ガーゴイルは魔法以外に有効な対応策がない。

現状、レーシアの地上部隊では対抗のしようがないのだ。

「おつ、おのれつ！ エバつ、スレアアアつ！」

このままでは、フイオナを助け出すこともできず、イセリアの人々も魔物たちに殺されて——。

それなのに、身体を自由を奪われて魔物たちに犯されて、さらに敵の手駒へと、確実に洗脳されてゆく。

それがわからされているのに、抵抗の術は何もない。

「街の人々には一切つ、手など出させつ——つあああああつ！」

怒りに絶叫するセリーヌの肌が、別の獣姦に晒された。

悪に堕ちた種族、ダークドワーフに持ち上げられて、騎乗位姿勢で真下から強姦。

さらにコボルドたちも寄つてきた。
「勃起ヲ両手デ愛撫シロ、ゲツゲ」

「だ、れが……くうつ、堅い……！」

こんな命令なんて訊く気もないのに、洗脳されてゆく身体は、強姦魔物に対して優しい愛撫を施す。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>